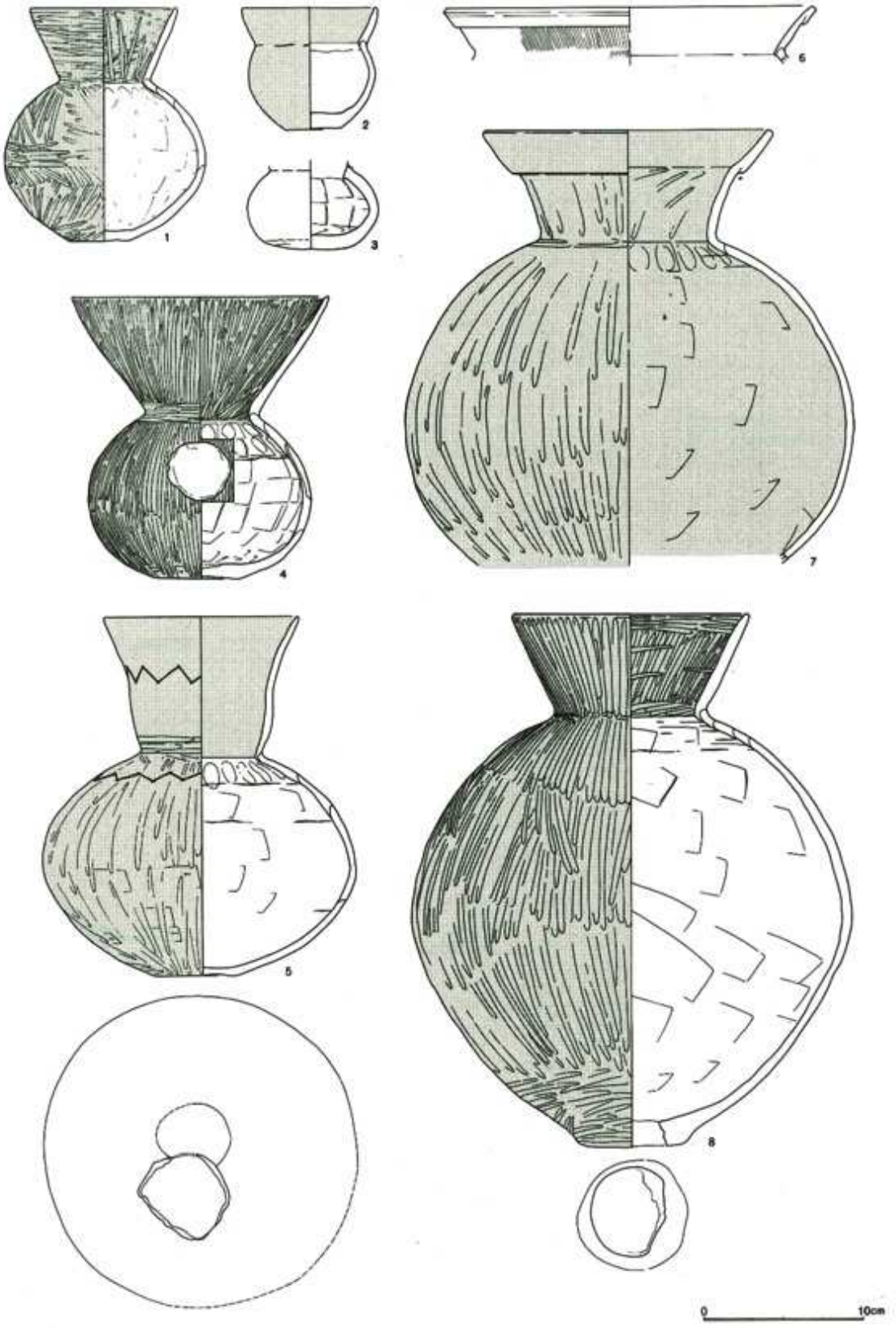
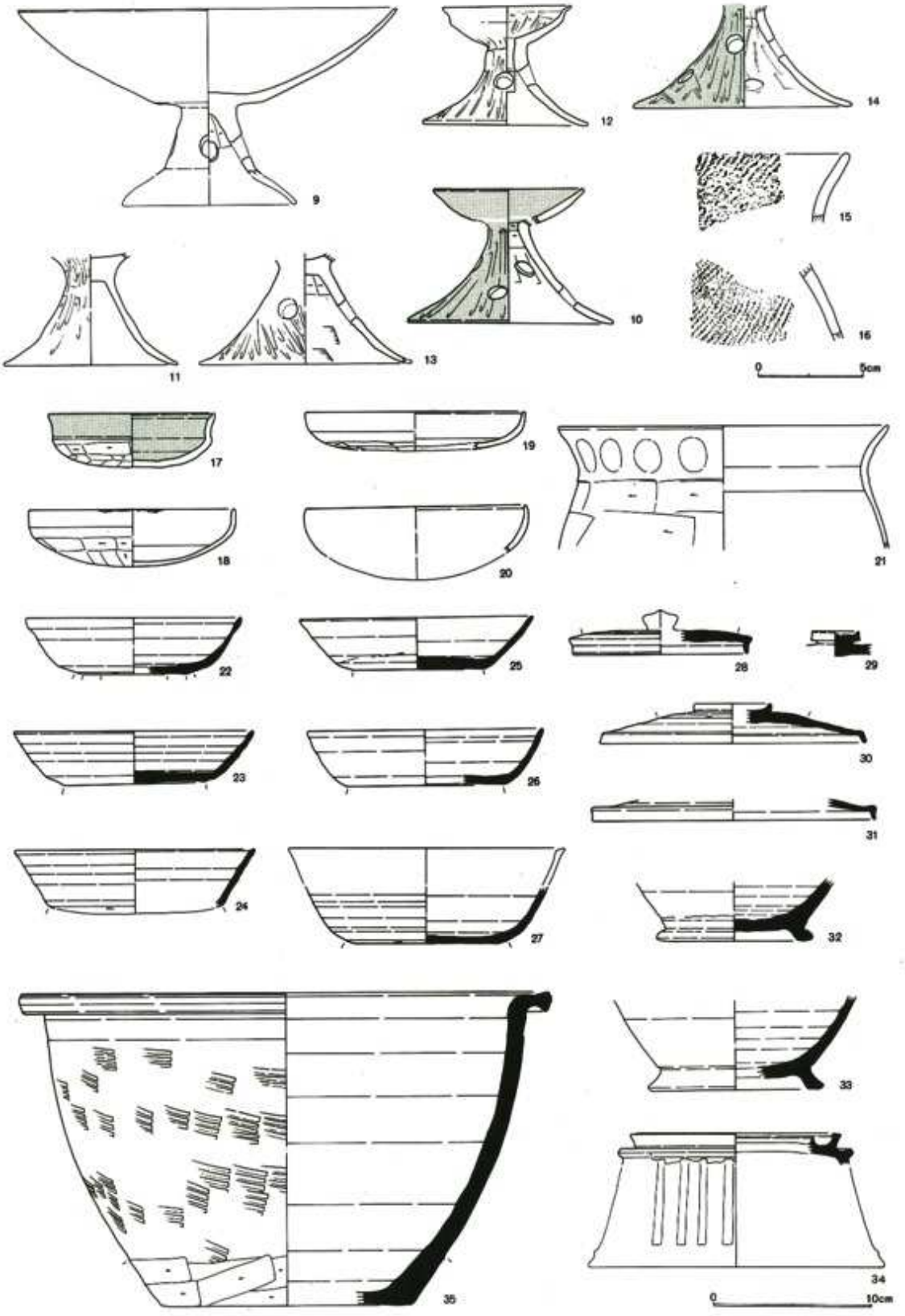


第344図　C区第17号方形周溝墓出土遺物(1)



第345図　C区第17号方形周溝墓出土遺物（2）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
14	小形器台		6.4	13.5	ABC	C	浅黄橙	70%	№75 北溝覆土下層(+25cm) 赤彩
15	甕				ABC	A	橙		南溝覆土 吉ヶ谷系
16	甕	10.4	3.4		ABC	A	にぶい橙		南溝覆土 吉ヶ谷系
17	坏	10.4	3.4		ABJ	A	にぶい橙	80%	覆土 混入 赤彩
18	坏	(12.9)	3.6		BE	B	にぶい橙	20%	東溝覆土 口唇部に油煙状物質付着
19	皿	(13.9)	2.4		ABE	B	橙	20%	北溝覆土 混入
20	坏	(14.0)	3.0		BE	A	にぶい橙	10%	東溝覆土 混入 北武蔵系
21	甕	(20.8)	7.8		ABE	B	浅黄橙	35%	東溝覆土
22	坏	(13.5)	3.5	(6.6)	ABC	A	灰	20%	北溝覆土
23	坏	15.0	3.4	9.0	ABC	A	灰	75%	北溝覆土
24	坏	(15.0)	3.6	(11.0)	ABC	A	灰	10%	北溝覆土
25	坏	14.7	3.3	8.2	ABC	B	灰	80%	東溝覆土 混入
26	坏	(14.8)	3.5	(6.8)	ABC	A	灰	25%	東溝覆土 混入
27	椀		3.6	(9.0)	ABC	B	灰	25%	北溝覆土
28	蓋	(11.0)	1.5		ABC	A	灰	25%	北溝覆土 壺蓋
29	蓋				ABC	A	灰白	80%	北溝覆土 鈕片
30	蓋	(16.7)	2.5		ABC	A	灰	25%	北溝+南溝 鈕径4.7cm
31	蓋	(17.8)	1.3		ABC	B	灰白	10%	東溝覆土 混入
32	壺		3.6	8.1	あBC	B	灰	60%	覆土 混入
33	長頸瓶		5.8	(10.7)	ABC	B	灰	20%	覆土 混入
34	円面硯				ABC	B	灰	10%	硯面径約9.4cm
35	鉢	(33.4)	19.6	(16.0)	ABC	A	灰	35%	北溝覆土

C区第18号方形周溝墓(第346図)

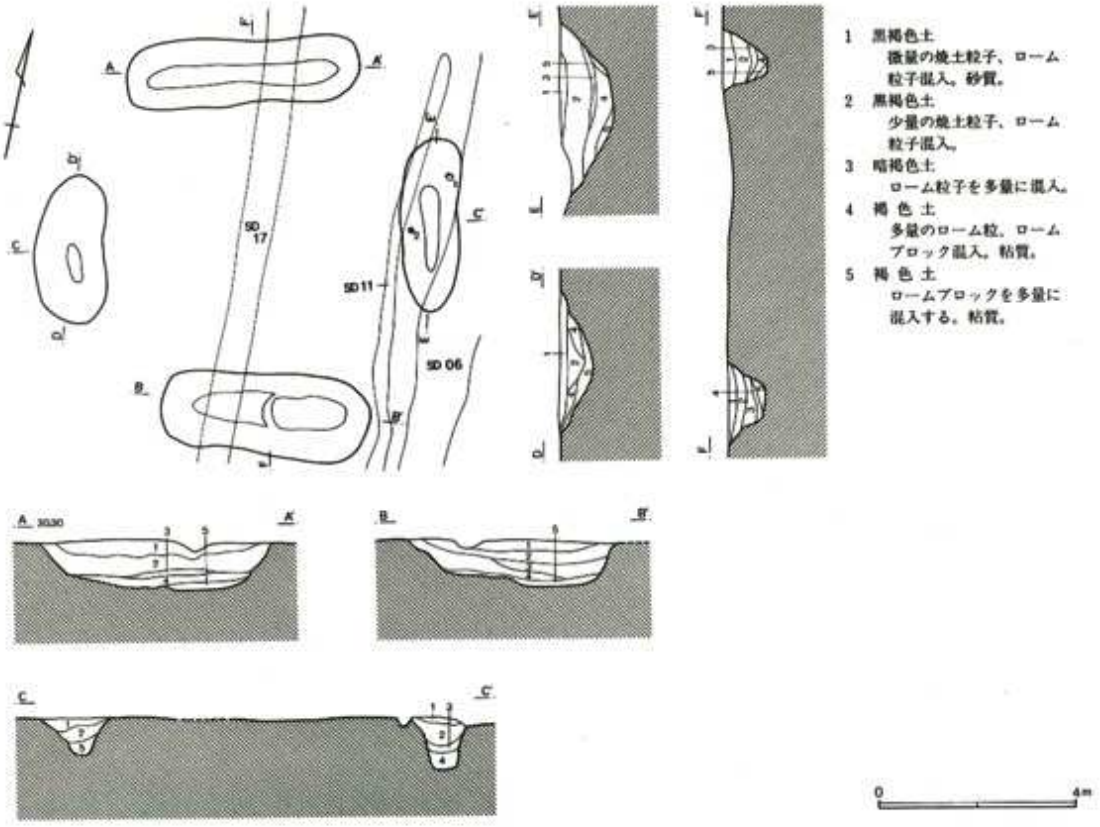
調査区ほぼ中央部のF・G-23・24区に位置し、北側に第14号、西側に第17号周溝墓が近接して構築されている。方台部及び周溝上面は土壙やピット、溝跡の攪乱を受け遺存状態はあまり良いとはいえない。形態は四隅切れタイプで、方台部は南溝が開き気味となるために台形に近い形態を採る。方台部上面の規模は、東西長6.12m、南北長は中央部で5.50mを測り、規模としては非常に小形である。主軸方位はN－10°－Wを示す。

周溝の形態は基本的に長楕円形を呈する。南北の周溝が長く側縁は直線的であるのに対し、東西のそれは長さが短く、外縁部に膨らみをもつ。周溝は小規模の割には深く掘り込まれ、底面は中央部に向かって深くなり船底状、あるいは擂鉢状を呈する。周溝の横断面形態は総じて逆台形で、壁は方台部、外縁部ともに鋭く立上がる。

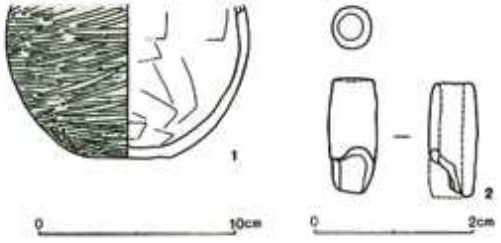
各溝の規模を長さ、最大幅、深さの順に列挙すると、北溝が4.80m、1.40m、0.96m、東溝が3.48m、1.20m、1.12m、南溝が4.28m、1.72m、0.96m、西溝が3.00m、1.44m、0.75mとなる。

周溝覆土は概ね5層に分かれる。土層含有物は溝毎に若干の相違はあるが、堆積状態には大きな差異は認められない。第3層以下は何れの溝もロームが多量に含まれていた。おそらく方台部盛土の崩落土が主要な堆積要因であろう。

出土遺物は極めて少なく、第347図1の坩と2のガラス製の管玉は東溝から出土した。後者は覆土下層から出土しているが、東溝は断面観察によっても特に溝内埋葬を示すような土層堆積は認められず、溝内埋葬に伴う副葬品と断定するには至らなかった。



第346図　C区第18号方形周溝墓



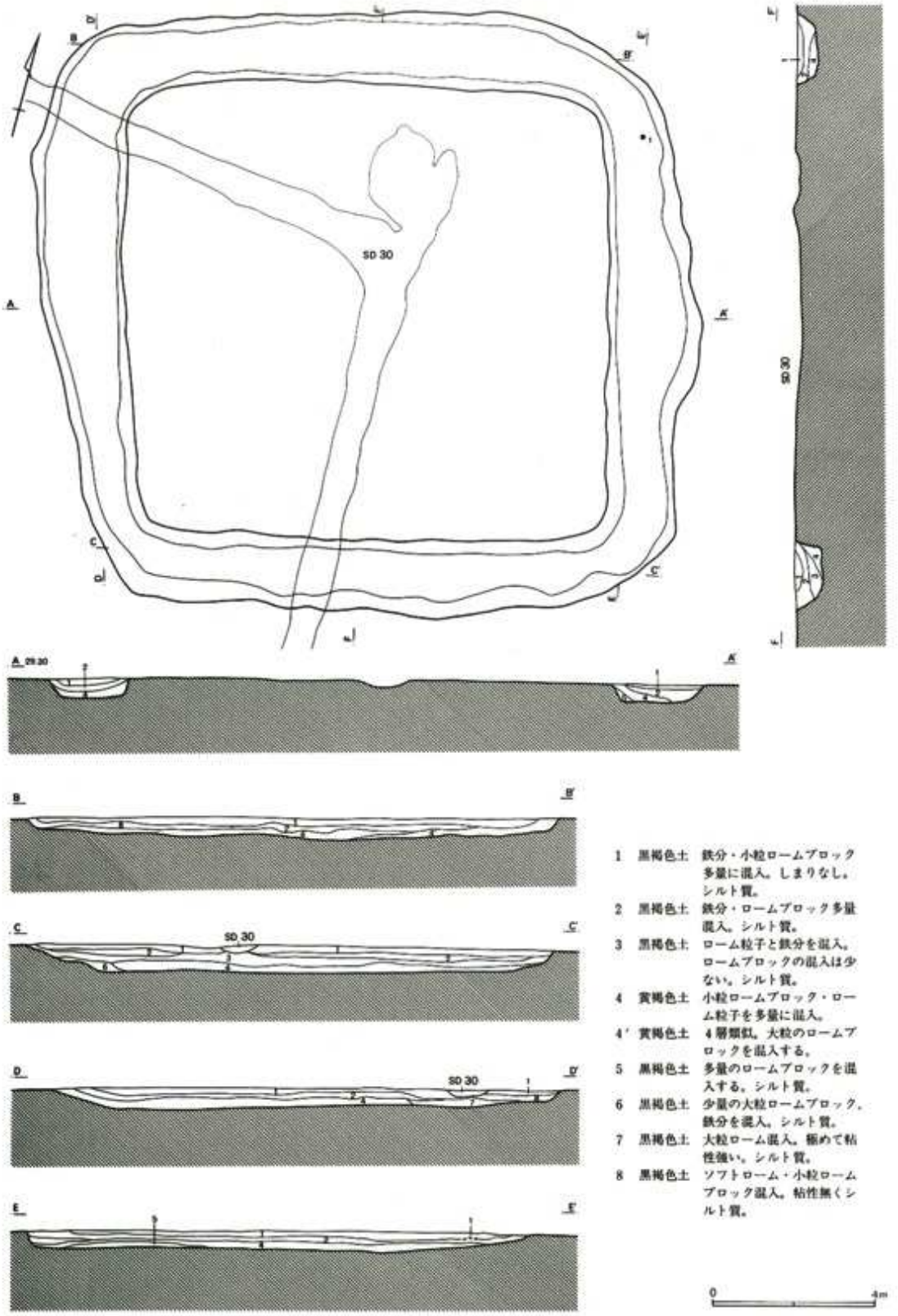
第347図　C区第18号方形周溝墓出土遺物

東溝遺物出土状況

1の坩は東溝の外寄りの肩部から出土した。口縁部を欠き、法量は残高7.8cm、底径4.4cm。胎土に石英、白色粒子、白色針状物質を含み、焼成は普通である。橙色を呈し、約60%残存する。外面は赤彩される。底部は完存し、穿孔は認められない。出土高は底面からは95cmほど浮いている。註記No.2。2はガラス製管玉である。東溝の方台部寄りの壁際覆土下層から出土した。長さ1.45cm、最大径0.60cm、孔径0.30cmで、下端の一部が欠損する。形態は中膨らみの円筒状を呈する。色調はライトブルーで透明感はない。註記No.1。

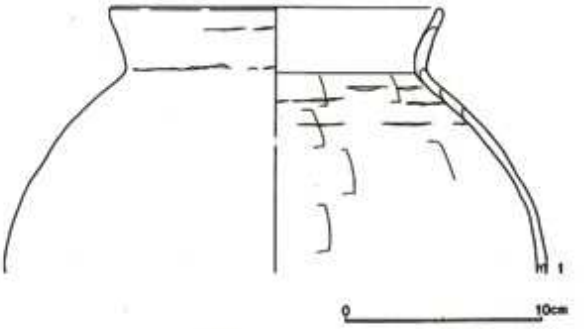
C区第19号方形周溝墓(第348図)

調査区北東端部のC・D-29・30区に位置する。隣接する田島遺跡、桑原遺跡には周溝墓は検出されて



第348図　C区第19号方形周溝墓

おらず、稲荷前グループの墓域の中でも東限に相当する。上面は削平され、方台部上は溝跡の攪乱を受けていた。形態は全周型に属し、方台部の形態はほぼ方形を呈する。方台部上面の規模は東西長12.00m、南北長11.40m、主軸方位はN－15°－Wを示す。



第349図　C区第19号方形周溝墓出土遺物

周溝は外縁部が僅かに張り出し気味となる。底面は中央に向かって緩やかに深くなる船底状を呈し、墳内土壙は認められなかった。断面形は逆台形を基本形態とし、方台部側の側壁は外縁部に比して鋭く、垂直近い角度で立上がる。溝の規模は北溝が幅1.80m、深さ0.50m、東溝が幅2.36m、深さ0.48m、南溝が幅1.96m、深さ0.72m、西溝が幅2.40m、深さ0.52mを測る。

周溝覆土は大きく8層に分かれ、全体にロームの混入量が多い傾向にある。特に下層の第3～5層では顕著に認められ、断面観察から見ても、方台部側盛土の崩落土が主要な堆積要因となっていたものと推定される。

出土遺物は極めて少なく、図示し得たものは第349図1の土器のみである。

第349図1は甕か。口縁部は短く外反し、胴部は球形に膨らむ。風化が著しく、調整は不明瞭である。推定口径16.8cm、胎土に角閃石と砂粒を含む。焼成はやや不良で、色調はにぶい橙を呈する。30%残。註記No.1。東溝の北東コーナー近くの底面から25cm程浮いたレベルから出土した。

(3)　土壙

C区第20号土壙(第350図)

F・G-19区に位置する。形態は長楕円形で、南北に長い。規模は長径2.10m、短径0.88m、深さは8cm程と極めて浅い。壁の立上がりは概して緩く、底面は細かい凹凸が顕著で平坦な面は検出されなかった。

覆土はローム混じりの暗褐色土で構成されていたが、大きな土層変化は観察されなかった。基本的な土質は第21号土壙と近似していた。

遺物は検出されなかった。時期に関しては第21号土壙との類似性、及び後述するように第1号周溝墓との関係から古墳時代前期と考えて良かろう。

C区第21号土壙(第350図)

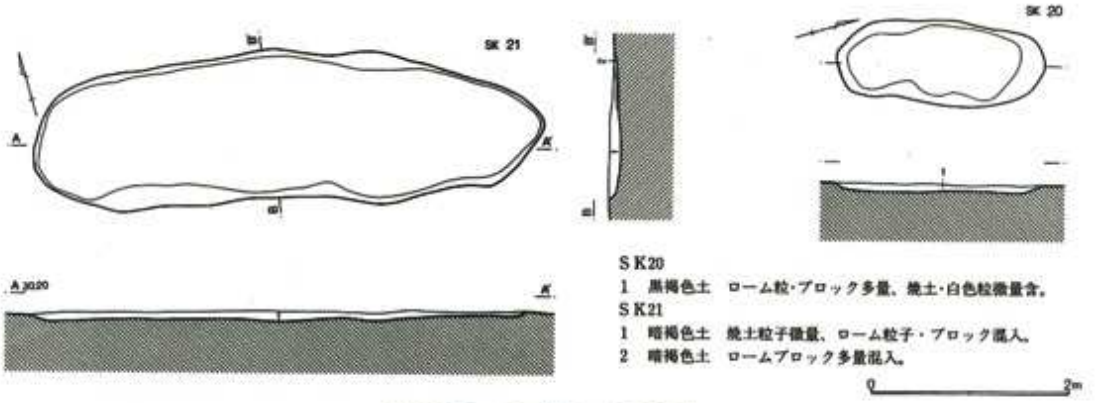
F・G-19区に位置し、西側に第20号土壙、北側に第1号方形周溝墓が近接している。形態は長楕円形で、規模は長径5.26m、短径1.50m、深さは最深部でも10cmときわめて浅い。壁の立ち上がりは緩く、底面は凹凸があり一定しない。

覆土は2層に分かれる。ローム混じりの暗褐色土が基調で、第20号土壙埋土に土質、色調ともに

近似している。

図化可能な遺物はないが、古墳時代前期の壺胴部及び底部破片が少量検出された。

調査時には一応単独土壙として認識されていたが、北側に位置する第１号方形周溝墓との位置関係、覆土の状況と出土遺物の時期を考慮すると、本土壙及び第20号土壙は第１号方形周溝墓南周溝の一部であった可能性が高いものと考える。第１号方形周溝墓の周溝が南西コーナー部で極端に幅を狭めるという不自然さも、実は確認面が浅かったために生じたもので、第20･21号土壙をその一部に取り込むことによって解決されるものであろう。



第350図　C区第20･21号土壙

（４）　土壙墓（ＳＴ01）

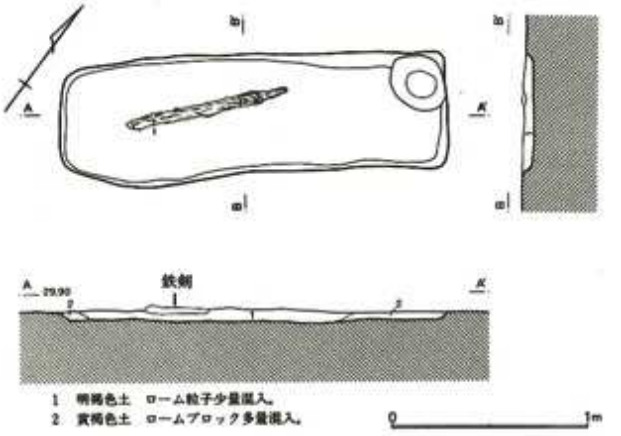
C区第１号土壙墓（第351図）

Ｆ-25区に位置し、第４号掘立柱建物跡の内部にある。形態は長方形を呈し、規模は長軸1.99ｍ、短軸0.58～0.66ｍ、深さ0.06ｍを測る。主軸方位はＮ－53°－Ｅを示す。

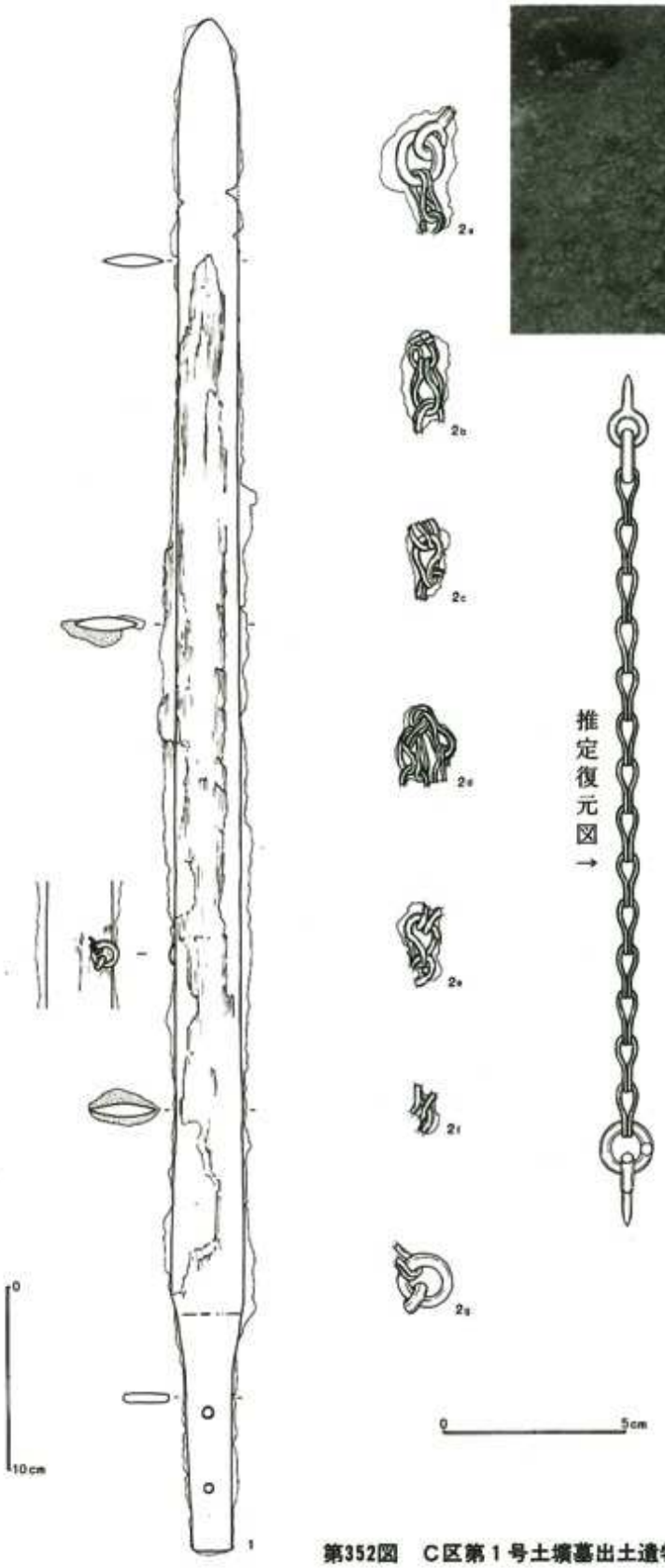
底面は南西側に僅かに深くなるが、概ね平坦である。北側コーナー部に掘り込まれていた小ピットは土壙を切っていることが判明した。

覆土は確認面からの深さがきわめて浅いために不明瞭な部分もあるが２層に分かれた。明褐色から黄褐色土で構成され、第２層にはロームブロックが多量に含まれていた。

出土遺物としては遺構確認面でほぼ完形の鉄剣が一振り検出された（第352図１）。出土位置は中心からやや南西寄りで、剣先を南西に、茎部を北東に向けてほぼ水平な状態で出土した。主軸方向に対する鉄剣自体の傾きは約12°である。



第351図　C区第１号土壙墓

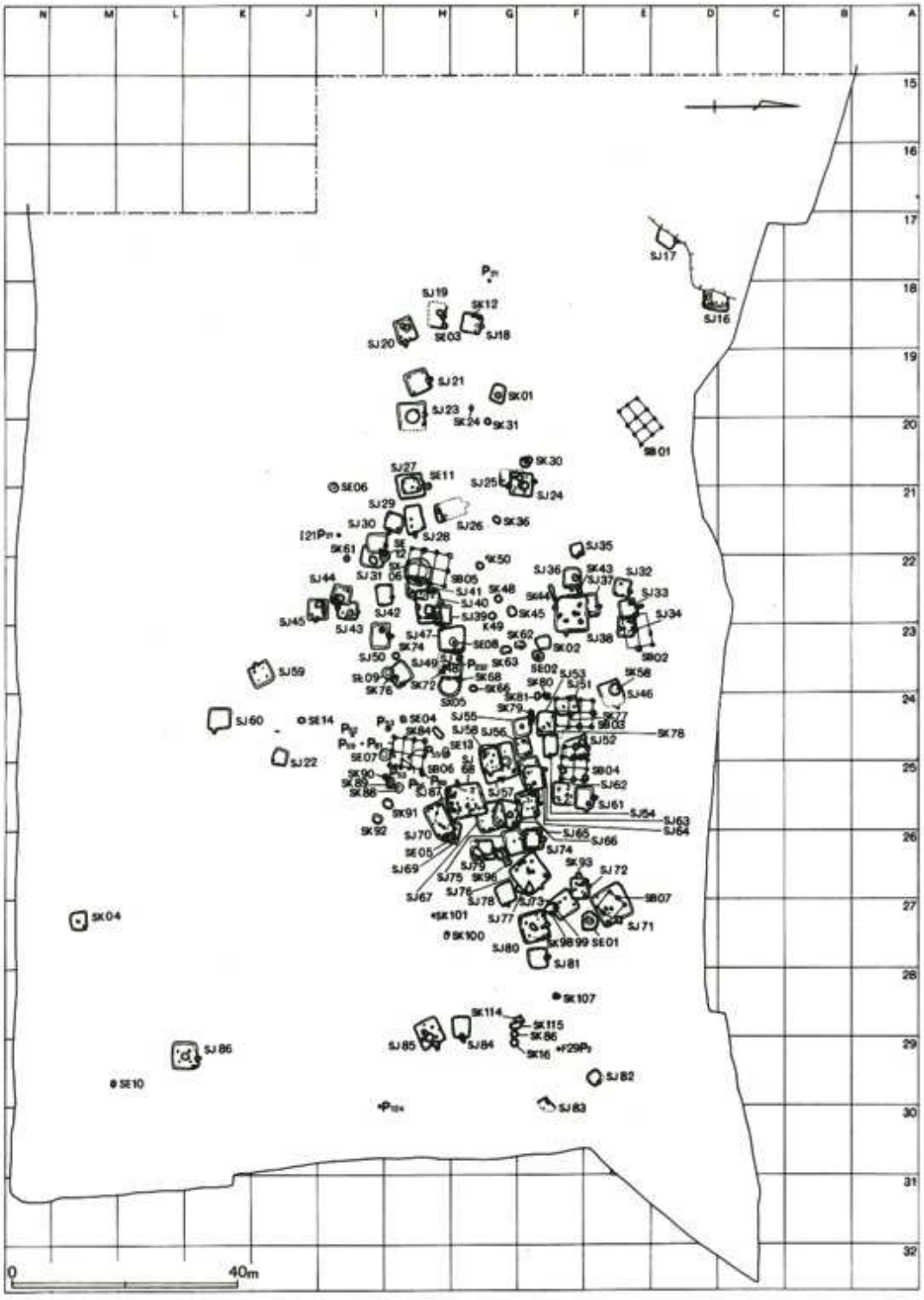


鉄剣は銹化が著しい。剣身部は木質に覆われており、木鞘に収まった状態であったものと推定される。X線透視により留金具が1点、木質に先端を差し込んだ状態で残されていること、留金具の輪部には兵庫鎖が取り付けられている(第352図2a・2g)ことが確認された。同時に出土した銹に覆われた鉄小片についてもX線撮影を試みたところ、留金具(2a)と兵庫鎖の残片であることが判明した(2b～2l)。鉄剣の詳細については第V章を参照のこと。

遺構の性格としては、土壙の形態と大きさ、覆土の状態からみて、鉄剣を副葬品にもつ墓壙と考えるのが妥当であろう。時期判断は難しいが、鉄剣の存続年代と鉄剣自体の検討から古墳時代前期後半、5世紀代のものと推定される。周囲に存在する方形周溝墓群との直接的な関わりを想定することは難しいようである。

第352図　C区第1号土壙墓出土遺物

3　古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物



第353図　C区古墳時代後期～平安時代の遺構配置図

（1） 住居跡

C区第16号住居跡（第354図）

調査区北西部のC・D-18区に位置する。住居跡の西半は削平されていた。平面形態は方形を呈するものと推定される。残存規模は長軸4.56m、短軸2.90m、深さ10cmを測る。主軸方位はN－10°－Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土はロームを含む黒褐色土を基調としていたが、掘り込みが浅いために堆積環境は不明である。

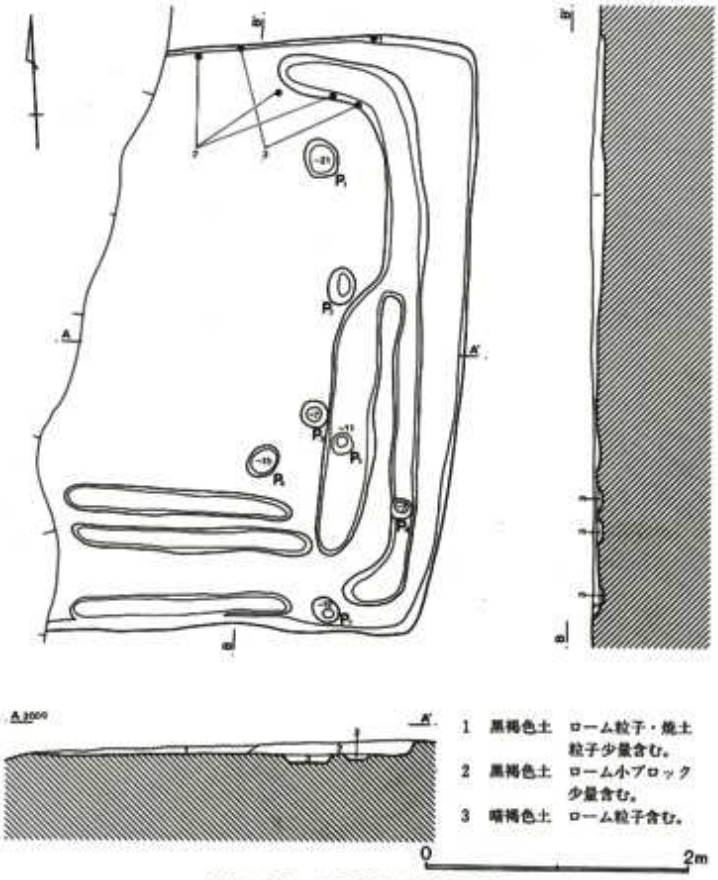
カマドは残存部には検出されなかった。

ピットは7本検出された。最も深いものでも21cmと何れも深度が浅く、住居の柱穴となるかどうかは不明である。

壁溝と思われる溝は南壁部で平行して3条、東壁部で1条検出された。東壁のそれは壁ラインよりも内側に巡り、南半で二股に分かれる。断面観察によれば何れも住居に伴うものと推定され、最低3度の建替えを経たものと考えられる。

出土遺物は少ない（第355図）。土師器は坏が2点、甕2点、鉢2点、須恵器は坏が2点、蓋2点（何れも口縁部破片数）が検出された。土師器坏には続比企型坏口縁部細片が1点含まれている。須恵器坏底部片は回転ヘラケズリされている。

図示した遺物は何れも小片で時期決定は難しいが、様相としては8世紀前半代である。稲荷前VI期を中心に、下ってもVII期までと思われる。



第354図 C区第16号住居跡

第355図 C区第16号住居跡出土遺物

C区第16号住居跡出土遺物観察表（第355図）

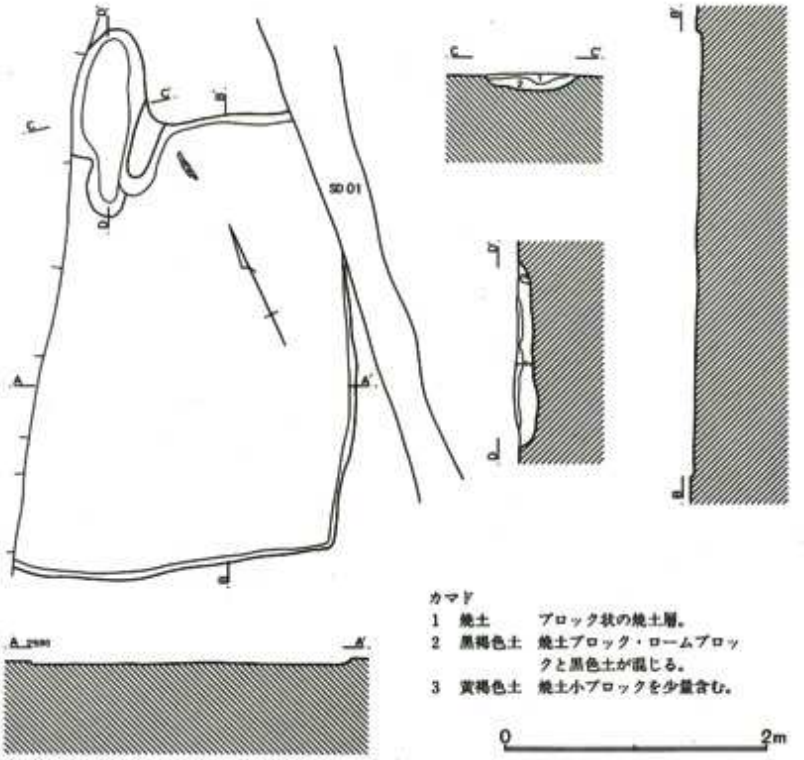
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.0)	3.2		ABC	A	にぶい橙	5%	No.15 覆土（+3cm）
2	蓋	(17.2)	1.8		ABC	A	明青灰	35%	No.4,10,12 覆土（+3～8cm）
3	甕	(23.0)	2.9		ABCE	B	にぶい褐	20%	No.7,13 覆土（+6～10cm）

C区第17号住居跡（第356図）

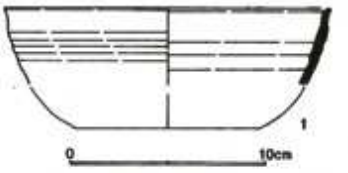
D-17区に位置する。西半は削平され、北東コーナーを第1号溝跡に攪乱され、遺存状態は悪い。形態は方形を呈するものと推定され、残存規模は長軸3.44m、短軸2.44m、深さ5cmを測る。主軸方位はN－19°－Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土が僅かに遺存していた程度で、堆積状況は不明である。

カマドは北壁に設置され、左袖部は削平されていた。全長1.40mで壁を70cm程切り込んで構築される。底面は床面から10cm掘り込まれ、全体にフラットである。覆土は3層に分かれる。第1・2層が天井部崩落土に相当しよう。右袖は基底部が僅かに残存しており、ロームブロック混じりの灰褐色粘質土で構築されていた。



第356図 C区第17号住居跡



第357図 C区第17号住居跡出土遺物

貯蔵穴、ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は極めて少なく、土師器の武蔵型甕と壺の胴部片、須恵器坏と椀の口縁部が合わせて5点検出されたに留まる。

第357図1は須恵器椀で口唇部は内傾する面をもつ。推定口径16.6cm、残存高3.9cm。胎土に石英、白色粒子と白色針状物質を含み、焼成は良好である。色調は緑灰色。残存率は10%未満である。覆土から出土した。

時期の限定は難しいが出土遺物はおそらく8世紀後半代の様相と思われる。稲荷前Ⅷ期～Ⅸ期頃と考えておきたい。

C区第18号住居跡(第358図)

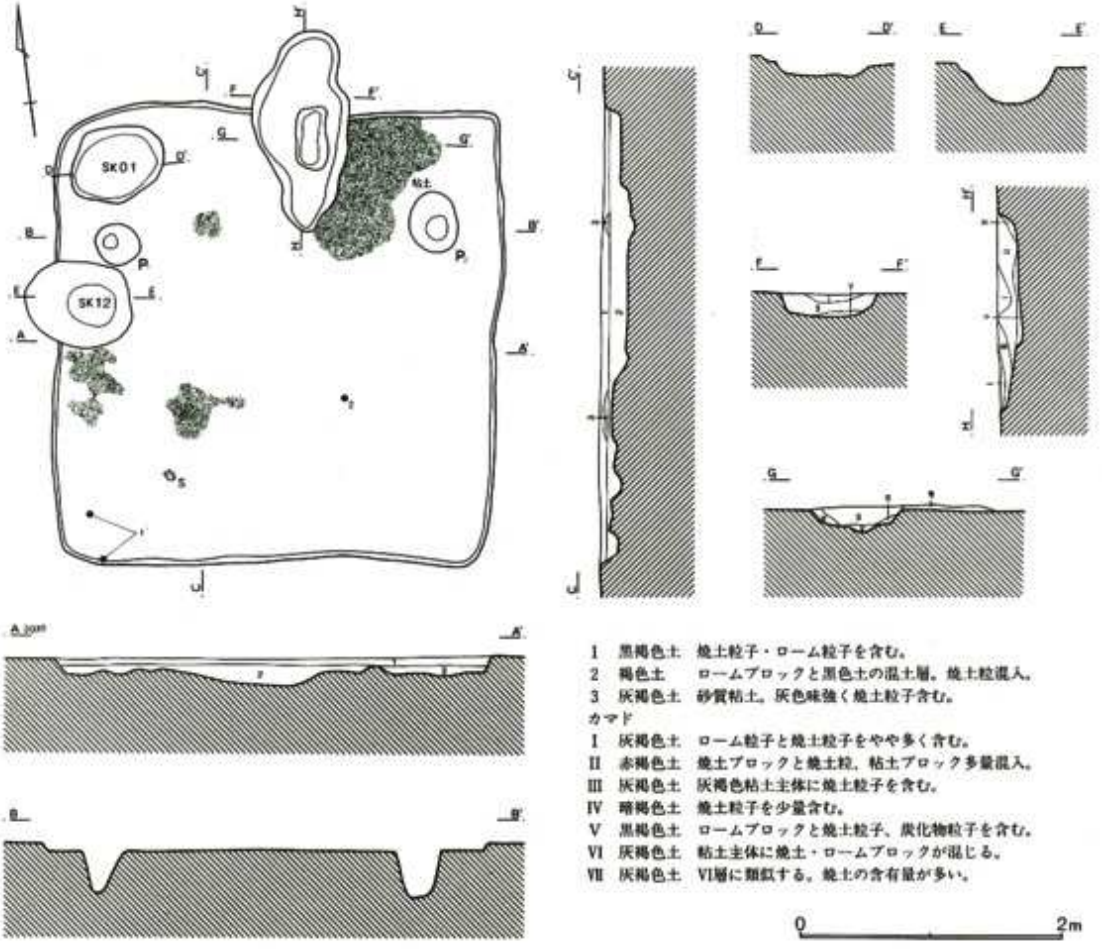
G-18区に位置し、西壁部を第12号土壙によって切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.54m、短軸3.36m、深さは5cm程と極めて浅い。主軸方位はN－10°－Eを示す。

床面はほぼ平坦で全面貼床されていた。掘り方底面は中心部がやや深い傾向にあるが、全体に凹凸が激しい。覆土は黒色土が僅かに残存するのみで詳細は不明とせざるを得ない。掘り方埋土はロームブロック混じりの黒色土で構成される。

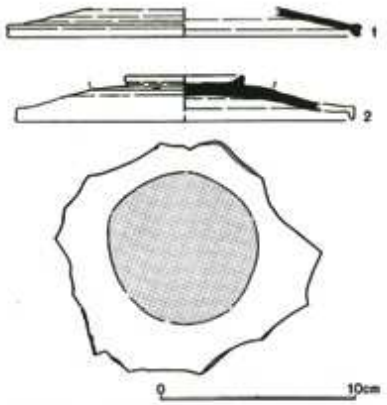
カマドは北壁の中央付近に位置し、壁を約60cm切り込んで構築される。規模は全長1.50m、幅75cmを測り、底面は床面から約20cm船底状に掘り込まれていた。覆土は7層に分かれる。第Ⅰ～Ⅲ層と第Ⅵ層は天井部及び袖部の崩落土に相当しよう。壁内の袖は全く遺存していなかった。右袖に相当する位置の床面上には焼土混じりの粘土層が堆積しており、袖の流出土と見ることもできる。同様な粘土は住居内に4か所程残されていたが、左袖部には確認できなかった。

貯蔵穴は検出されなかった。第1号土壙(SK01)をそれとすることもできるが、底面の凹凸が顕著で掘り方面で止まっており、床下土壙、または掘り方と見た方が自然であろう。

ピットは2本検出された。掘り方面においても他にピットは検出できなかったことから、主柱穴



第358図　C区第18号住居跡



第359図　C区第18号住居跡出土遺物

住居掘り方面

は2本であったものと考えられる。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく、須恵器蓋が2点と土師器甕及び壺の胴部片が検出されたに留まる。第359図2は環状鈕をもつ須恵器の蓋である。周囲は打ち欠き調整され、内面中央部は著しく磨滅している。おそらく硯に転用されたものと推定される。鈕径は6cmを測り、同種の鈕の中では最大の部類に属し、器肉も厚くしっかりした作りである。山下6号窯併行としても良いが、転用硯とすると住居の年代と一致する保証はない。住居の時期は稲荷前V期以降とするに留めたい。

C区第18号住居跡出土遺物観察表(第359図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(18.0)	1.4		ABC	A	灰	15%	No1,3,4　床面
2	蓋		1.6		ABC	A	灰白	80%	No2　床面

C区第19号住居跡(第360図)

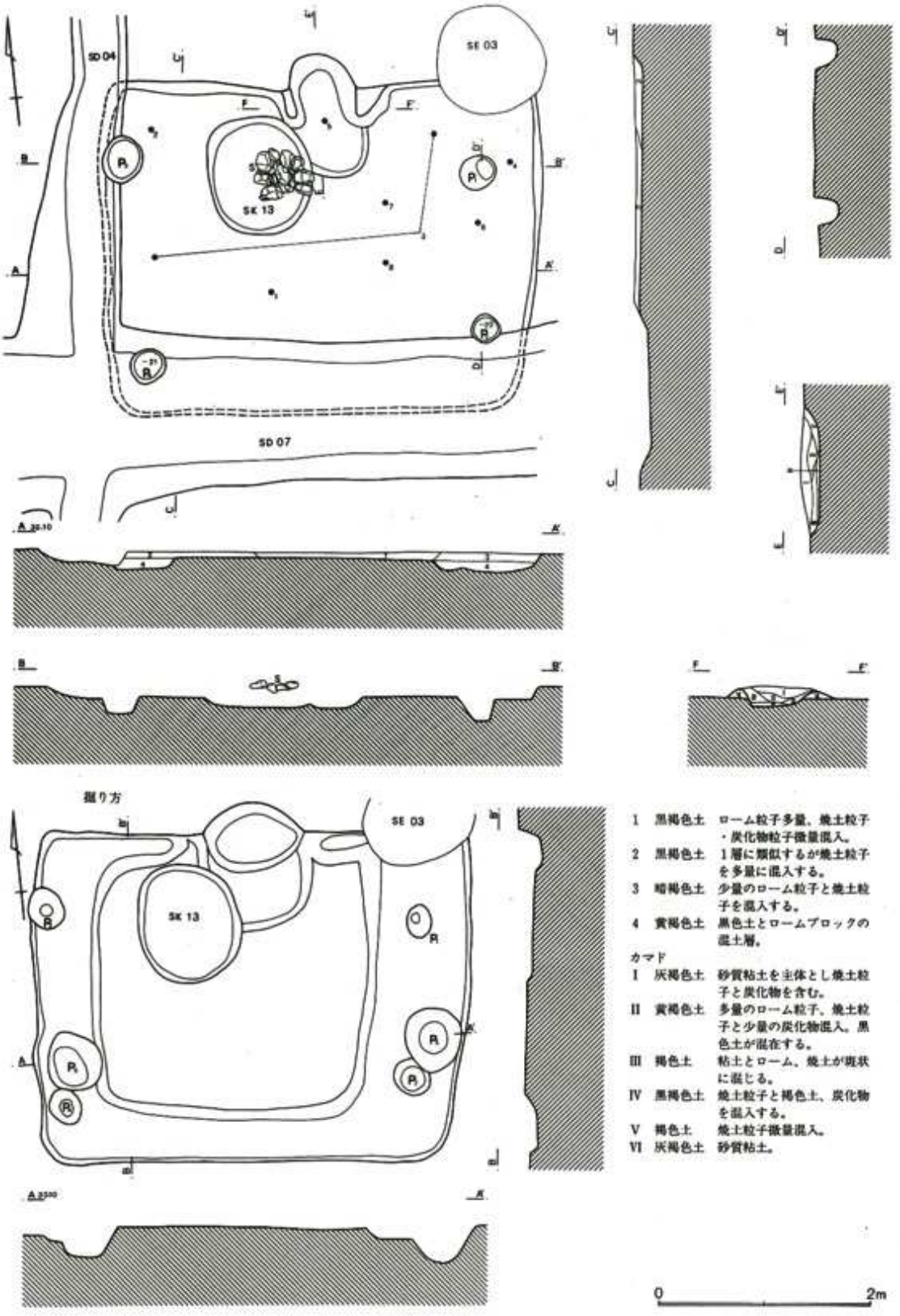
H-18区に位置する。第3号井戸跡に北壁部を、第4号溝と第7号溝に西壁と南壁を攪乱されていたが、掘り方部分は残存するため規模の概要は判明する。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.10m、短軸3.12m、床面までの深さは5cm程と非常に浅い。主軸方位はN－8°－Eを示す。

床面はほぼ平坦で、壁に沿って方形周溝状の掘り方をもつ。覆土は4層に分かれる。第4層が掘り方埋土で黒色土とロームブロックが混在する土で充填されていた。覆土には焼土とローム粒子が比較的多く含まれていた。

カマドは北壁の中央部に位置し、壁を30cm程切り込んで構築される。規模は全長1.18m、焚口幅70cmで、底面は床面から10cm程、船底状に掘り込まれている。覆土は6層に分かれ、第I～IV層が天井部及び袖の崩落土に相当しよう。袖は灰褐色の砂質粘土で構築されていたが遺存状態は悪く基底部が辛うじて確認されたに留まる。

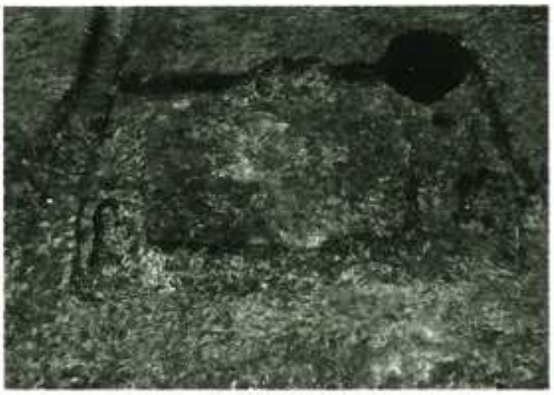
貯蔵穴は検出されなかった。

ピットは床面で4本検出されたほか、掘り方面で2本確認された。P_1～P_4が主柱穴に相当しようか。また、カマド脇から土壙(SK13)が1基検出され、底面よりも浮いた位置に数個の礫が残されていた。埋土の状態から中世段階のものと推定される。

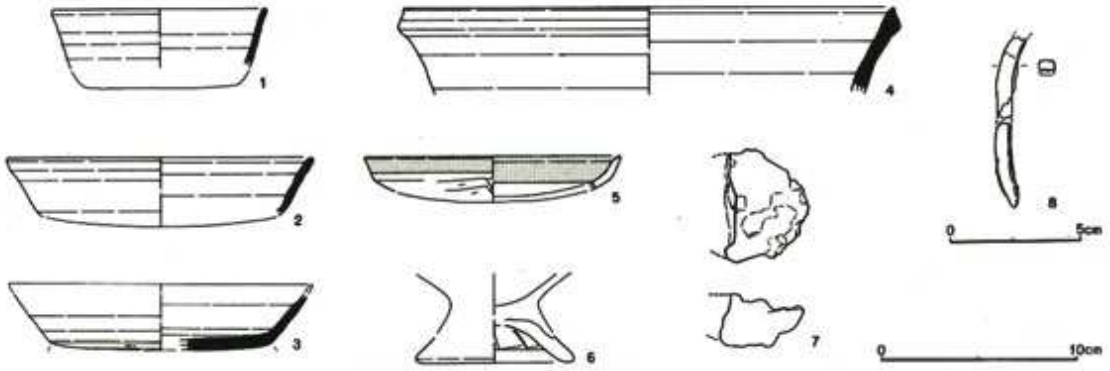


第360図　C区第19号住居跡

出土遺物には土師器と須恵器、灰釉陶器、鉄釘と鉄滓がある。土師器は坏２点、甕４点、壺１点、須恵器は坏12点、蓋１点、甕１点、壺１点(何れも口縁部破片数)が検出された。第361図１～３は須恵器坏である。１は推定口径10.8cmと小形の坏で底部を欠く。３は底部全面回転ヘラケズリ。５は土師器の統比企型坏。皿状の器形で口唇部内面はやや凹む。不鮮明ではあるが赤彩痕が残る。７は椀形滓で左半分を欠く。重量60g。底面は細礫混じりの粘土が付着する。滓自体の色調は黒褐色、表面には錆と土が付着し褐色を呈する。８は鉄釘茎部と思われる。断面長方形から方形をなし、残長6.5cmを測る。須恵器坏類の様相から稲荷前Ⅵ期に比定される。



住居掘り方面



第361図　C区第19号住居跡出土遺物

C区第19号住居跡出土遺物観察表(第361図)

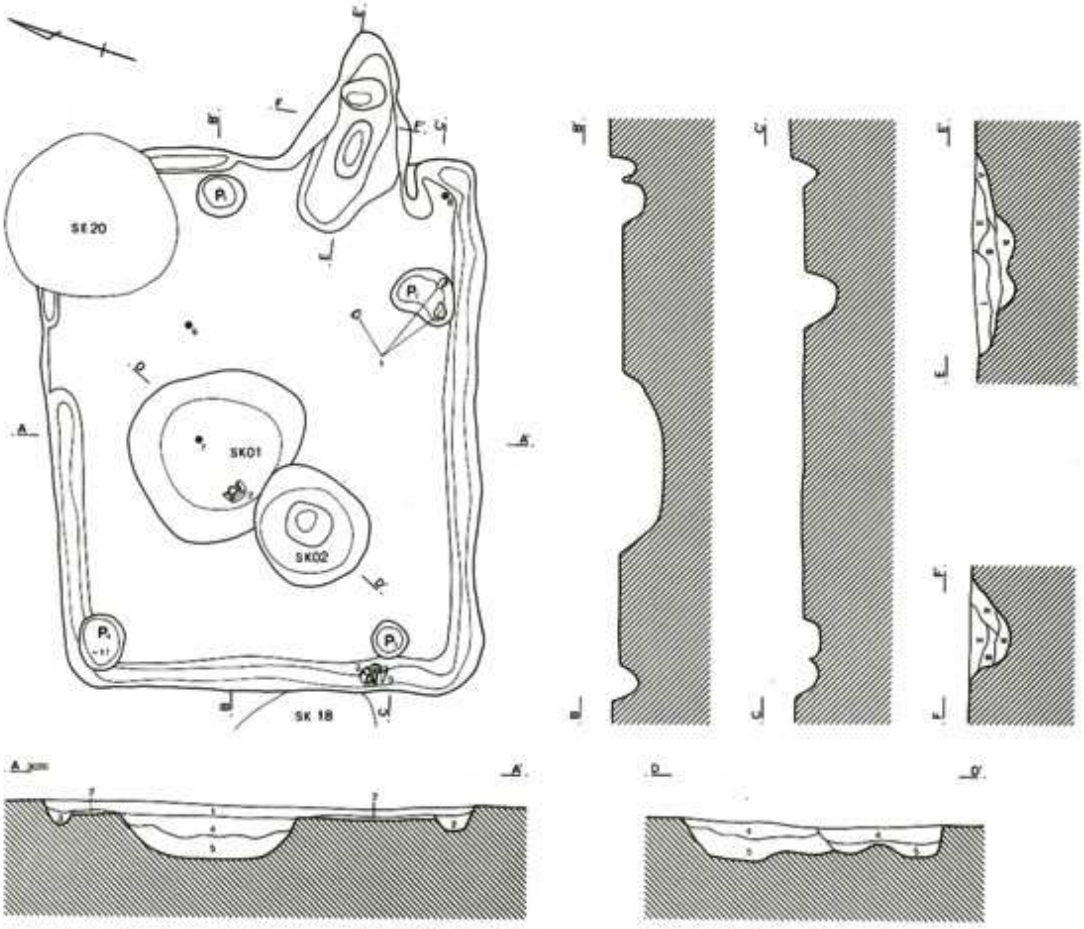
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.8)	3.0		BC	A	オリーブ灰	20%	No.51　床面
2	坏	(15.5)	2.9		BC	B	灰	10%	No.32　床面
3	坏		2.9	(11.6)	ABC	C	淡黄	30%	No.10,62　覆土(+6～13cm)
4	鉢	(25.0)	4.4		ABC	A	灰	5%	No.54　床面
5	坏	(13.0)	1.8		AB	A	にぶい橙	10%	No.17　覆土(+18cm)　赤彩
6	台付甕		2.2	(7.4)	ABCE	A	にぶい橙	30%	No.55　覆土(+4cm)
7	椀形滓								No.23　床面　直径5.8cm
8	鉄釘								No.26　覆土(+13cm)　残長6.5cm

C区第20号住居跡(第362図)

調査区南東部のH-18区に位置し、第20号井戸跡に北東コーナーを切られていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.14m、短軸3.24m、深さは５～10cmと浅い。主軸方位はN－74°－Eを示す。

床面はほぼ平坦で全体に堅く踏み締められていた。覆土はロームと焼土混じりの暗褐色土で構成されるが深度が浅いこともあり土層変化に乏しい。

カマドは東壁の中央から南に寄った位置に設けられ、壁を90cm程切り込んで構築されていた。規模は全長1.52m、壁ラインにおける幅1.00mを測る。底面にはピット状の掘り込みが2か所検出されたが掘り方と思われる。全体的には船底状に凹んでいる。カマド覆土は6層に分かれ、第II～IV層が天井部崩落土に相当しよう。袖はあまり明瞭ではなく、右袖に相当する位置に僅かにロームブロック混じりの褐色粘質土が検出されたが、遺存状態は極めて悪い。左袖部には



1　暗褐色土　ローム粒子と焼土粒子、炭化物を含む。
2　黒褐色土　ロームブロックと黒色土が混じる。貼床。
3　褐色土　ローム粒子をやや多く含む。
4　黒褐色土　多量のローム粒子・ロームブロックと少量の焼土粒子・炭化物を含む。
5　黄褐色土　ロームブロックを主体に暗褐色土が混じる。

カマド
I　暗褐色土　ロームブロックと焼土粒子を少量含む。
II　暗褐色土　焼土粒子と粘土ブロックを多量に含む。
III　灰褐色土　焼土ブロックと焼土粒子を多量に含む。
IV　黄褐色土　砂質粘土と焼土粒子を多量に含む。
V　黒褐色土　焼土粒子少量含む。
VI　黄褐色土　砂質粘土とロームブロック主体。

0　2m

第362図　C区第20号住居跡

袖構築土に相当するような粘質土は検出されなかった。

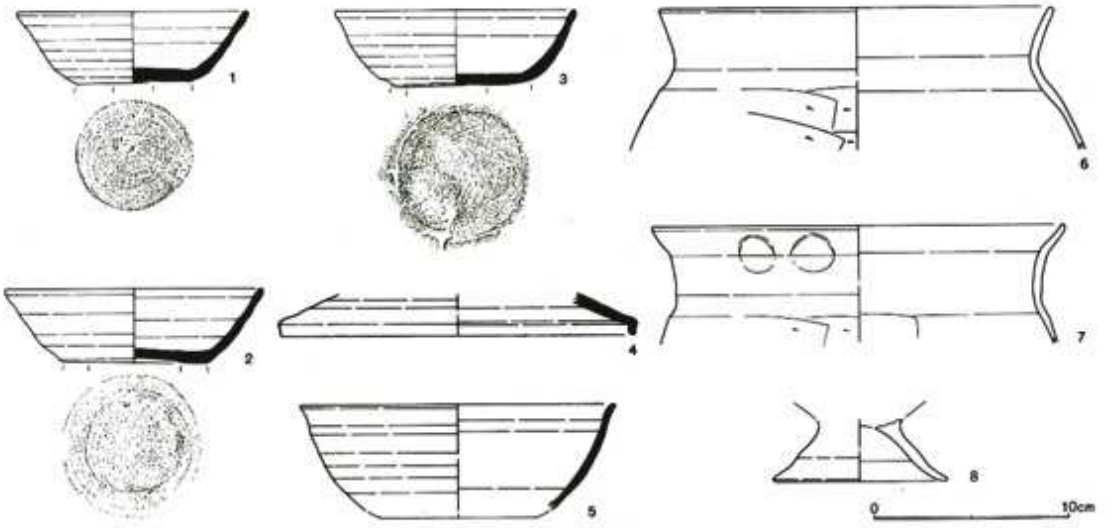
ピットは4本検出されたが、配置や深度から見て柱穴とするには無理がある。その他、住居中央部から土壙が2基検出された(SK01・02)。上面の貼床は不明瞭であるが、断面観察により住居に伴う床下土壙と考えられた。埋土はロームブロックと黒褐色土がランダムに混在した土で充塡されており、明らかに人為的に埋め戻されたものである。

壁溝はカマドと北壁中央部を除いて全周する。深さは約10cm。

出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は甕が3点、須恵器は坏が14点、椀2点、蓋2点、瓶類2点(何れも口縁部破片数)と須恵器甕の胴部片が検出された。

第363図1～3は須恵器の坏で、全て床面よりも数cm浮いた位置から出土した。底部調整は回転糸切り後ヘラケズリが施されている。1は口径が11cm代に縮小したもので最も新しい様相をもつ。2は口径は13cmと大きく体部は直線的に延びる。3は手持ちヘラケズリが施されるが歪みがあり器形は安定しない。5の椀は器肉が薄く口縁部は外反する。7は床下土壙内から出土した。いわゆる「コ」の字甕で、頸部はやや外傾する。

須恵器は稲荷前IX期～X期頃までのものが含まれているようである。住居の年代としては相対的に新しい様相をもつ1の須恵器坏と椀、土師器甕から稲荷前X期に位置付けておきたい。



第363図　C区第20号住居跡出土遺物

C区第20号住居跡出土遺物観察表(第363図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.6	3.7	5.8	ABC	A	青灰	90%	No.61,63,64　覆土(+4～7cm)
2	坏	13.0	3.8	7.2	ABC	B	明オリーブ灰	70%	No.65　覆土(+4cm)
3	坏	12.2	3.9	7.0	ABC	B	灰白	80%	No.66,67　覆土(+4～8cm)
4	蓋	(18.0)	2.1		ABC	A	灰	5%	覆土
5	椀	(16.0)	5.4		ABC	B	青灰	20%	No.67　覆土(+8cm)
6	壺	(20.0)	7.2		ABEJ	B	にぶい橙	15%	No.23　覆土(+6cm)
7	甕	(21.0)	5.9		ABE	B	にぶい橙	10%	No.70　床下土壙内(-19cm)
8	台付甕		3.1	8.8	ABEJ	A	にぶい橙	45%	No.62　床面

C区第21号住居跡(第364図)

H-19区に位置し、北壁部は第13号方形周溝墓南溝を切って構築されていた。形態は方形を呈し、規模は長軸4.04m、短軸4.00m、深さ10～15cmを測る。主軸方位はN－25°－Wを示す。

床面は概ね平坦であるが中央部がやや深い傾向にある。覆土は大きく2層に分かれ、二次堆積土には焼土とロームが多量に含まれていた(第1層)。第3層は貼床と思われる。

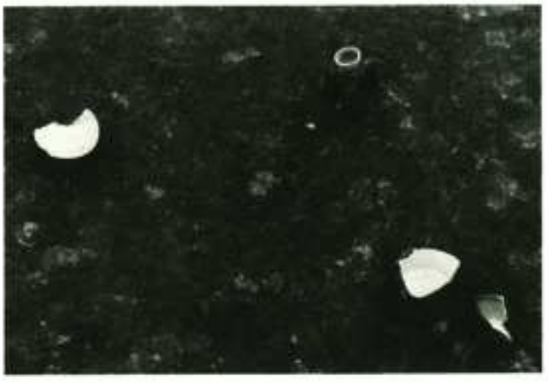
カマドは北壁に位置し、壁を40cm程切り込んで構築されていた。規模は全長1.12m、焚口幅70cmで、底面は床面から10cm程掘り込まれ、燃焼部奥壁は段をもって立ち上がる。覆土は6層に分かれ、第II・III層が天井部崩落土、第V層が灰層に相当しよう。第IV・VI層は流入土か。袖は褐色粘土を主体に構築されていた(第VII層)。また、カマド内第VI層上面に相当する位置からは土師器坏(第365図7・8)が2枚、口縁部を下に伏せた状態で出土した。

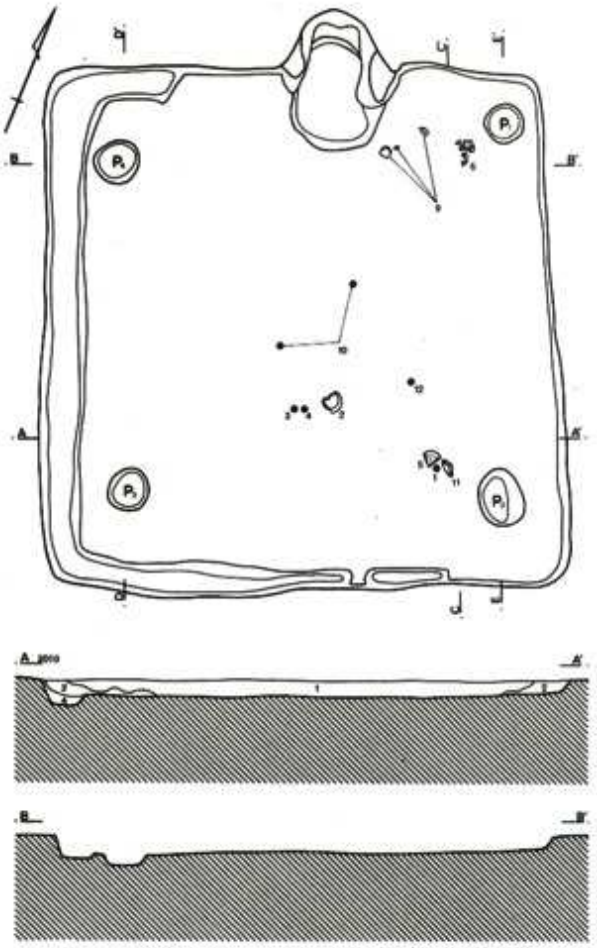
貯蔵穴は検出されなかった。ピットはコーナー内側から4本検出されたが、何れも浅く主柱穴とするには無理がある。壁溝は西壁から南壁を中心に確認された。深さは5～10cm。

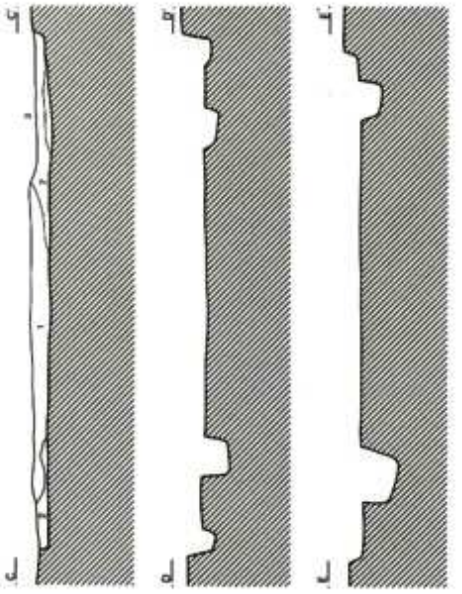
出土遺物は土師器と須恵器、鉄器が検出されている。出土数を示すと土師器は坏が4点、甕が3点、須恵器は坏が7点、蓋が2点、甕が2点、コップ形土器が1点となる。土師器坏は全て統比企型坏で典型的な比企型坏は皆無である。第365図6～9は口唇部内面に弱い沈線をもつ。器形はやや偏平化しており6～8は丸底、9は平底風となる。

須恵器坏は全て大振りのもので2は底部が全面回転ヘラケズリされる。平底風であるが中心部が僅かに突出する。5は底部が丸底を呈し、手持ちヘラケズリが施される。蓋(3)は環状鈕の一種と推定される。内面はかなり磨滅している。12のコップ形土器は残存部の上縁を故意に擦って口縁部に再加工されている。底部＋体部下端は全面回転ヘラケズリ。13は刀子。残長9.8cm、刃部から柄部の破片で弱い刃関が付くものと思われる。

出土遺物のなかでは6～9の土師器坏はカマド、または覆土下層から出土しほぼ遺構に伴うと見てよい。須恵器坏は覆土中から出土したものがほとんどで確実に伴うとはいえない。4・5は形態から稲荷前VI期、2は相対的に浅身、盤状の器形で若干新しくなるかもしれない。土師器坏の特徴と須恵器坏の様相から稲荷前VI期、下ってもVII期古段階に位置付けられるものであろう。但し、12のコップ形土器については該期に伴うとすると最古段階の資料になるが、覆土から出土したものでもあり位置づけは検討を要するであろう。

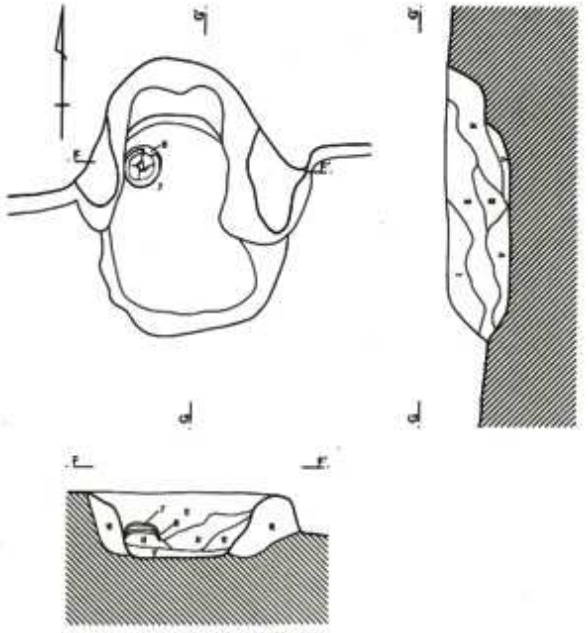






1　黒褐色土　焼土ブロック・焼土粒子とローム粒子を多量に含む。
2　黒褐色土　黒色味強い。ローム粒子を少量含む。
3　褐色土　多量のローム粒と微量の焼土粒を含む。
4　黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。

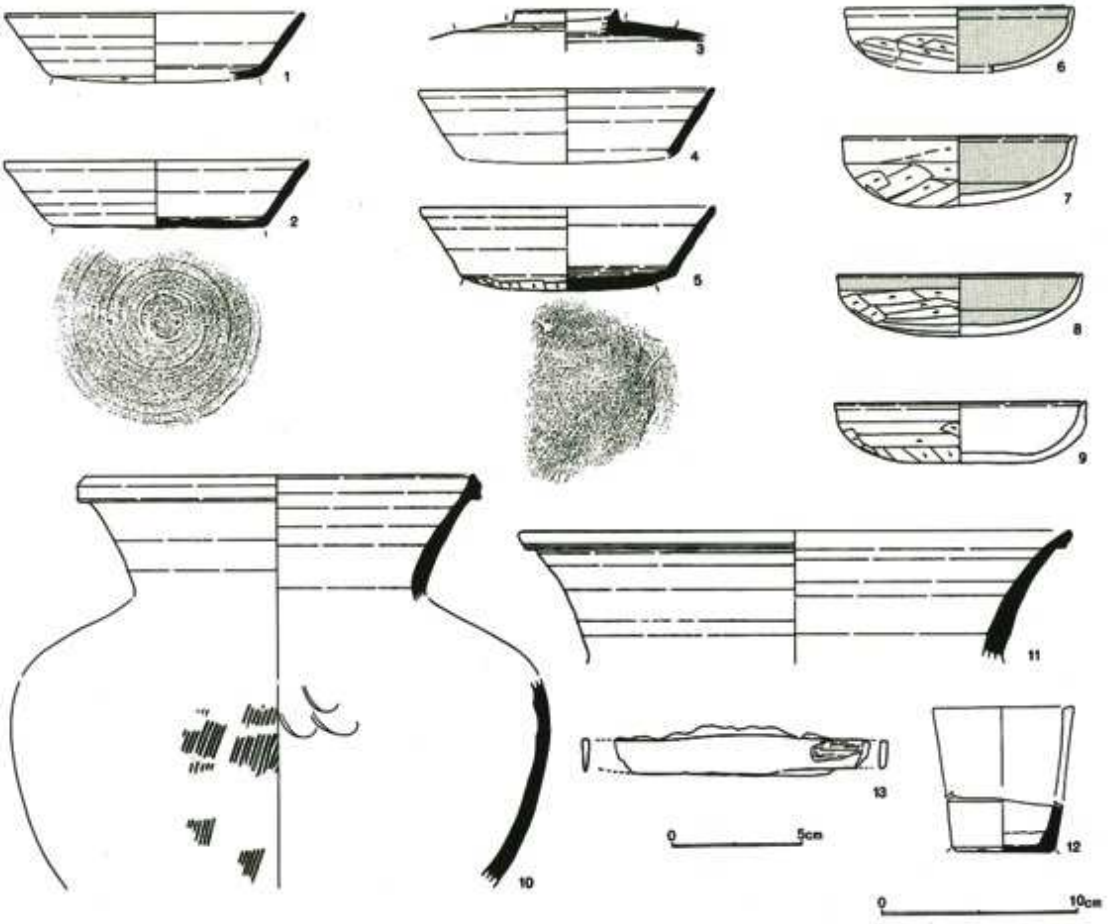
0　2m



カマド
I　暗褐色土　褐色粘土・ローム粒子と焼土粒子を少量含む。
II　褐色土　褐色粘質土ブロックと焼土ブロック・焼土粒子が混在する。
III　赤褐色土　焼土ブロック主体層で粘土ブロックとロームが混じる。
IV　暗褐色土　炭化物粒子と焼土粒子・ローム粒子を少量含む。
V　黒褐色土　灰層。焼土粒子と炭化物粒子を含む。
VI　暗褐色土　焼土粒子と炭化物粒子を多く含む。
VII　灰褐色土　褐色粘土を主体としローム・焼土ブロックを含む。

0　1m

第364図　C区第21号住居跡・カマド



第365図　C区第21号住居跡出土遺物

C区第21号住居跡出土遺物観察表(第365図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.2)	3.3	(10.6)	ABC	B	灰白	65%	No.40　覆土(+10cm)
2	坏	(15.5)	3.4	10.8	ABC	B	灰白	65%	No.41　覆土(+3cm)
3	蓋		1.6		ABC	A	灰白	15%	No.32　覆土(+13cm)
4	坏	(15.0)	3.5		ABC	A	緑灰	10%	No.32　覆土(+13cm)
5	坏	(15.0)	4.2	(11.0)	ABC	A	灰	40%	No.40　覆土(+10cm)
6	坏	11.5	3.3		ABC	A	にぶい橙	50%	No.44　覆土(+4cm)　内面のみ赤彩
7	坏	11.8	3.6		BC	A	にぶい橙	90%	No.53　カマド内　内面のみ赤彩
8	坏	12.4	3.1		ABC	A	橙	80%	No.53　カマド内　赤彩
9	坏	12.8	3.1		ABC	A	にぶい橙	60%	No.45,47,48　覆土(0～+3cm)
10	甕	(20.0)	(20.9)		ABC	A	灰白	10%	No.5,9　覆土(+11～12cm)
11	甕	(28.0)	6.7		ABC	A	灰	10%	No.39　覆土(+7cm)
12	コップ形	5.1	2.8	4.8	ABC	A	灰	100%	No.42　覆土(+12cm)
13	刀子								No.51　床面　残長9.8cm

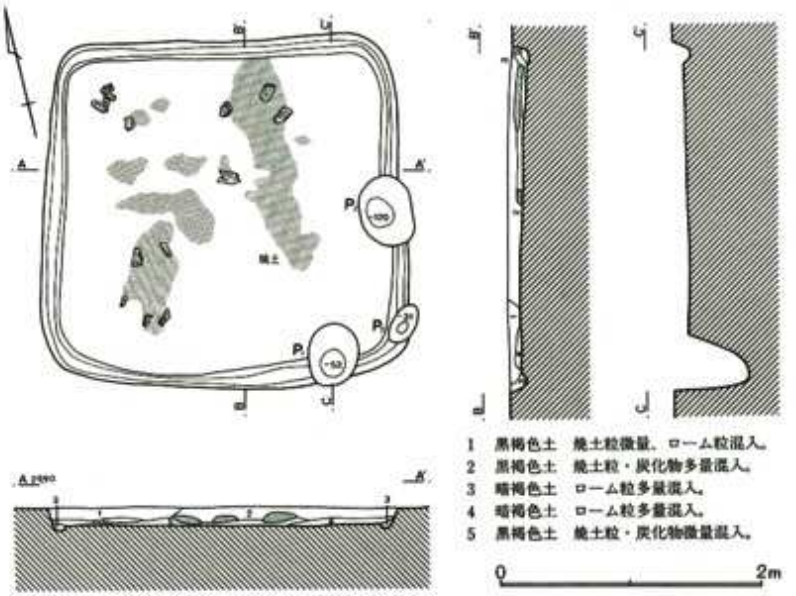
C区第22号住居跡(第366図)

J-24・25区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸2.82m、短軸2.68m、深さ10cmを測る。

主軸方位はN－17°－Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は5層に分かれる。第一次堆積層(第4・5層)上面には焼土と炭化材が散在し火災を受けた痕跡が認められ(第1・2層)、いわゆる焼失住居と考えられる。

炉またはカマドは検出されなかった。ピットは壁に掛かって3本検出されたが、伴うものなのか確認できなかった。P_3は深さ1.20mと非常に深い。



第366図　C区第22号住居跡

壁溝は全周する。深さ5cm程で、ローム粒子を多量に含む暗褐色土で充填されていた。

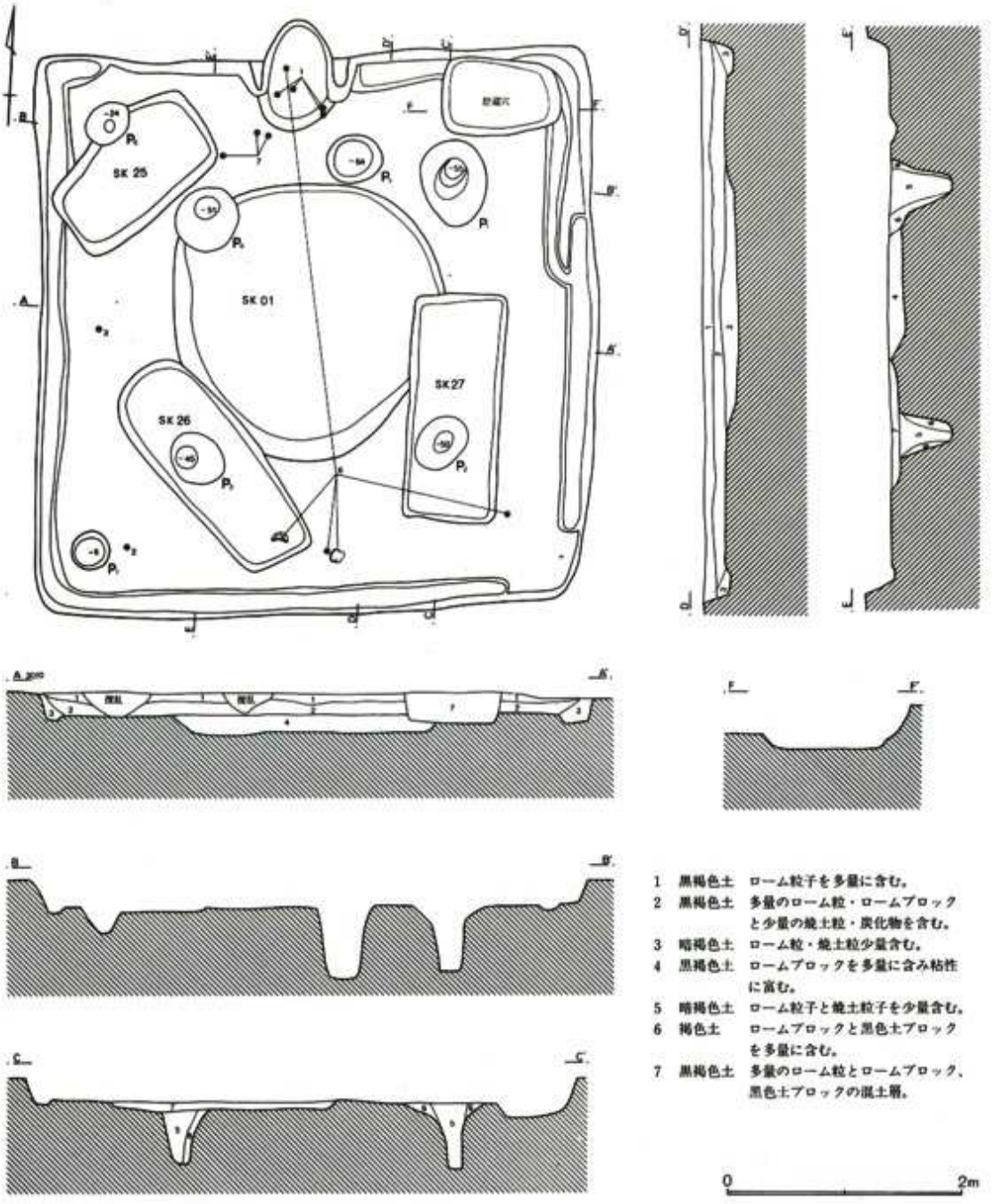
出土遺物は土師器甕または壺の胴部片があるのみで時期を明確にすることは難しい。外面にヘラケズリが認められ、比較的厚手であることから古墳時代後期、6世紀～7世紀代のものと推定される。非常に小型の住居跡でカマドや柱穴をもたない等、通常の住居跡とは性格を異にするであろう。

C区第23号住居跡(第367・368図)

H-19・20区に位置する。東壁部上面を第3号溝跡、住居床面を第25～27号土壙による攪乱を受けている。一辺4.78mの整った方形を呈し、深さは15～25cmを測る。主軸方位はN－7°－Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は基本的に2層に分かれ、ローム粒子を多量に含む黒褐色土で構成される(第1・2層)。

カマドは北壁中央部に位置し、壁を約30cm切り込んで構築される。規模は全長94cm、幅50cmで、燃焼部はほぼ壁内におさまる。燃焼部底面はほぼフラットで床面との段差はあまり見られない。煙道部は急角度で立ち上がり、壁外に延びる。覆土は4層に分かれる。第Ⅰ・Ⅱ層は天井部及び袖の崩落土、第Ⅲ層は流入土か。第Ⅳ層が灰層に相当するものと思われる。袖はローム混じりの褐色粘土を主体に構築されていたが、遺存状態は悪い。また、カマド前面には、土師器甕が横倒しの状態で2個体、その左右に甕底部と甕口縁部片が各1



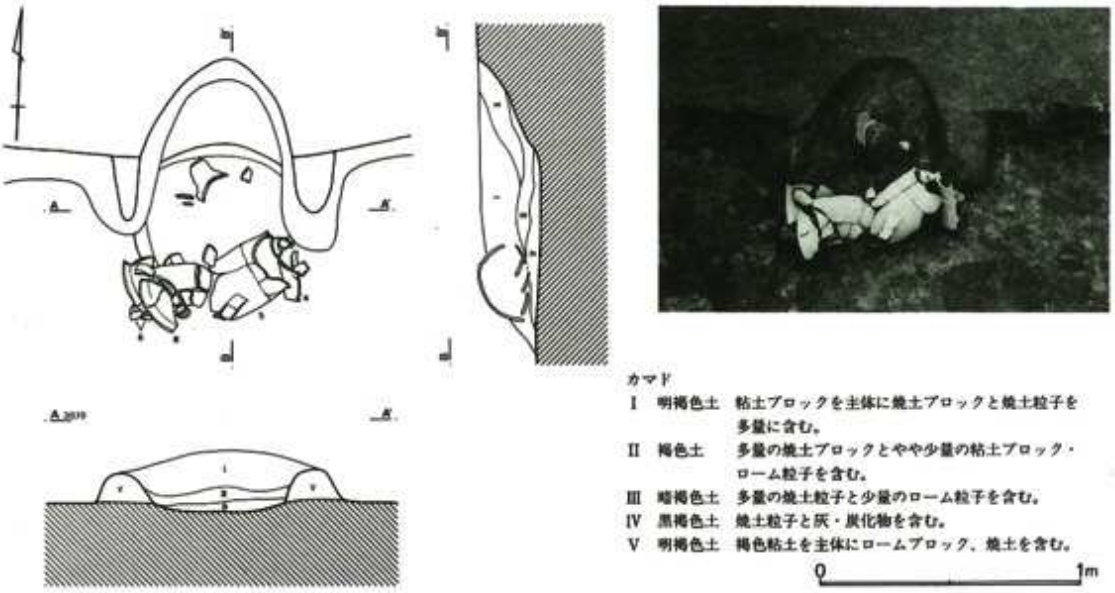
第367図　C区第23号住居跡

個出土した。袖部の芯材と天井部の架構材と考えられる。

貯蔵穴は北東コーナーに設置される。不整方形を呈し、規模は長径104cm、短径68cm、深さ15cmで底面はフラットである。

ピットは7本検出された。P_1～P_4は深さ50cm前後を測り、規則的に配置されることから4本柱の主柱穴と考えられる。

土壙は1基住居中央部から検出された(SK01)。上面は部分的に貼床された痕跡が認められた。



第368図　C区第23号住居跡カマド

また土層観察によっても住居に伴うことが確認され、いわゆる床下土壙と考えて良いものであろう。壁溝はカマド脇と南東コーナーを除いて巡る。深さは5cm前後と浅い。

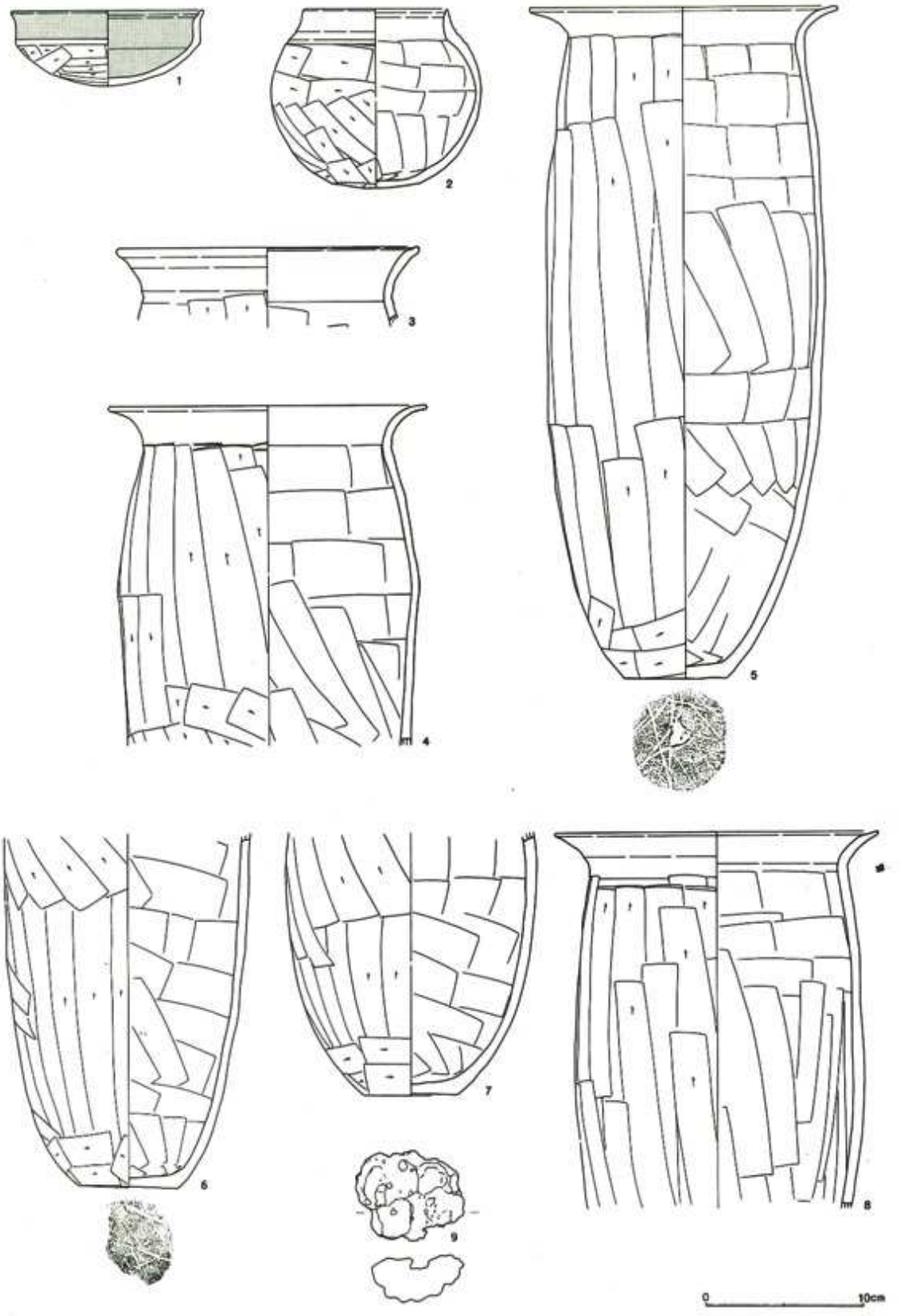
出土遺物は少なく、中世の混入遺物を除くと全て土師器で占められる。出土数は坏が1点、甕5点、小形甕1点、壺1点、鉢1点となる。

第369図1は比企型坏である。器高は深く、口縁部内面に沈線が巡っている。2は小形甕で、胴部中位から口縁部は二次火熱を受けるが底部にはその形跡が認められない。

3～8は甕。5は8の胴部中に差し込まれた状態で出土した。カマドの天井部架構材に使用されたものと考えられる。また、左袖に相当する位置には6が、右袖には4がそれぞれ検出され、袖部を補強する芯材の可能性が高いであろう。甕は最大径を口縁部にもち、胴部は中位が膨んでいる。鉄滓(9)はいわゆる椀形滓でカマド内から出土した。長径7.1cm、短径5.5cm、重量750g。底面には粘土が付着する。全体に小さな気泡が多く軽量感のする滓である。土師器比企型坏と甕の様相から稲荷前II期に比定される。

C区第23号住居跡出土遺物観察表(第369図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.2)	4.7		ABC	A	にぶい橙	50%	No.83,84,他　カマド内　赤彩
2	小形甕	(9.0)	11.3		ABCJ	A	にぶい橙	30%	No.4　覆土(+20cm)
3	甕	(19.0)	5.0		ABCE	A	にぶい褐	15%	No.18　覆土(+13cm)
4	甕	(20.0)	21.5		ABCE	A	にぶい黄橙	25%	No.85　カマド内
5	甕	19.4	42.5	6.3	ABCJ	A	にぶい橙	95%	No.30～39,他　カマド内
6	甕		22.4	6.2	ABC	A	にぶい橙	70%	No.6,58他　覆土(0～+20cm)
7	甕		16.6	5.8	ABCE	A	にぶい黄橙	40%	No.8,77,78　覆土(+6～10cm)
8	甕	20.2	23.8		ABCE	A	にぶい橙	90%	No.79,80　カマド内
9	椀型滓						褐色		カマド内　長径7.1cm　短径5.5cm



第369図　C区第23号住居跡出土遺物

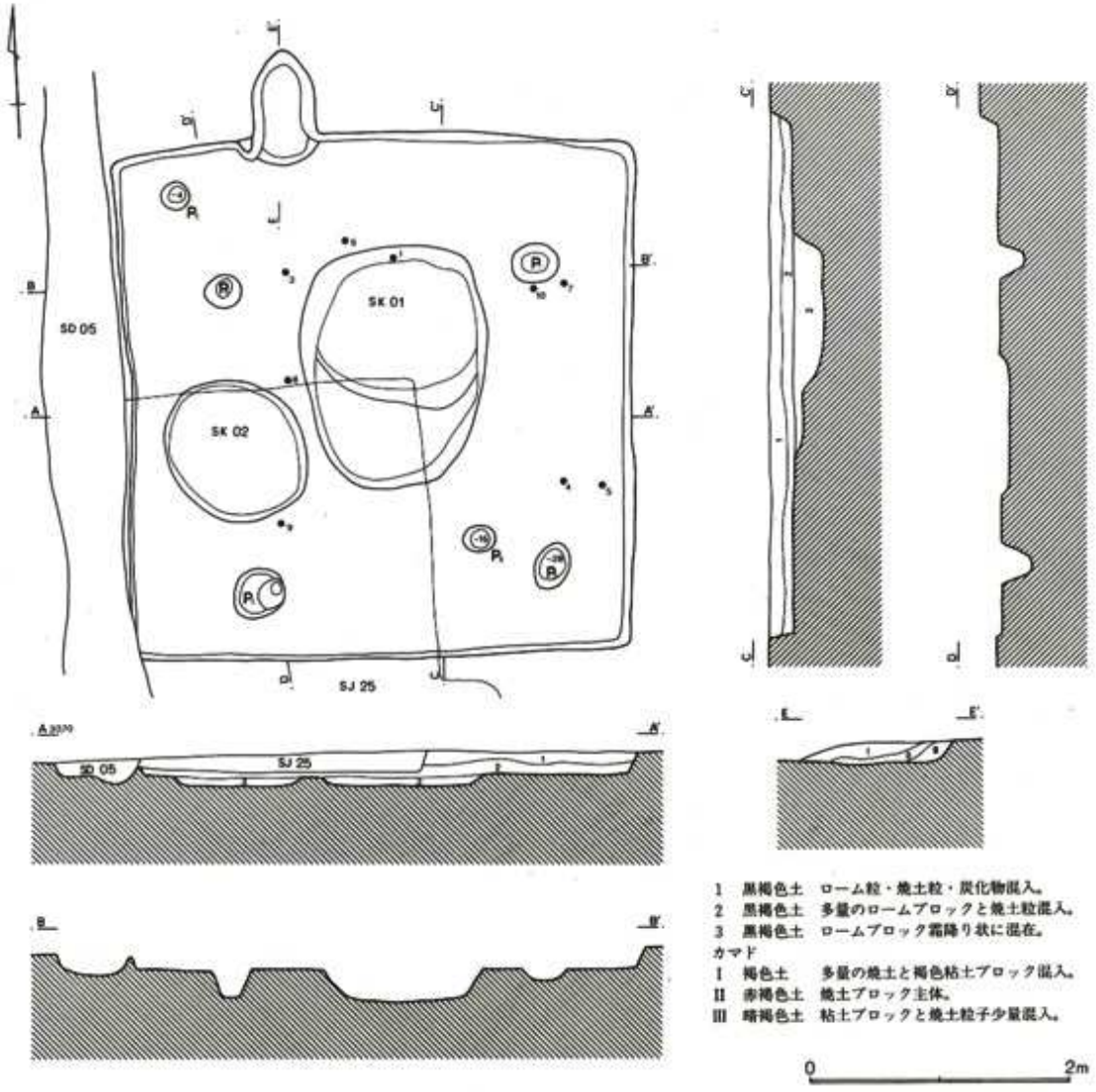
C区第24号住居跡(第370図)

F・G-20・21区に位置する。西壁部は第5号溝跡、南壁部は第25号住居跡に一部切られていたが、概要はほぼ確定できる。形態は方形を呈し、規模は長軸4.08m、短軸4.02m、深さ15cmを測る。主軸方位はN－6°－Eを示す。

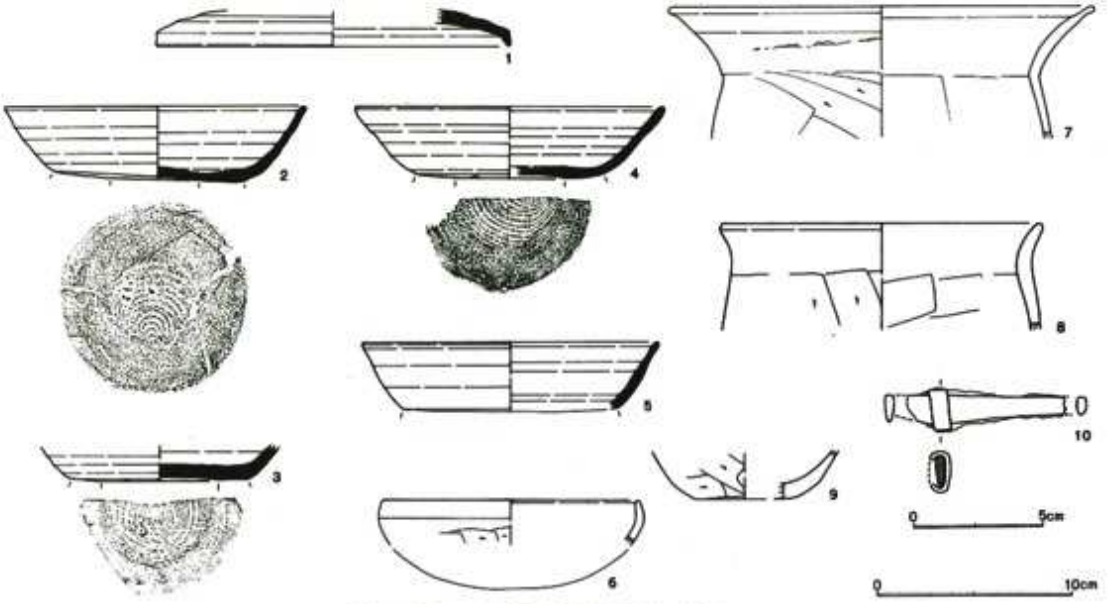
床面はほぼ平坦である。覆土は2層に分かれるが、何れもロームと焼土混じりの黒褐色土で構成され大きな土層変化はない。

カマドは北壁の中央からやや西に寄った位置にあり、壁を65cm切り込んで構築されていた。全長86cm、幅50cmを測り、底面はほぼフラットで床面との段差は殆ど認められない。覆土は3層に分かれ、第Ⅰ・Ⅱ層が天井部崩落土に相当しよう。袖の遺存状態は極めて悪く、左袖に褐色粘土が僅かに残存していたのみで、右袖部は検出できなかった。

ピットは6本検出され、配置からP_1～P_4が主柱穴に相当するものと考えられる。土壙は2基検出



第370図 C区第24号住居跡



第371図　C区第24号住居跡出土遺物

された(SK01・02)。上面には床面が形成されており、また埋土の状態から見て住居に伴う床下土壙となる可能性がある。

貯蔵穴及び壁溝は検出されなかった。

出土遺物には土師器と須恵器、鉄器がある。土師器は坏が口縁部破片数で1点、甕が15点、小形甕1点、台付甕1点(脚部)、須恵器は坏が12点、椀1点、蓋1点と甕、瓶類の胴部片が検出されたが、全て破片である。第371図2・4・5は口径15cm代の大振りの坏である。2・4は器高がやや深めで体部は大きく開く。底部から体部の以降は丸みをもち、明確な腰はつくらない。また、口縁部は僅かに内弯気味に納め、4はやや肥厚する。6は口縁部が内屈する北武蔵型坏で、混入の可能性がある。7の土師器甕は口縁部が「く」の字状に長く外反する。9は鉄製刀子で銹化が著しいがX線撮影により鋒が残存することが判明した。平棟で、刃部に緩い関が付く模様である。残長6.1cm、刃部最大幅1.2cmを測る。土器群は全体的にみて8世紀前半代のもので構成される。須恵器坏と土師器甕から稲荷前Ⅶ期前半代と考えておきたい。

C区第24号住居跡出土遺物観察表(第371図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(18.0)	1.8		ABC	A	赤灰	5%	覆土
2	坏	15.2	3.9	9.7	ABC	A	緑灰	60%	No.1　床面
3	坏		1.8	(9.0)	ABC	A	灰白	30%	No.5　覆土(+13cm)
4	坏	(15.5)	3.6	(9.6)	ABC	A	灰	25%	No.43　覆土(+10cm)
5	坏	(15.0)	3.4	(11.0)	ABC	A	黄灰	5%	No.48　覆土(+10cm)
6	坏	(13.0)	2.3		ABE	A	にぶい橙	10%	No.154　床面　北武蔵系
7	甕	(23.0)	6.7		ABEJ	A	にぶい橙	15%	No.27　覆土(+6cm)
8	小形甕	(16.0)	5.4		ABC	B	にぶい黄	10%	No.12　覆土(+12cm)
9	甕		2.4	(5.3)	ABEJ	A	にぶい褐	15%	No.156　床面
10	刀子								No.25　覆土(+10cm)　残長6.1cm

C区第25号住居跡(第372図)

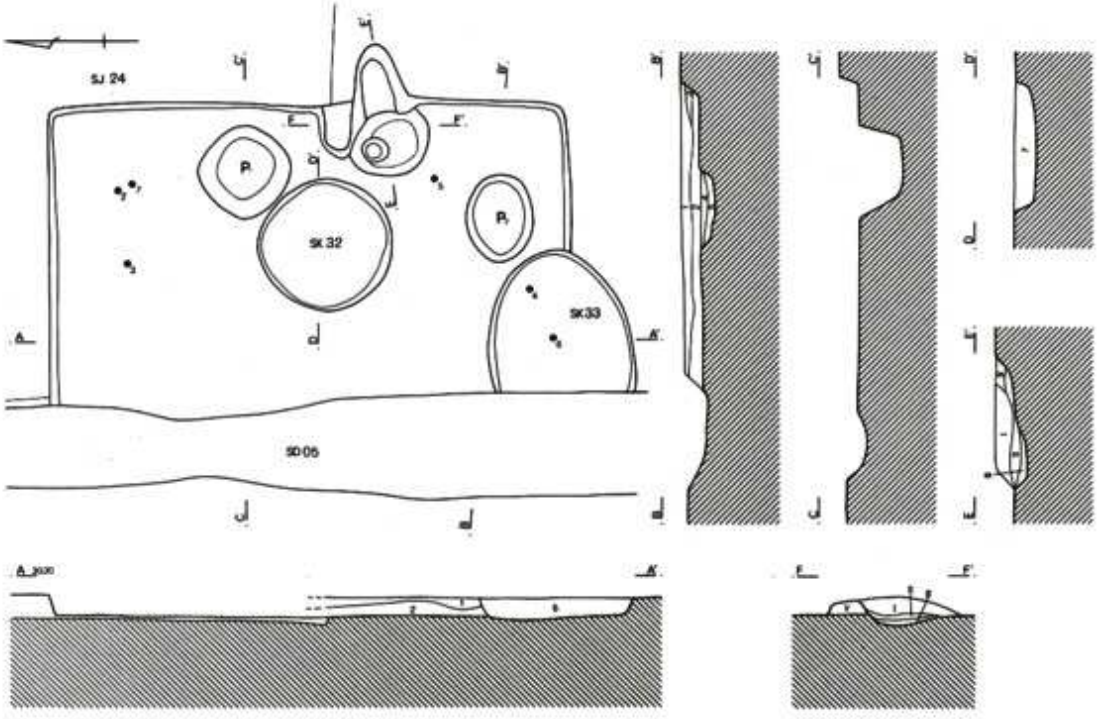
G-20・21区に位置する。重複関係は第24号住居跡を切り、第5号溝跡に西壁部を破壊されている。第5号溝跡西側には延びないことから形態は横長の長方形を呈するものと推定され、規模は長軸4.02m、残存短軸2.40m、深さ15cmを測る。主軸方位はN－88°－Eを示す。

床面は概ね平坦である。住居覆土は基本的に上下2層に分かれ、下層には多量のロームブロックが含まれ(第2層)、人為的な堆積環境を想定しても良いかもしれない。

カマドは東壁に位置し、壁外に40cm程切り込んで構築される。全長100cm、壁ラインの上幅は44cmで、焚口部は土壙状に一段深く掘り込まれていた。埋土は4層に分かれ、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ層は天井部及び袖部の崩落土、第Ⅲ層は掘り方かもしれない。右袖は遺存状態が悪く、断面観察によっても検出できなかった。左袖は灰褐色粘質土で構築されていたが、基底部が辛うじて残存する程度で詳細は不明である。

カマド脇にはピットが2基存在する。P_1は遺構に伴うか否か不明であるが、P_2については伴うものと考えられ貯蔵穴の可能性もある。壁溝は検出されなかった。

また、土壙が2基検出された(SK32・33)が、断面観察に拠れば何れも住居に伴うものではない。



1 黒褐色土　焼土・ローム粒子を少量含む。
2 暗褐色土　多量のロームブロックと少量の焼土粒子を含む。
3 褐色土　ローム粒子をやや多く含む。
4 黒褐色土　ローム粒子と焼土粒子を少量含む。
5 黄褐色土　多量のロームブロックとローム粒子を含む。
6 黒褐色土　多量のロームブロックと焼土粒子を含む。
7 黒色土とロームの混土層。

カマド
Ⅰ 褐色土　少量の焼土粒子とやや多量の灰褐色粘土を含む。
Ⅱ 灰褐色土　粘質土を主体に多量の焼土ブロックを含む。
Ⅲ 黄褐色土　ローム粒子と焼土粒子を多量に含む。
Ⅳ 暗褐色土　焼土ブロックを少量含む。
Ⅴ 灰褐色土　粘質土主体にロームと焼土を含む。

0　2m

第372図　C区第25号住居跡

但し、ＳＫ33から出土した土器は住居のものと時期的に隔たりはない。住居から流れ込んだものであろうか。。

出土遺物は少ない(第373図)。土師器と須恵器があり、出土数は土師器坏が１点、甕は胴部片のみである。須恵器は坏が口縁部破片数で２点、椀が１点、蓋が２点、瓶類の胴部片が１点となる。良好な資料に恵まれないが、須恵器坏底部は全面回転ヘラケズリが施されるものと、周辺ヘラケズリのものがある。口径と底径はやや縮小しており、おそらく稲荷前Ⅷ期からⅨ期の土器群で構成されるものと考えられる。

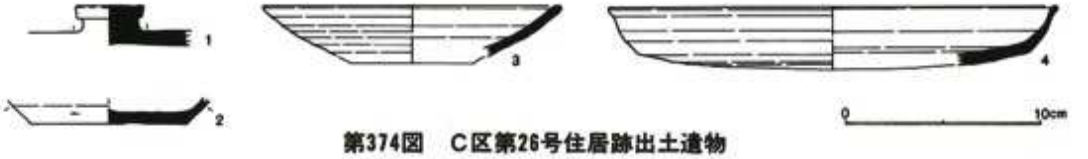
第373図　Ｃ区第25号住居跡出土遺物

Ｃ区第25号住居跡出土遺物観察表(第373図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(16.9)	1.5		ＡＢＣ	Ａ	白	5%	覆土
2	椀	(18.8)	3.1		ＡＢＣ	Ａ	灰白	15%	№102,103　覆土(＋10cm)
3	坏	(12.0)	2.3		ＡＥ	Ａ	にぶい橙	10%	№13　覆土(＋18cm)
4	坏	12.8	2.9		ＡＢＣ	Ａ	灰	15%	№23　床面
5	坏		1.5	(7.6)	ＡＢＣ	Ａ	緑灰	25%	№1　覆土(＋12cm)
6	坏		1.6	(8.8)	ＢＣ	Ｂ	灰白	10%	№10　覆土(＋10cm)
7	坏		1.2	7.8	ＡＢＣ	Ａ	青灰	70%	№42,172　覆土(＋4～10cm)

Ｃ区第26号住居跡(第375図)

Ｈ-21区に位置する。第６号住居跡と切り合い、本住居跡の方が新しいものと考えられる。遺構確認面が既に床面まで達しており、６号住居内に位置する部分に関しては詳細は不明である。形態は長方形を呈するものと推定される。規模は東西長3.00ｍ、南北の残存長1.68ｍを測る。主軸方位は



第374図　Ｃ区第26号住居跡出土遺物

Ｃ区第26号住居跡出土遺物観察表(第374図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋		2.0		ＡＢＣ	Ａ	黄灰	50%	№145　SJ06上面　鈕完存
2	坏		1.2	8.0	ＡＢＣ	Ａ	灰白	25%	№198　SJ06上面
3	皿	(15.0)	2.6		ＡＢＣ	Ａ	褐灰	20%	№174　SJ06上面
4	盤	22.8	3.0		ＡＢＣ	Ａ	灰	25%	№273　SK01とSJ06上面で接合

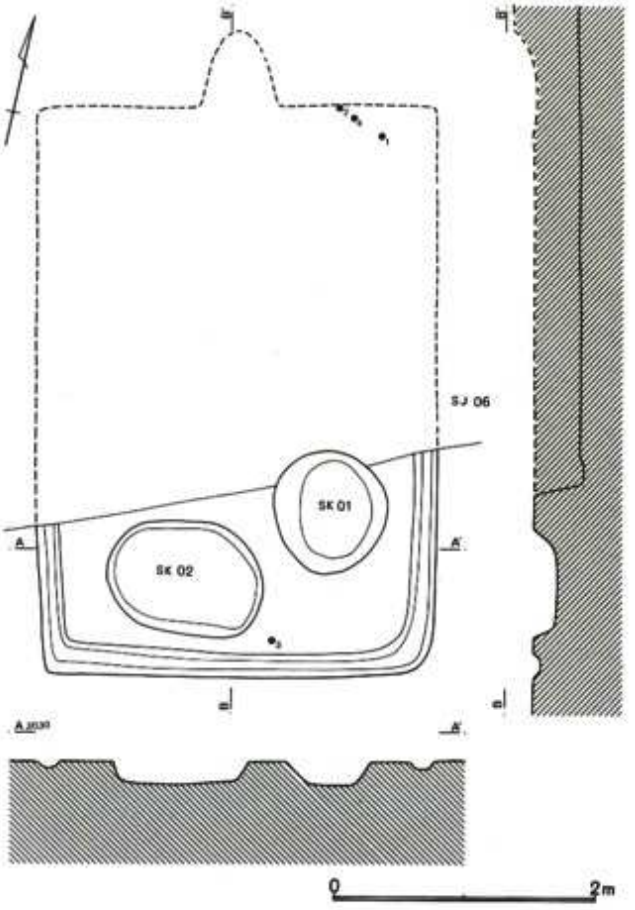
N－14°－Wを示す。

床面は平坦である。覆土、カマド等の詳細は不明とせざるを得ない。

壁溝は残存部では巡っている。深さ5㎝程でローム混じりの暗褐色土で構成される。また、住居内に土壙が2基検出された(ＳＫ01･02)。埋土はロームブロックと黒色土が混在し、住居に伴うか床下土壙と推定される。

出土遺物は須恵器が4点検出されたに留まる。

第374図4は無台盤である。本住居床面及びＳＫ01内の破片と第6号住居跡確認面のそれが接合した。1～3は重複する第6号住居跡の上層から出土したものである。本住居跡に伴う可能性のあるものとして図化したが、結局4点とも時期が異なり年代決定は難しい。若し盤が伴う遺物とすれば稲荷前Ⅵ期頃となろうか。



第375図　Ｃ区第26号住居跡

Ｃ区第27号住居跡(第377図)

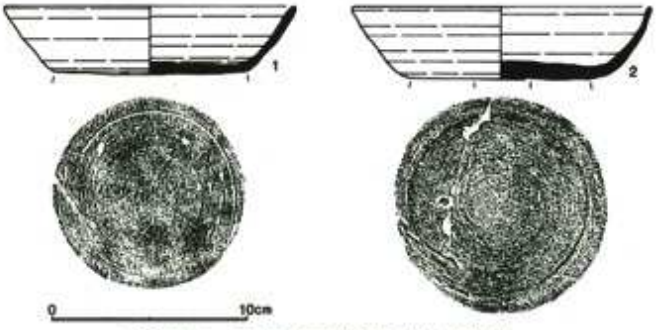
H-20･21区に位置する。遺構確認段階で既に床面下まで達していたため遺存状態は極めて悪い。北西コーナー付近は削平されていたために確認された形態は歪んでいる。本来の平面形態は方形を呈するもとと推定され、規模は長軸4.52ｍ、短軸4.40ｍを測る。主軸方位はＮ－11°－Ｗを示す。

床面は残存しないが、住居壁に沿って方形周溝状の掘り方が検出された。掘り方埋土はロームブロック混じりの褐色土で構成されていた。

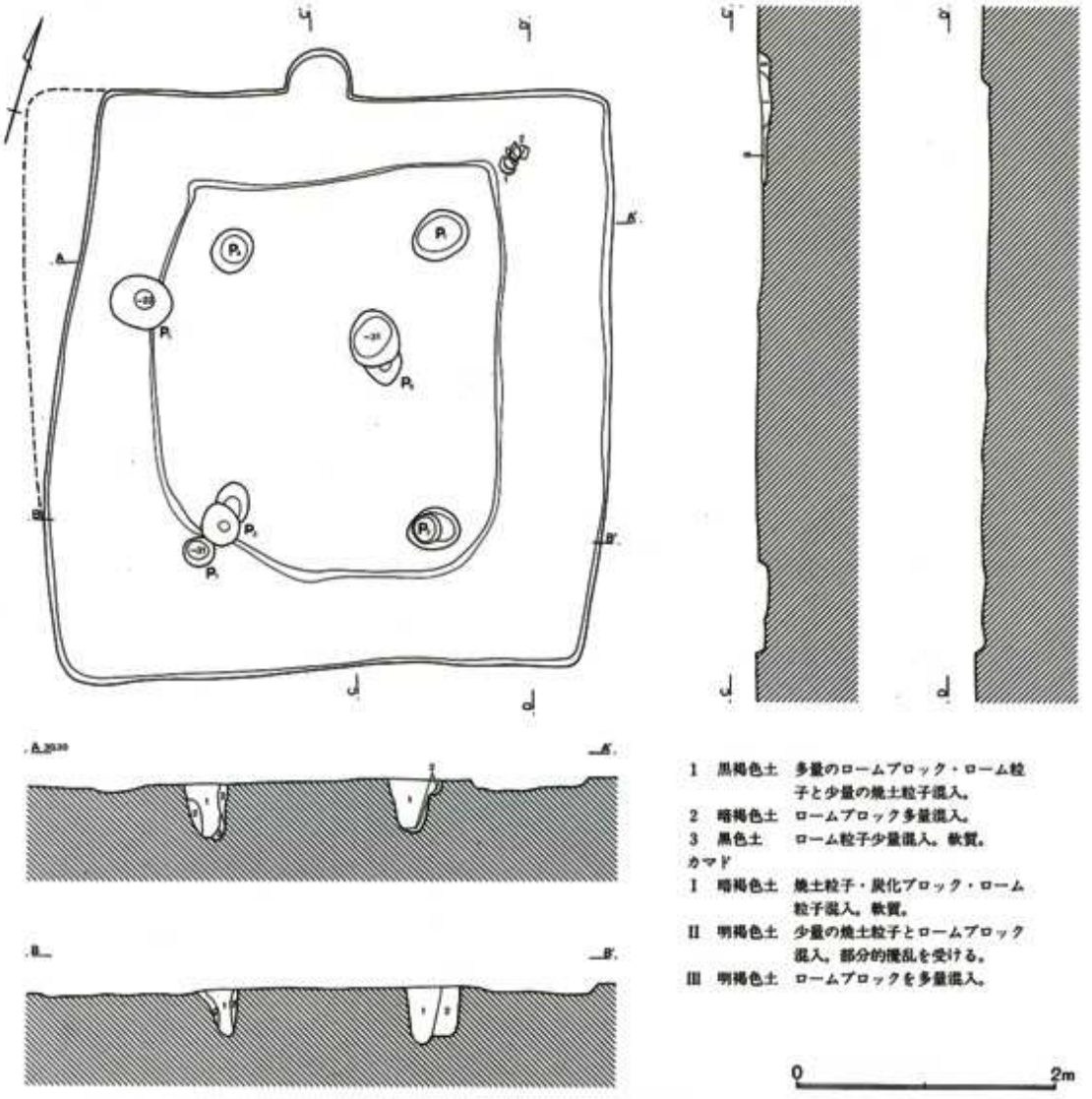
カマドは北壁に位置する。壁を40㎝切り込んで構築され、燃焼部幅は50㎝を測る。堆積状態の詳細は不明である。第Ⅲ層は掘り方埋土と思われる。

ピットは7本検出され、P_1～P_4は規則的に配置され、深度も深く主柱穴と考えられる。

出土遺物は少なく、須恵器坏が2点と土師器甕の胴部片が検出されたのみである。



第376図　Ｃ区第27号住居跡出土遺物



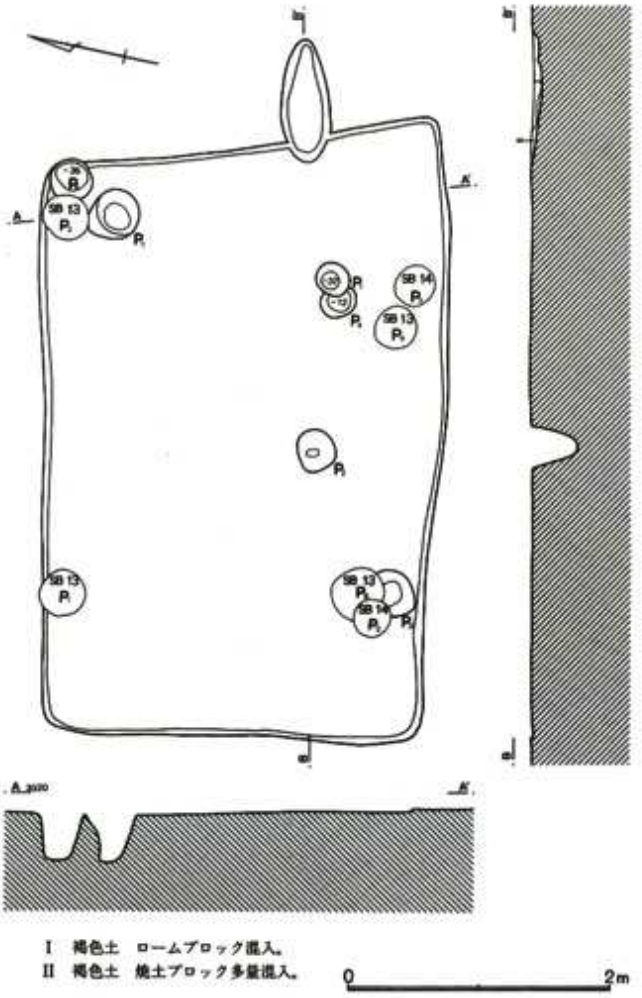
第377図　C区第27号住居跡

第376図1と2は須恵器坏で掘り方内から近接して出土した。但し、掘り方内に埋納されたものなのか、貯蔵穴などの何らかの掘り込みが存在したのかは明らかではない。何れも口径15cm前後と比較的大振りの盤状を呈する坏である。底部は平底化し、体部は内弯気味に開いている。

1は口径14.8cm、器高3.4cm、底径9.9cm。胎土に石英、白色粒子、白色針状物質を含み焼成は良好である。色調は灰白色で約90%残存する。註記No.13。底部は全面回転ヘラケズリで、「キ」のヘラ記号がみえる。掘り方底面出土。

2は口径15.2cm、器高3.7cm、底径9.2cm。胎土に石英、白色粒子と白色針状物質を含み、焼成は良好である。色調は灰白色。全体の約75%が残存する。註記No.12。掘り方底面から4cm浮いたレベルから出土した。

2点とも残存率が高く、住居に伴う遺物と考えて良いであろう。口径が大きく、浅身、盤状の器形等から稲荷前VII期に比定される。



第378図 C区第28号住居跡

C区第28号住居跡(第378図)

H-21区に位置する。第13号及び14号掘立柱建物跡柱穴の攪乱を受けている。掘り込みは全体に浅く、遺構確認段階でほぼ床面が露出していた。カマドの位置する東辺が歪んでいるが、形態は概ね長方形を呈し、規模は長軸4.68m、短軸3.08mを測る。主軸方位はN－78°－Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は殆ど残されていなかった。

カマドは東壁に位置する。底面が辛うじて残存するのみで遺存状態は極めて悪い。形態は長楕円形を呈し、壁を約70cm切り込んで構築されていた。燃焼部幅は36cmと狭い。覆土には焼土ブロックが多量に含まれていた。

ピットは6本検出されたが、埋土の状態等から直接伴うものではないと思われる。貯蔵穴や壁溝等の施設は検出されなかった。

遺物は全く残されておらず、時期は不明である。

C区第29号住居跡(第379図)

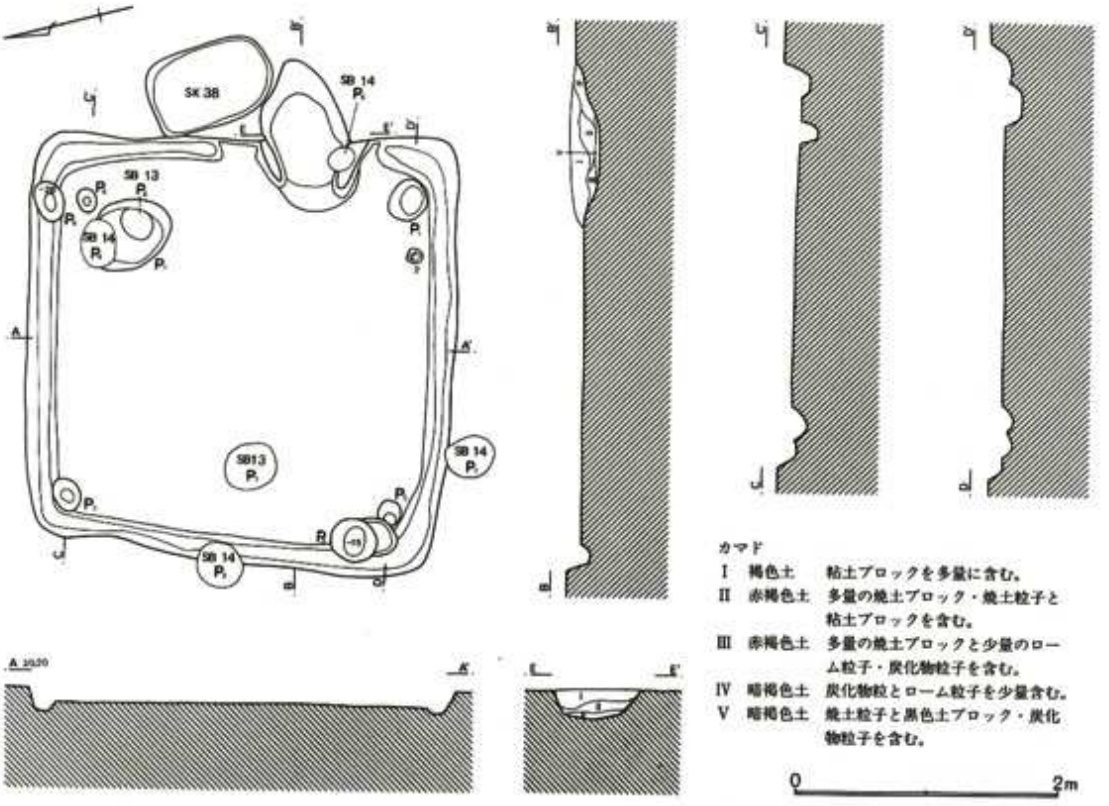
H-21区に位置し、第13号及び第14号掘立柱建物跡柱穴の攪乱を受けていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.34m、短軸3.28m、深さ10cmを測る。主軸方位はS－75°－Eを示す。

床面は平坦である。覆土はロームブロックを多量に含む黒褐色土を基調としており、大きな土層変化は観察されなかった。人為的に埋め戻されたものと推定される。

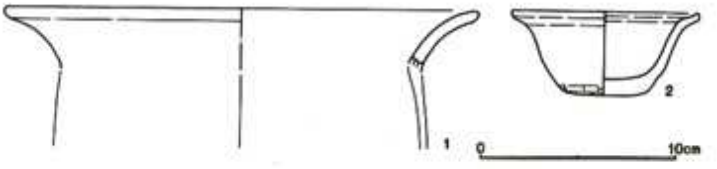
カマドは東壁に位置し、壁を60cm切り込んで構築される。規模は全長114cm、幅68cmで、底面は床面から10cm程掘り込まれていた。覆土は第Ⅰ～Ⅲ層は天井部崩落土、第Ⅳ層は流入土か。袖は褐色粘土を用いて構築されていたが遺存状態はあまり良くない。

ピットは掘立柱建物跡柱穴も含めて12本検出されているが、遺構に伴うものは明確にはできなかった。壁溝は深さ5～10cm程で、カマドを除いて全周する。

出土遺物は極めて少ない。土師器の甕口縁部片2点と鉢1点、須恵器坏体部片、壺胴部片が検出されたのみである。第380図2は混入か。正確な時期は不明とせざるを得ない。



第379図　C区第29号住居跡



第380図　C区第29号住居跡出土遺物

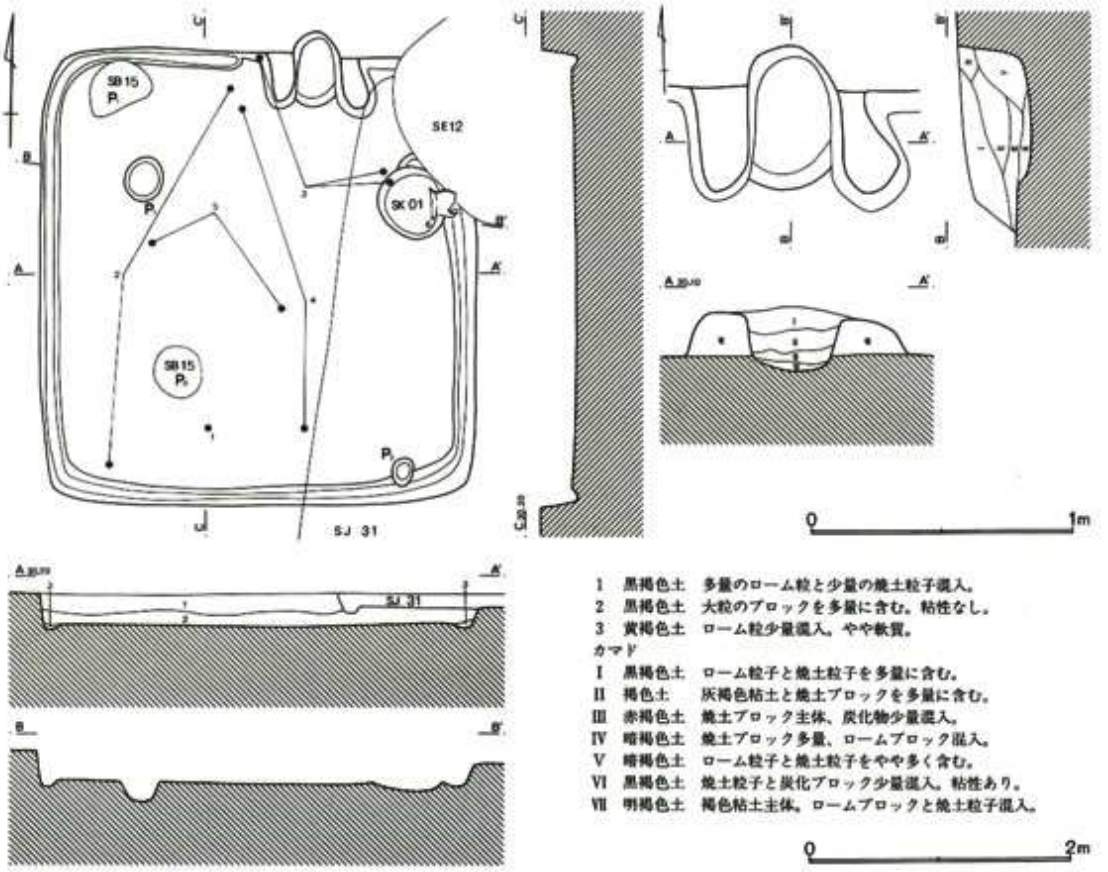
第380図1は甕の口縁部片である。推定口径は24.0cm、胎土に石英・白色粒子・白色針状物質・角閃石を含む。焼成は普通である。色調は橙で口縁部の約10%が残存する。覆土から出土した。2は小形の鉢か。口径9.4cm、器高4.3cm。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含み、焼成は良好である。色調は浅黄橙色。残存率は90%。床面から出土した。

C区第30号住居跡(第381図)

H・I-21区に位置する。第31号住居跡、第15号掘立柱建物跡、第12号井戸跡と重複し、本住居跡が最も古いものと考えられる。形態は方形を呈し、規模は長軸3.50m、短軸3.36m、深さ25cmを測る。主軸方位はN－1°－Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は基本的に上下2層に分かれる(第1・2層)。上層にはローム粒子が、下層にはロームブロックが多量に含まれ人為的な埋め戻しの可能性がある。

カマドは北壁に位置し、先端部は壁を20cm程切り込んで構築されていた。焚口から先端部までの長さは55cm、最大幅32cmを測り規模は比較的小さい。燃焼部底面はフラットで奥壁は直角近い角度で立ち上がる。カマド埋土は6層に分かれ、第II～IV層は天井部崩落土、第VI層が灰層となろうか。



第381図　C区第30号住居跡・カマド

袖は褐色粘土を主体に構築されていた(第VII層)。

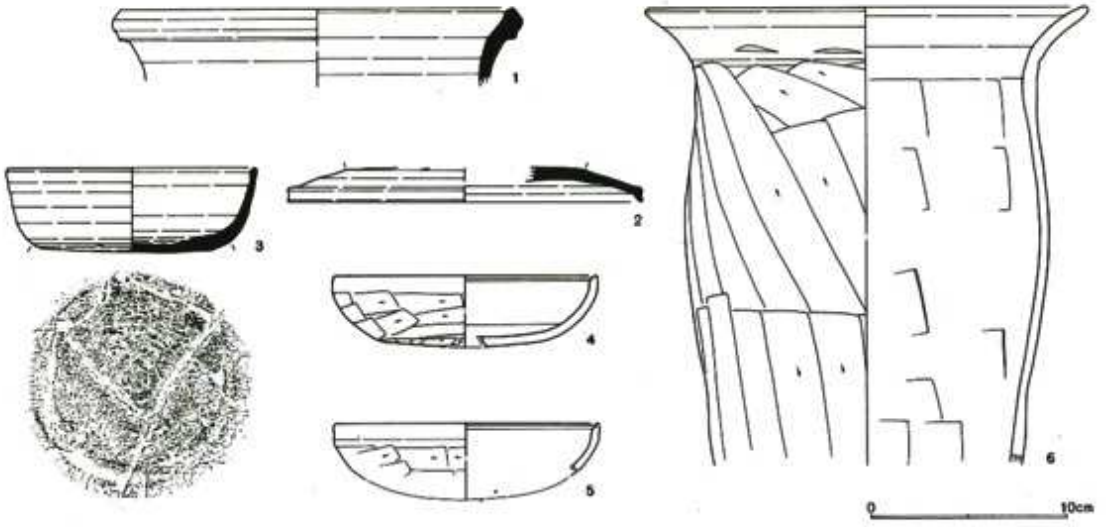
ピットは2本検出されているが、主柱穴ではなかろう。土壙は1基、東壁際から検出された。埋土はロームブロック混じりの黒褐色土で構成され、掘り方と推定される。

壁溝は深さ5㎝程でカマドを除き全周する。

出土遺物には土師器と須恵器があるが量的には少ない。出土数は土師器は坏が4点、甕1点、壺3点、須恵器は坏が2点、蓋1点、壺1点となる(いずれも口縁部破片数)。

土師器坏は口縁内面に沈線をもつ点には比企型坏の影響を留めているが、器形的には既に比企型坏の範疇からは外れる(続比企型坏)ものである(第382図4・5)。その他、模倣坏系の比企型坏小片が2点含まれている。

須恵器は灰色に硬く焼き締まっているものはなく、いずれも灰白色または部分的に黄灰色となるやや焼きの甘い製品である。第382図3の須恵器坏は、口縁部内面に沈線風の凹みが1条巡る点に特色がある。底部は平底風で、風化のため判然としないものの全面回転ヘラケズリ調整と思われる。1は短頸壺で残存部以下は胴部に移行する。土師器甕(6)は長胴で、胴部上位に張りをもつ。須恵器坏には白色針状物質が含まれ在地産であることは疑いないが、鳩山窯跡群には類例は認められない。鳩山窯跡群が本格的に生産を開始する前段階の製品と見て良かろう。土師器坏及び甕の様相とも矛盾せず、稲荷前V期に位置付けられよう。



第382図　C区第30号住居跡出土遺物

C区第30号住居跡出土遺物観察表(第382図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(20.0)	4.0		ABC	D	浅黄	10%	No.57　覆土(+6cm)
2	蓋	(18.0)	1.7		ABC	A	灰オリーブ	15%	No.9,34　覆土(+13~21cm)
3	坏	12.6	4.3		ABCE	D	灰白	90%	No.41,83,他　覆土(0~+16cm)
4	坏	(13.4)	3.6		ABC	B	にぶい橙	30%	No.19,33　床面　無彩
5	坏	(13.5)	2.7		AB	A	橙	20%	No.11,18　床面　無彩
6	甕	22.2	23.2		ABEJ	B	にぶい橙	50%	No.49,48,109　床面

C区第31号住居跡(第383図)

I-21・22区に位置し、西壁部は第30号住居跡覆土上に構築され、北壁は第12号井戸跡に切られている。また、第15号掘立柱建物とも重複するが、床面の状況から本住居跡の方が古いものと判断された。形態はを長方形を呈するものと推定され、規模は長軸4.28m、短軸3.68m、深さ10cmを測る。主軸方位はN－2°－Eを示す。

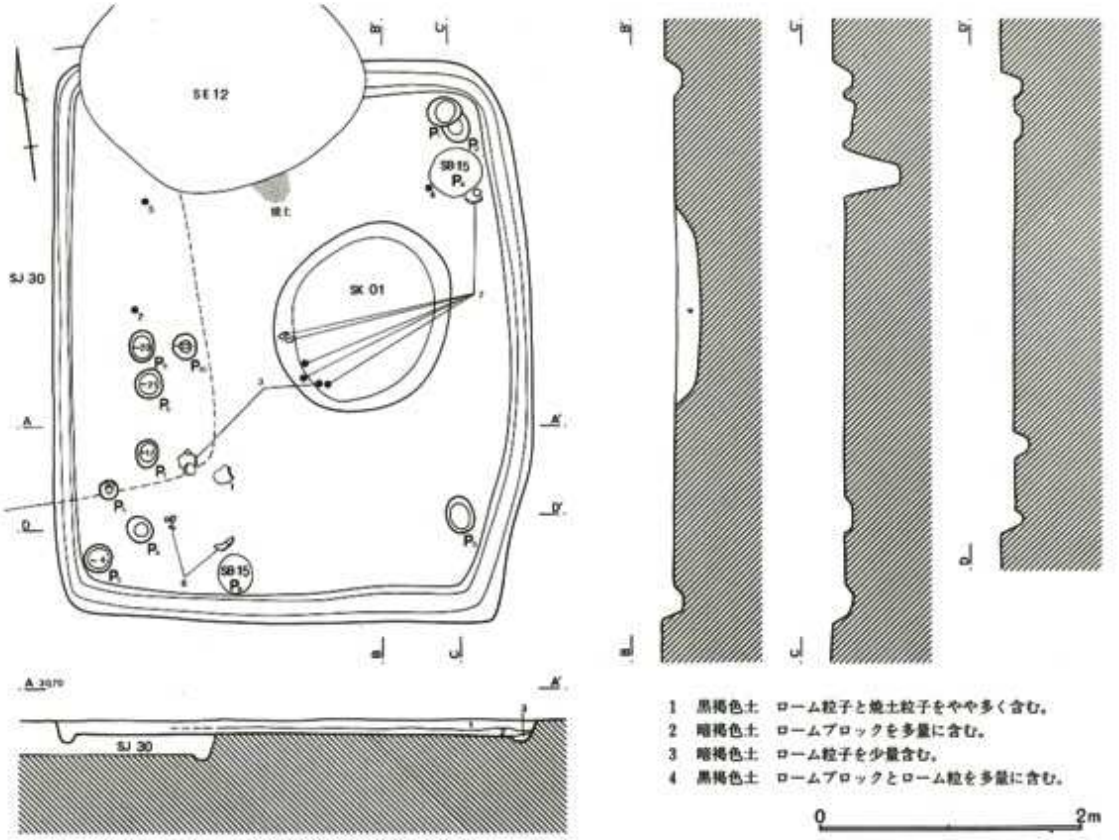
床面は平坦で、住居北半部の床面には焼土が薄く堆積していた。覆土は大きく上下2層に分かれ、下層にロームブロックが多量に含まれていた。

カマドは検出されなかった。第12号井戸跡に接する地点には焼土が検出されたことから、北壁に存在した可能性が高い。井戸跡に壊されたものと思われる。

ピットは10本検出された。埋土の状態からその大半は中世以降の掘り込みと推定され、住居に伴う柱穴は明確にはできなかった。

壁溝は深さ10cm程で全周する。

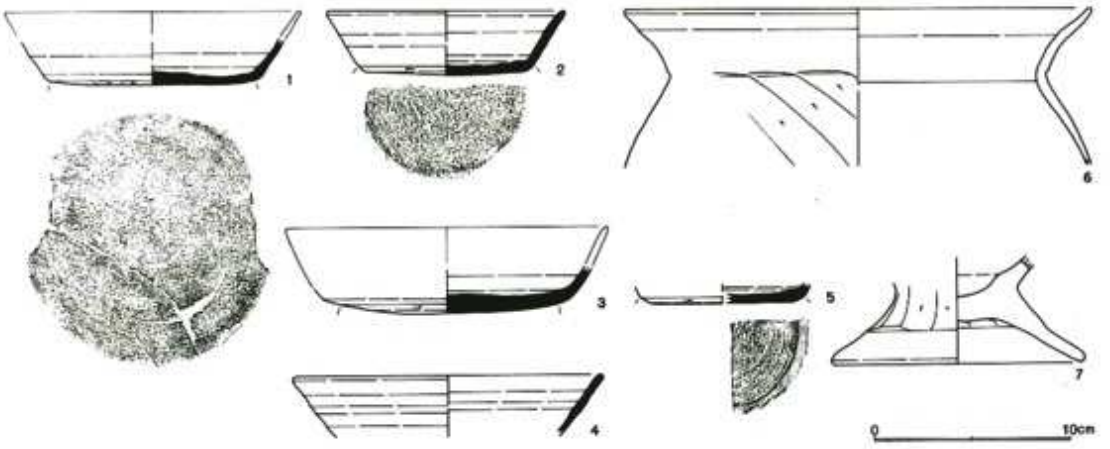
出土遺物には土師器と須恵器があるが、量的には少ない。出土数(口縁部破片数)を示すと、土師器は甕が2点、壺1点、台付甕1点(脚部)、須恵器は坏が3点、椀1点の他、甕胴部片とコップ形土器(?)の底部がある。土師器坏はない。なお、第384図2・5は出土レベルから本住居に組み込んだものである。



第383図　C区第31号住居跡

第384図1・3は大形の坏、2は小形坏である。1はかなり風化しているが、底部調整は手持ちヘラケズリと思われる。2は推定口径12.0cmと相対的に小振りで、器肉は厚くしっかりした作りである。底部は僅かに丸底風を呈し、全面回転ヘラケズリ調整される。腰は明瞭に認められ、口縁部は外反する。大振りの坏をそのままスケールダウンした形態である。3は丸底を呈する大形の坏で、底部は厚手で全面回転ヘラケズリ調整される。体部は腰を作らず丸みをもって立ち上がる。口縁部を欠くが、鳩山窯跡群には良好な類例は見られないようである。5はコップ形土器となろうか。底部は全面回転ヘラケズリされ、底部内面周縁には沈線が巡る。同種の中では大形で、調整技法から見ても古段階に位置付けられようが、他の土器群よりも時期的にはやや下降するかもしれない。6は武蔵型甕の系譜に連なる壺(丸甕)である。

本住居跡の時期としては、須恵器坏類の様相から稲荷前Ⅴ～Ⅵ期としておきたい。いずれにせよ、重複する第30号住居跡との時期差を大きく見積もることはできず、直接建替えた可能性があろう。



第384図　C区第31号住居跡出土遺物

C区第31号住居跡出土遺物観察表(第384図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏		2.2	12.6	ABC	B	灰白	90%	No.55　床面
2	坏	(12.0)	3.3	8.2	ABC	A	灰白	45%	No.98　覆土(+5cm)
3	坏		2.3	(10.4)	ABCJ	D	淡黄	25%	No.54,95　覆土(0～+5cm)
4	坏	(15.6)	3.1		ABC	A	灰白	5%	No.69　覆土(+4cm)
5	コップ形		1.0	(7.4)	ABC	A	明オリーブ灰	25%	No.50　覆土(+4cm)
6	壺	(23.6)	8.0		ABEJ	A	橙	15%	No.58,59　覆土(+5～6cm)
7	台付甕		5.4		ABCE	B	橙	90%	No.11～13,他　床面　脚径12.5cm

C区第32号住居跡(第386図)

E-22区に位置する。形態は方形を呈し、規模は長軸3.12m、短軸2.84m、深さ15cmを測る。主軸方位はN－9°－Eを示す。

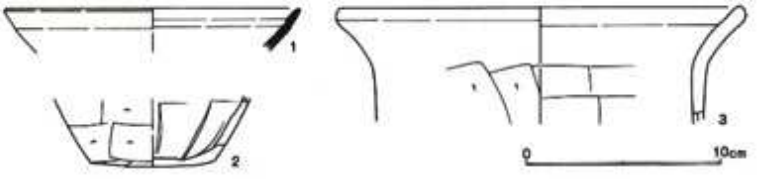
床面は平坦である。覆土は4層に分かれ、ローム混じりの黒褐色土で構成されていた。堆積環境は明確にはできないが、人為的な埋め戻しの可能性もある。

カマドは北壁に位置し、先端は約40cm壁外に突出している。焚口から先端までの長さは78cm、幅70cmを測る。燃焼部底面は床面下10cm程皿状に掘り凹められ、奥壁は直角近い角度で立ち上がる。煙道部は遺存しない。覆土は4層に分かれ、第Ⅰ～Ⅲ層は天井部崩落土に相当しよう。第Ⅳ層は灰層である。袖は遺存状態はあまり良くないが褐色粘土を主体に構築され(第Ⅴ層)、左袖内底面には土師器甕底部(第385図2)が残されていた。袖の補強材に使用されたものかもしれない。

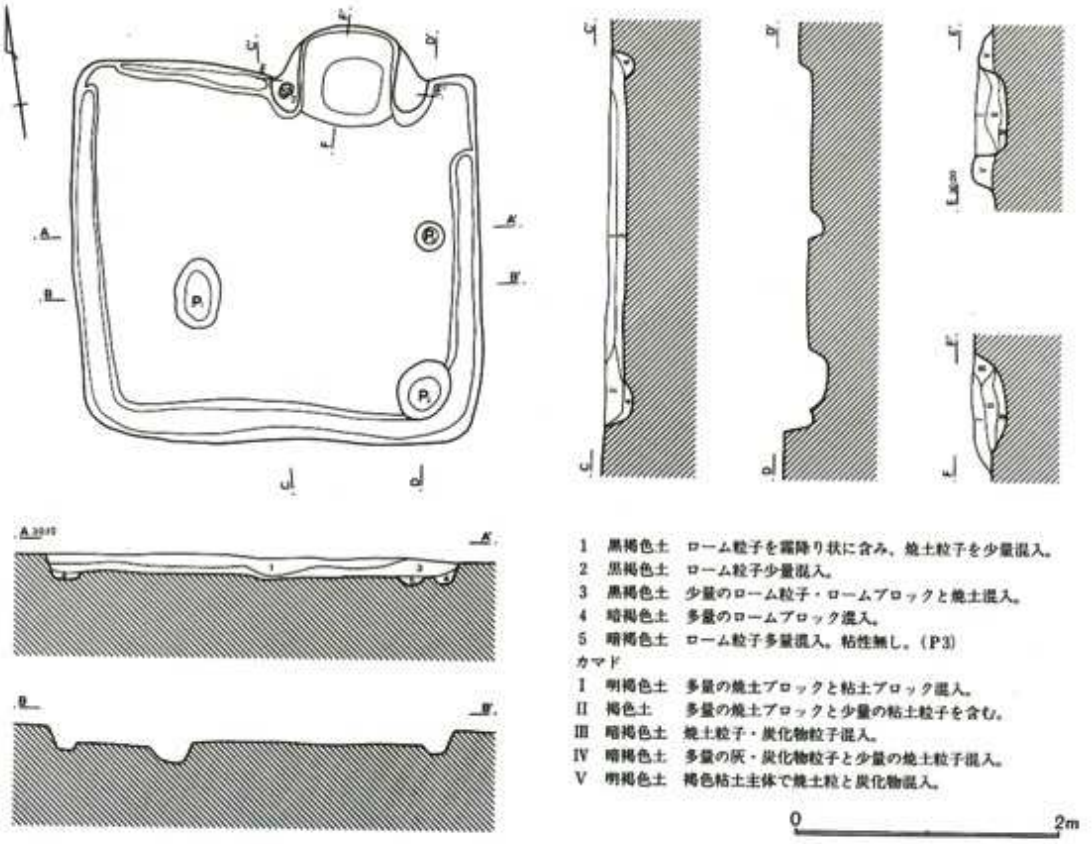
ピットは3本検出されたが、何れも浅く柱穴とするにはやや無理があろう。

壁溝は深さ5cm程でカマドを除き全周する。

出土遺物は極めて少なく、図示した以外には土師器甕が1点検出されたのみである。第385図1の須恵器坏は口径約15cmで口縁部は内湾



第385図　C区第32号住居跡出土遺物



第386図　C区第32号住居跡

気味に開いている。2の甕は武蔵型甕の系譜に連なるものと考えられ、底径は比較的大きく平底風となる。3の甕は長胴甕の範疇に含まれるものであろう。年代決定には材料不足の感は免れないが、1・2から稲荷前Ⅶ期頃と考えておきたい。

C区第32号住居跡出土遺物観察表(第385図)

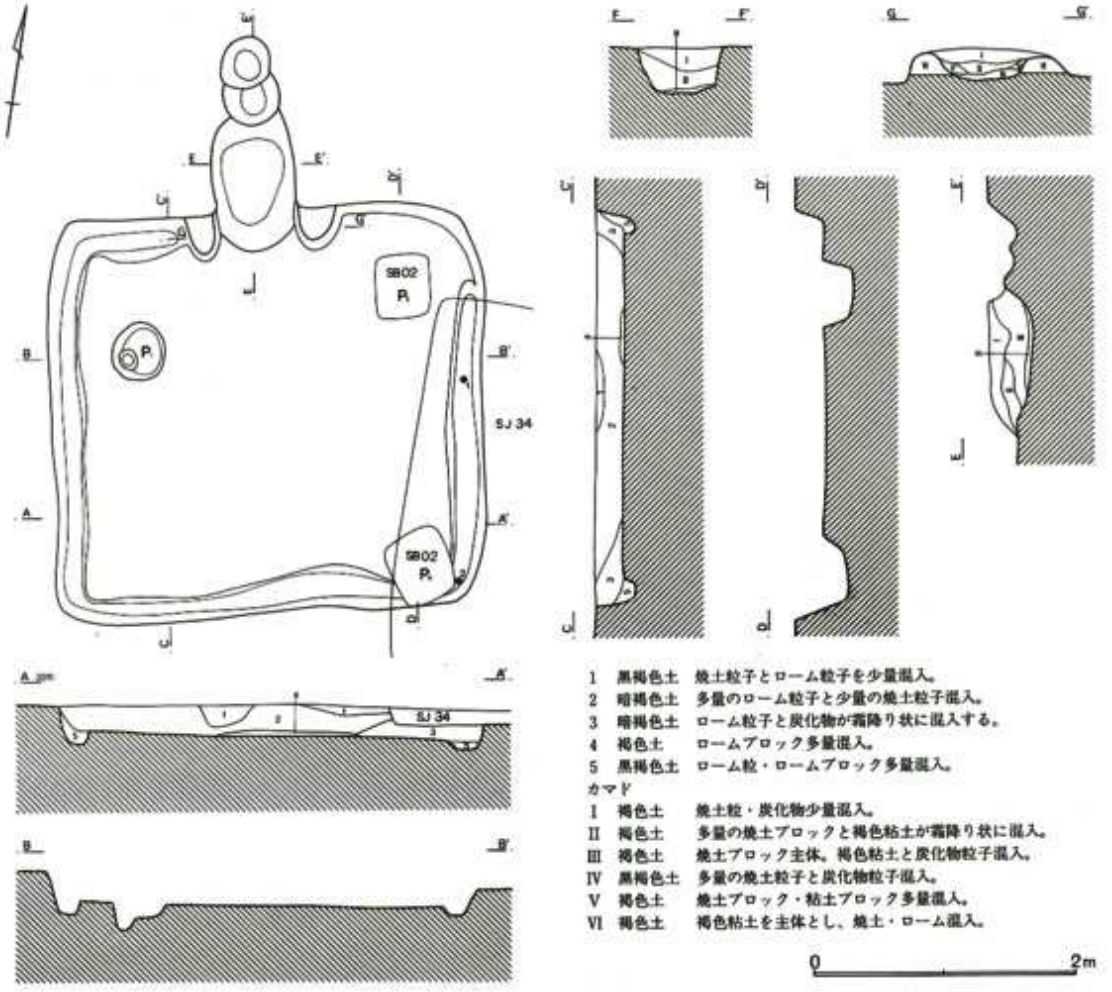
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.0)	2.2		ABC	A	灰	15%	覆土　口唇部磨滅
2	甕		3.5	6.3	ABC	A	にぶい褐	70%	No.2　カマド袖内
3	甕	(20.6)	5.9		ABC	A	にぶい褐	10%	カマド内覆土

C区第33号住居跡(第387図)

E-22区に位置し、五領期の第9号住居跡及び第7号周溝墓を切って構築される。東壁部上面は第34号住居跡に、また床面は第2号掘立柱建物跡柱穴に切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.30m、短軸3.10m、深さ20cmを測る。主軸方位はN－12°－Wを示す。

床面は平坦である。覆土は5層に分かれる。第2層・4層にはロームが多量に含まれ、また第3層にはローム粒子と炭化物が霜降り状に混じるなど、自然堆積とするにはあまりに不自然な状況が観察された。

カマドは北壁に位置し、先端部はピットの攪乱を受けていた。規模は残存長1.02m、燃焼部幅65cmで、底面は床面から15cm程掘り込まれている。燃焼部は大部分が壁外に移行している。奥壁は急



第387図　C区第33号住居跡

第388図　C区第33号住居跡出土遺物

角度で立ち上がるが、煙道部の状態は攪乱のために不明確である。覆土は5層に分かれ、第II・III・V層が天井部及び袖の崩壊土、第IV層が灰層に相当しよう。袖は褐色粘土を主体に構築されていたが遺存状態はあまり良くない(第VI層)。

ピットは１本検出されたが、住居に伴う柱穴とするには無理があろう。

壁溝は深さ10cm程で、カマドと北壁東半を除いた部分に巡っていた。

出土遺物は極めて少なく、須恵器坏１点と瓶類胴部片２点と土師器甕の胴部片が検出されたに過ぎない。第388図１は須恵器坏で、東壁際の覆土から出土した。２は南東コーナー直下の壁溝上面から出土した。おそらく長頸瓶の胴部片と思われ肩部の屈曲はかなり強い。時期決定には資料不足であるが、土器様相から見る限り稲荷前Ⅵ期に主体を置くものと推定される。

Ｃ区第33号住居跡出土遺物観察表(第388図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.3)	3.5	(10.7)	ＡＢＣ	Ａ	灰	15%	№18　覆土(＋12cm)
2	長頸瓶		3.5		ＡＢＣ	Ａ	灰	10%	№13　壁溝上面

Ｃ区第34号住居跡(第389図)

Ｅ-22･23区に位置する。第９号住居跡上部に構築され、西壁部は第33号住居跡を切っている。また、第２号掘立柱建物跡の柱穴により住居中央部を攪乱されていた。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸3.72ｍ、短軸3.00ｍ、深さ10cmを測る。主軸方位はほぼ座標北を示す。

床面は平坦である。覆土は３層に分かれるが、基本的には多量の焼土を含む暗褐色土で覆われていた(第１層)。

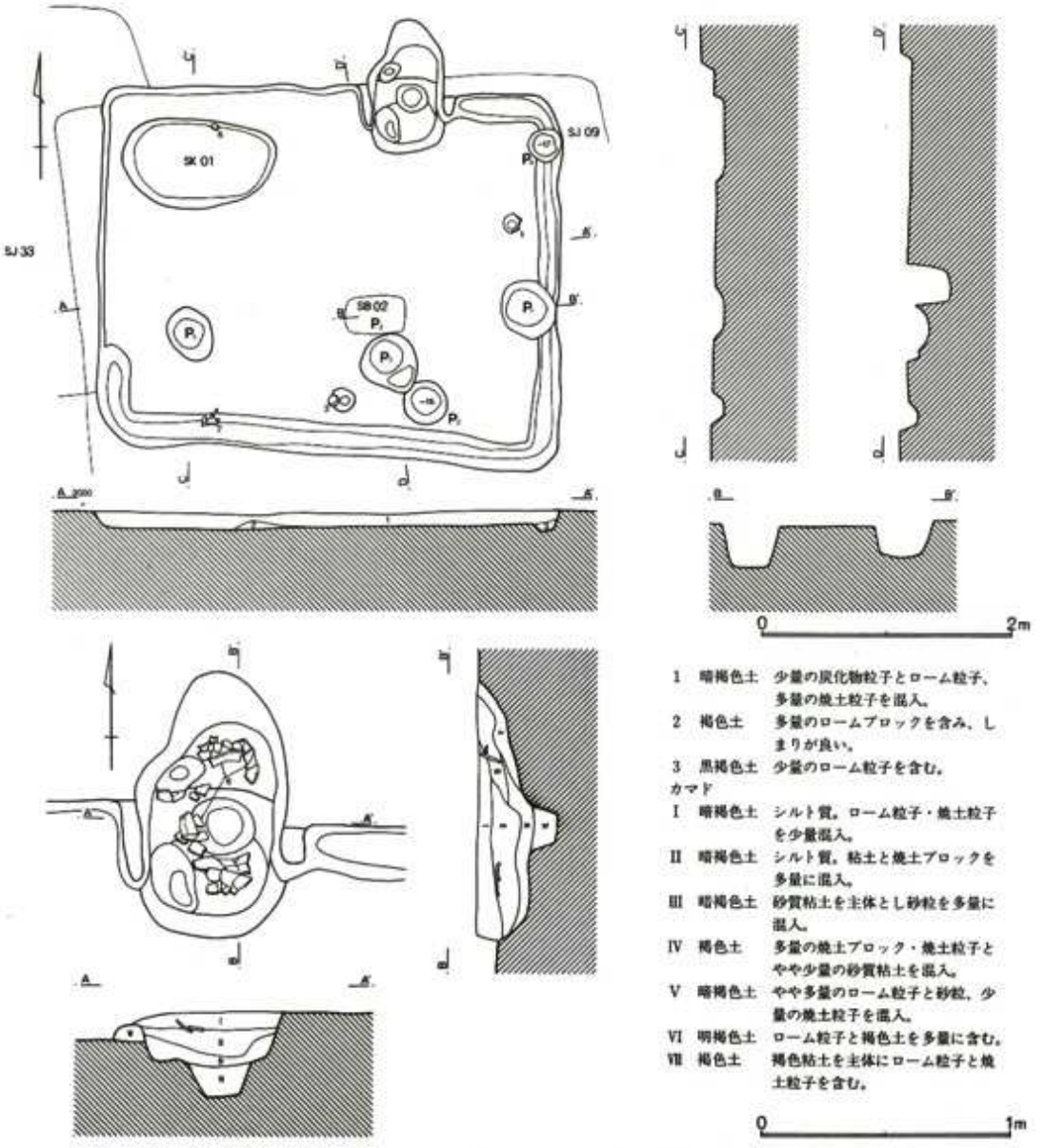
カマドは北壁の中央から東に寄った位置に設けられる。規模は全長1.06ｍ、幅64cmで、壁外に60cm掘り込まれている。燃焼部の底面は床面から15cm程掘り下げられていた。煙道部との境界は判然としない。また、底面には小ピットが３本検出されたが、掘り方であろう。覆土は６層に分かれ、第Ⅱ～Ⅳ層は天井部崩落土と考えられる。袖は褐色の砂質粘土を主体に構築されていた(第Ⅶ層)が遺存状態は悪く、基底部が辛うじて残存していたに過ぎない。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは５本あるが、住居に伴う柱穴は明らかにできなかった。また、北東コーナー内側から浅い土壙が１基(ＳＫ01)が検出された。上面に貼床されていることから掘り方と推定される。

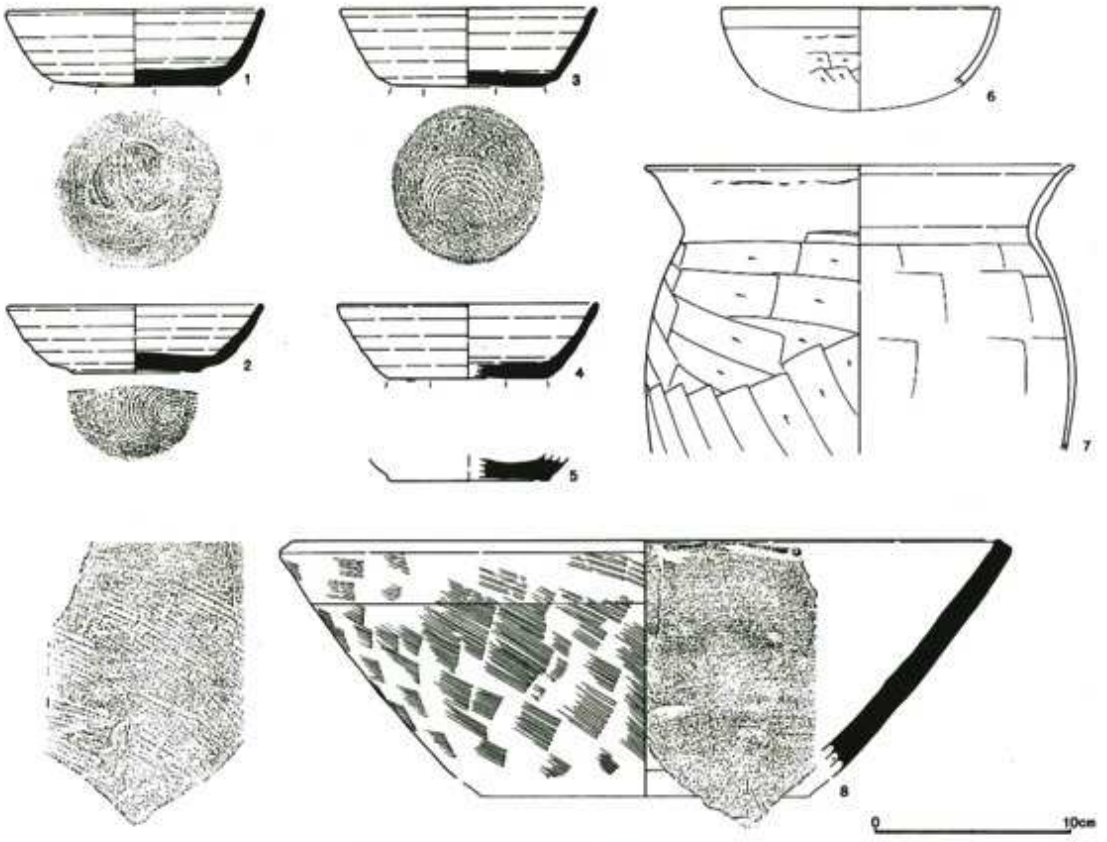
壁溝は深さ５～10cm程で、東壁から南壁を中心に巡っていた。

出土遺物は土師器と須恵器がある。出土数を示すと土師器では坏が１点、甕２点、須恵器では坏が８点、蓋１点、壺１点、鉢１点となる。土師器坏(第390図６)は在地産で深椀形態をなすが、伴う可能性は低いであろう。須恵器坏(１～４)は口径13cm前後で、浅身の２とやや深身の１・３・４に分かれる。前者は底部再調整は省かれており、その分底部の器肉が厚い。後者は底径８cm前後で底部回転糸切り後ヘラケズリ調整される。１・４は器肉が厚く重量感がある。３は薄手で体部も比較的直線的に延びる。８は須恵器鉢で、底部を欠くが浅鉢形態となろう。口縁部の折り曲げがなく８世紀代の鉢の中では異例に属する。寧ろ、９世紀以降顕在化する浅鉢に器形的には近いものがある。カマド内から出土しており、住居に伴うものと考えて良い資料である。土師器甕(７)はいわゆる武蔵型甕に属し、胴部の丸みが強く口縁部は緩やかに外反する。

須恵器坏と土師器甕は８世紀後半代の様相と考えられる。須恵器坏の口径と器肉の厚さから稲荷前Ⅷ期後半に位置付けておきたい。



第389図　C区第34号住居跡・カマド



第390図　C区第34号住居跡出土遺物

C区第34号住居跡出土遺物観察表(第390図)

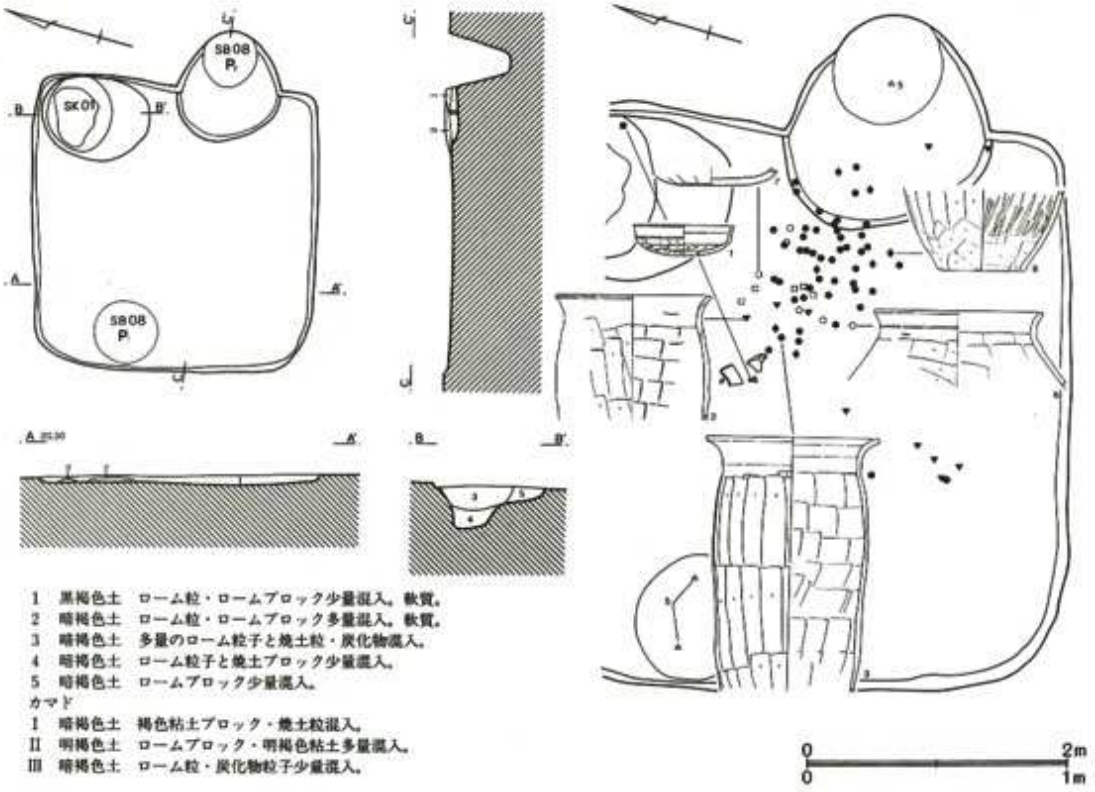
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.9)	3.9	8.3	ABC	A	灰白	75%	No.9　床面
2	坏	(12.8)	3.4	6.2	ABC	A	オリーブ灰	40%	No.1　覆土(+4cm)
3	坏	(12.9)	3.9	7.8	ABC	A	緑灰	35%	No.11　覆土(+4cm)　SJ38遺物と接合
4	坏	(13.2)	3.8	8.1	ABC	A	明オリーブ灰	50%	No.3　カマド内
5	壺		1.3	(8.2)	ABC	A	灰白	30%	カマド内覆土
6	椀	(14.0)	4.0		ABC	B	淡黄	10%	No.2　床面　無彩
7	甕		21.7	14.5	ABE	A	にぶい橙	40%	カマド内No.1,2
8	鉢	(36.0)	12.0		ABC	A	灰	25%	カマド内No.5,9,10

C区第35号住居跡(第391図)

E・F-21・22区に位置し、第8号掘立柱建物跡柱穴にカマド及び床面を切られていた。方形を呈する非常に小形の住居跡で、規模は一辺2.20m、深さは5cm前後と非常に浅い。主軸方位はN－73°－Eを示す。

床面は平坦である。覆土は2層に分かれるが、堆積状態の詳細は明らかにできない。

カマドは東壁に位置する。先端部は第8号掘立柱建物跡柱穴に破壊されていた。直径80cmの円形プランを呈し、底面は床面から5cm程掘り込まれている。覆土には焼土と粘土ブロックが含まれていた。袖は全く遺存せず、本来の形状等の詳細は不明である。



第391図　C区第35号住居跡

貯蔵穴は北東コーナー内側に設置される。形態は楕円形を呈し、底面は2段に掘り込まれ深さは30cm。埋土はロームと焼土混じりの暗褐色土で構成されていた。ピット、壁溝は検出されなかった。

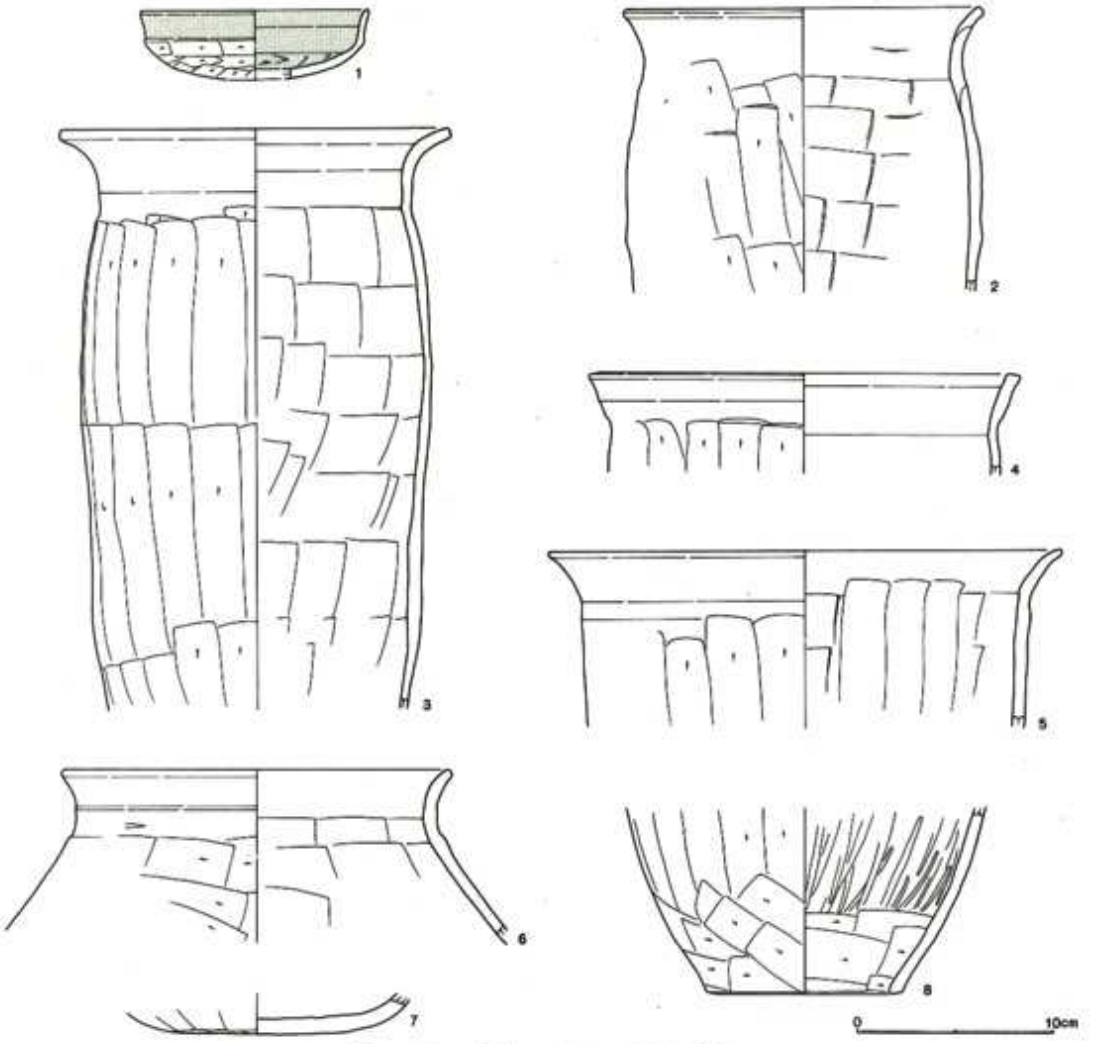
小形で浅い住居にしては出土遺物は纏まっている。ほとんどの遺物が床面から僅かに浮いた位置から散乱した状態で出土した。

出土遺物には土師器と須恵器があるが、須恵器は8世紀以降のもので混入と考えられる。土師器は坏が2点、甕8点、甑3点、壺2点となる。

第392図1は土師器坏で、口唇部内面が磨滅して不明瞭であるが、沈線は見られない。形態的にはいわゆる模倣坏であるが、赤彩が施されている。2・3は長甕で胴部は縦方向のヘラケズリが施される。4・5は甑の可能性が高い。8は甑で内面に縦方向のミガキ痕が残る。比企型坏の様相が不明であるが、甕は胴部に僅かに膨らみが残る。

C区第35号住居跡出土遺物観察表(第392図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.5)	3.5		AB	A	橙	25%	No.175 貯穴内(-7cm) 191 覆土(+4cm)
2	甕	(18.0)	14.4		ABC	A	にぶい橙	10%	No.27,28,他 覆土(+1~7cm)
3	甕	19.7	29.5		ABCJ	B	にぶい褐	60%	No.11,17,他 覆土(+1~8cm)
4	甑	(20.8)	5.1		ABC	A	橙	15%	No.44 覆土(+7cm)
5	甑	(26.0)	9.0		ABC	A	橙	20%	No.165 覆土(+5cm) 203,204 ピット内
6	壺	(19.6)	8.8		ABC	A	橙	15%	No.20,21,他 覆土(+5~8cm)
7	壺		1.9	9.6	ABCJ	B	にぶい橙	80%	No.5,41,他 覆土(+3~7cm)
8	甑		9.4	10.0	ABC	A	橙	60%	No.2,4,他 覆土(+2~7cm)



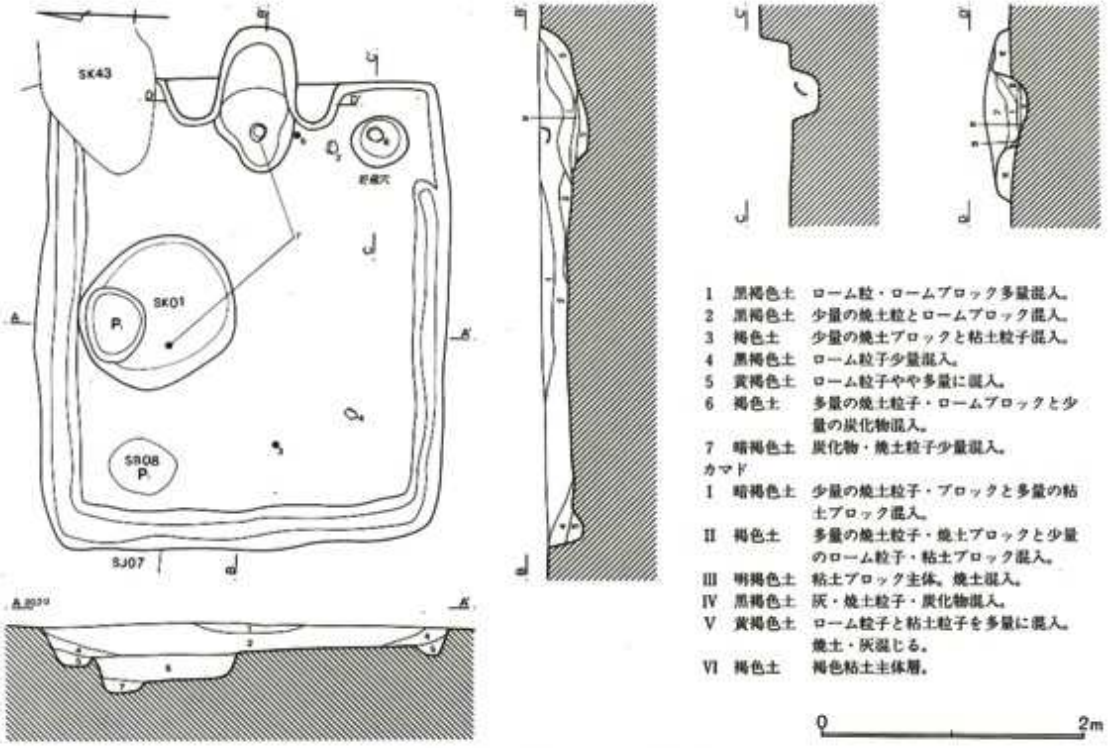
第392図　C区第35号住居跡出土遺物

C区第36号住居跡(第393図)

F-22区に位置し、第7号住居跡を切って構築される。調査当初、東壁の北隅にカマドをもつものと考えたが、調査の結果北東部のそれは住居を切る土壙であることが判明した(SK43)。また、北西部の床面から検出されたピットは第8号掘立柱建物跡の柱穴と考えられ住居に伴うものではない。形態は方形を呈し、規模は長軸3.24m、短軸3.10m、深さ15～25cmを測る。主軸方位はN－90°－Eを示す。

床面は概ね平坦で堅く踏み締められていた。住居覆土は5層に分かれ、基本的にはローム混じりの黒褐色土で埋没していた(第1・2層)。

カマドは東壁中央部に位置し、壁を40cm切り込んで設置される。規模は焚口から先端までの長さ1.10m、幅64cm、床面下の深さ12cmを測る。底面は2段に掘り込まれ、焚口部付近が最も深い。覆土は5層に分かれ、第Ⅰ～Ⅲ層が天井部及び袖部の崩落土、第Ⅳ層が灰層に相当しよう。第Ⅴ層は掘り方と推定される。袖は褐色粘土を用いて構築されていた(第Ⅵ層)。



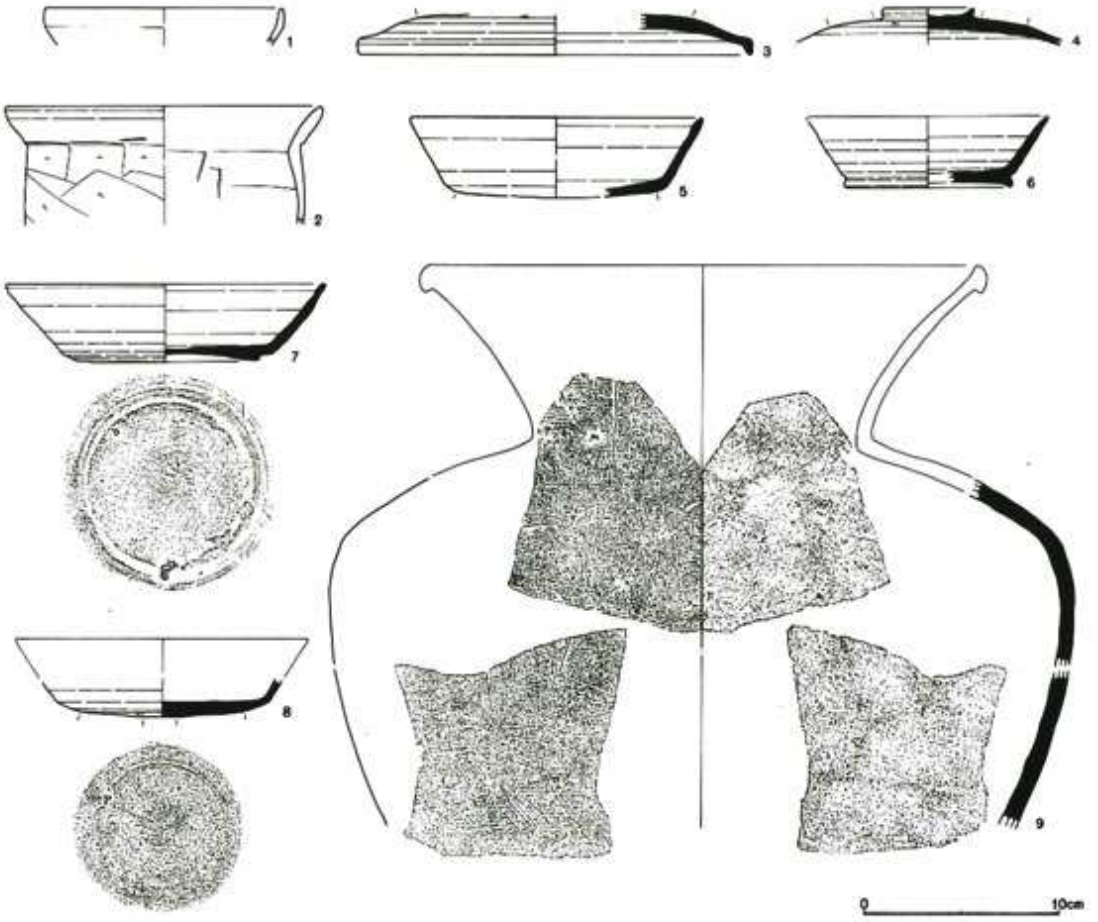
第393図　C区第36号住居跡

貯蔵穴はカマド脇の南東コーナー内側から検出された。直径40cmの円形を呈し、深さは25cmを測る。覆土はロームと焼土粒子混じりの暗褐色土で、覆土中層から須恵器坏底部が出土した。

1号土壙は断面観察から住居に伴う可能性がある。住居の柱穴は明確にできなかった。壁溝は深さ10cm程である。

出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は坏が口縁部破片数で3点、甕3点、小形甕1点、須恵器坏3点、高台坏1点、蓋2点と甕の胴部片がある。土師器坏は北武蔵型坏(第394図1)が2点と模倣坏系の比企型坏が1点あるが、何れも細片で器形は不明。土師器甕は口縁部が短いもの(2)と長く外反するものがあり、何れも口縁下端は深く削り込まれ段をもつ。

須恵器坏は口径15cmを超える大振りのもので、7は糸切りが深かったためかヘラケズリは省略されている。8は中心部に僅かに糸切り痕を留める。6は小振りの高台坏で、口唇部を僅かに欠く。底部は回転ヘラケズリが施され、高台は周辺部に付されている。蓋は天井部の低い偏平なもので4は環状鈕をもつ。9は平底甕となろう。胴部外面は平行叩き後ナデ。内面には当て具痕が残る。遺物様相から見て稲荷前VI期に位置付けられよう。



第394図　C区第36号住居跡出土遺物

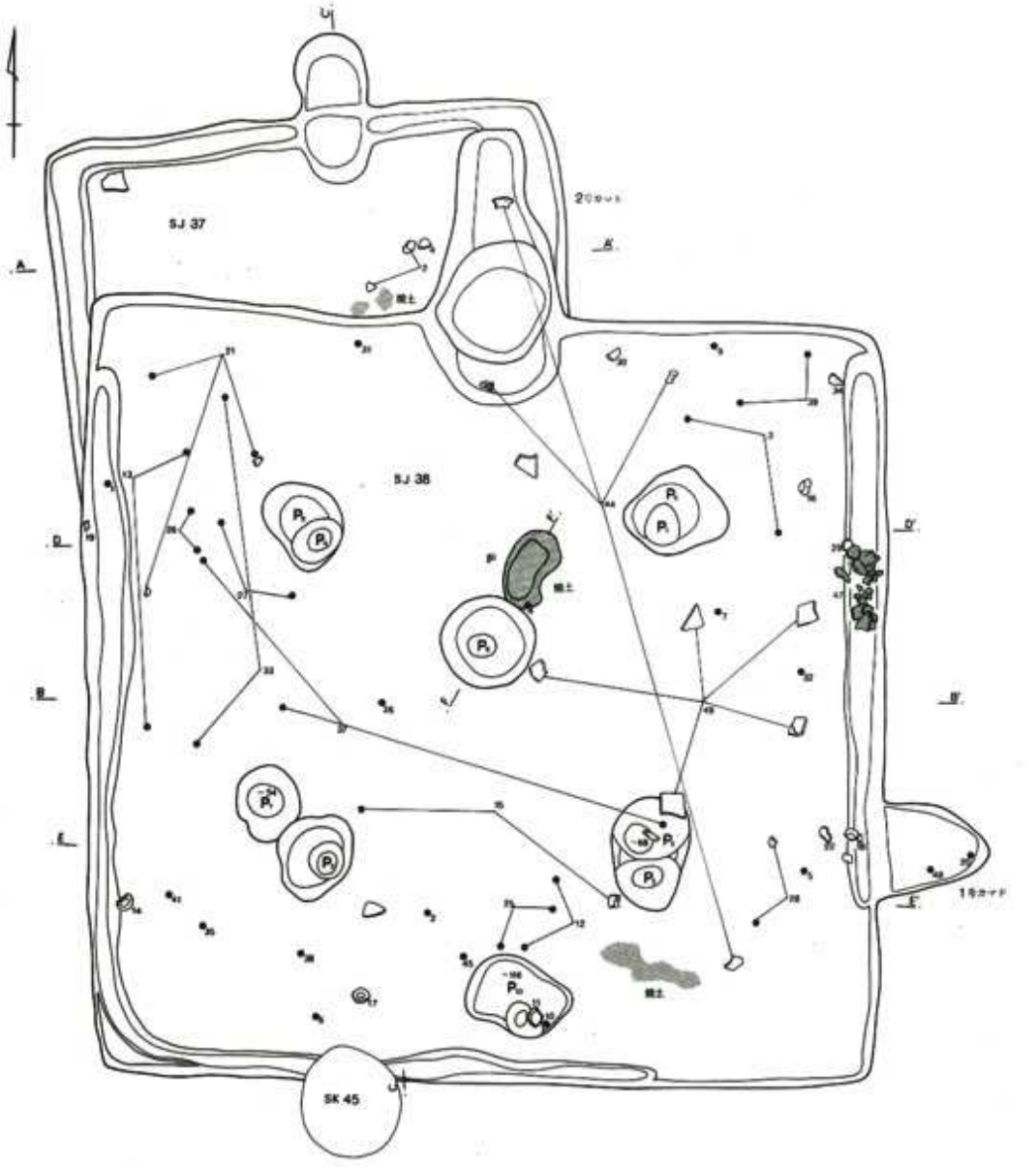
C区第36号住居跡出土遺物観察表(第394図)

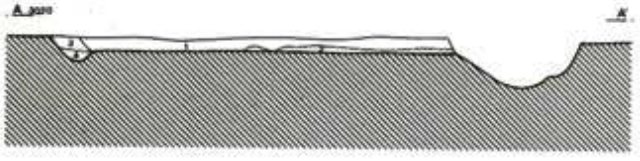
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	1.9		BE	B	橙	5%	カマド内　北武蔵系坏小片
2	小形甕	(16.0)	6.0		ABE	A	灰黄褐	20%	No.8　覆土(+7cm)
3	蓋	(20.0)	2.0		ABC	A	紫灰	10%	No.13　覆土(+13cm)
4	蓋		2.0		ABC	A	灰	30%	No.10　覆土(+6cm)　鈕径4.5cm
5	坏	(14.9)	4.0	(11.4)	ABC	C	灰白	20%	覆土　ケズリ径10.2cm
6	高台坏	(12.2)	3.4	(8.2)	ABC	B	灰	20%	No.7　覆土(+20cm)
7	坏	16.2	4.0	8.5	ABC	A	灰	80%	No.4,6　カマド
8	坏		2.0	10.9	ABC	A	灰	95%	No.17　貯穴内(-7cm)
9	甕		17.6		ABC	A	灰	15%	No.1,10　覆土(+6～20cm)

C区第37号住居跡(第395・396図)

E・F-22区に位置し、第38号住居跡に住居南半を大きく切られている。平面形態は方形を呈するものと推定され、規模は北辺4.06m、西辺残存長2.80m、深さ10cmを測る。主軸方位はN－7°－Wを示す。

床面は平坦である。覆土にはロームブロックが霜降り状に含まれ、人為的に埋め戻された可能性





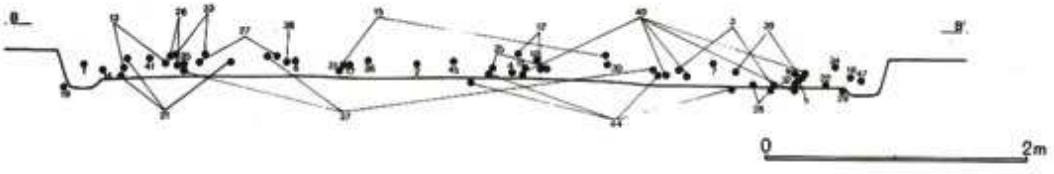
SJ37

1　黒褐色土　炭化物・焼土粒子・ローム粒子を霜降り状に混入する。

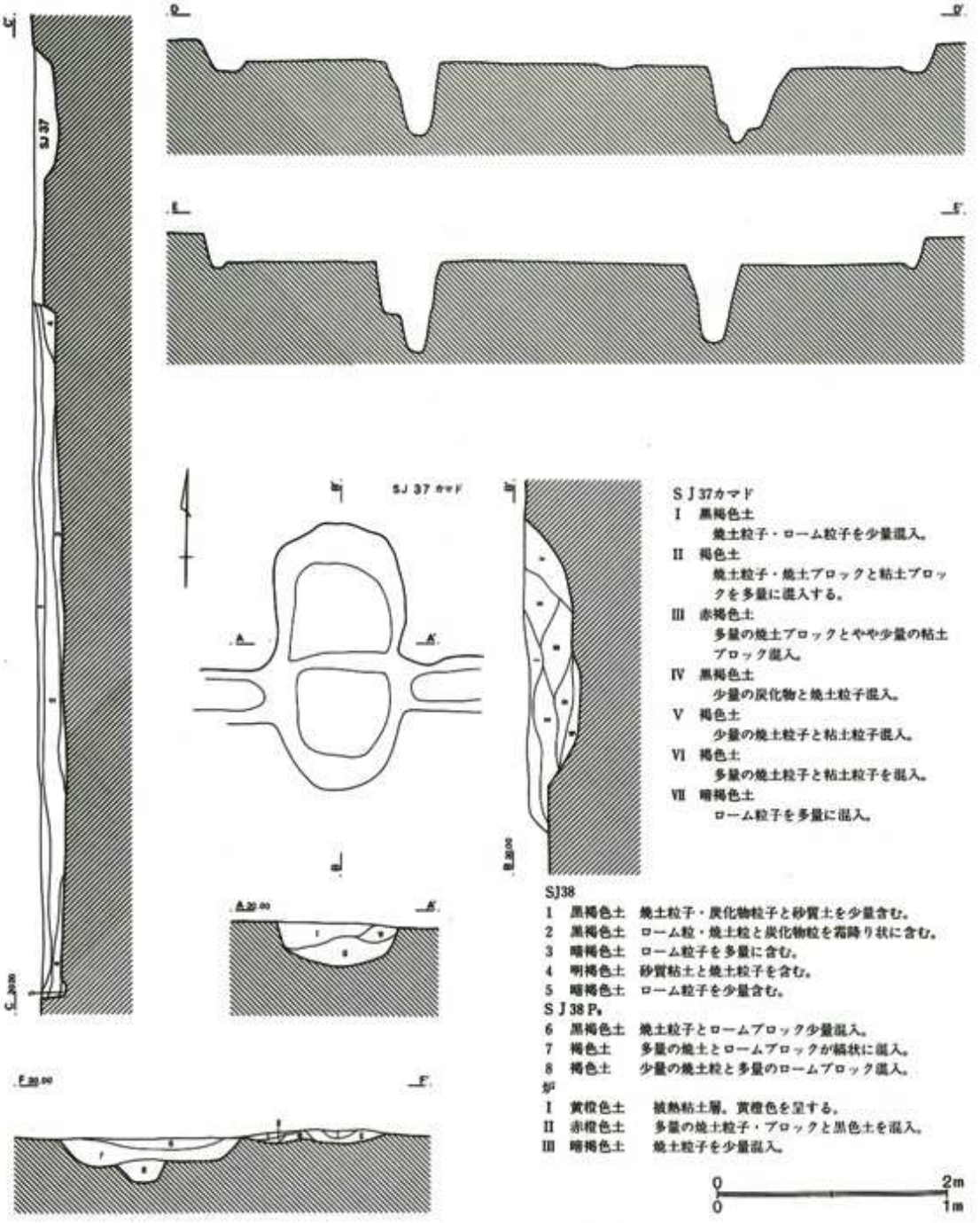
2　褐色土　ロームブロック多量混入。

3　暗褐色土　炭化物・ロームブロック多量混入。

4　黄褐色土　ローム粒子多量混入。



第395図　C区第37・38号住居跡(1)



第396図　C区第37・38号住居跡(2)・カマド

がある。

カマドは北壁に位置し、壁を60cm切り込んで構築されていた。焚口から先端までの長さは1.20m、幅58cm、床面下の深さは15cm程である。底面は2段に掘り込まれ、壁外が浅く、壁内が深い。覆土は7層に分かれる。第II・III・V・VI層が天井部崩落土、第IV層が灰層に相当しよう。第VII層は掘り方埋土と推定される。壁内の袖は全く痕跡を留めていなかった。

貯蔵穴、ピットは検出されなかった。壁溝は深さ５～10cm程でカマドを除き巡っていた。

出土遺物は土師器と須恵器があるが量的には少ない。土師器は甕が口縁部破片数で３点、須恵器は坏が８点、蓋１点、長頸瓶１点、高盤脚部１点がそれぞれ検出された。第397図２は器形の判明する須恵器坏で口径14.6cm、底部は平底で回転ヘラケズリ調整される。稲荷前Ⅶ期に比定される。

第397図　Ｃ区第37・38号住居跡出土遺物

Ｃ区第37号住居跡出土遺物観察表（第397図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.0)	3.0		ＡＢＣ	Ａ	灰	10%	覆土
2	坏	14.6	3.4		ＡＢＣ	Ｂ	灰白	45%	No.57　覆土(＋2～4cm)
3	長頸瓶	(10.0)	2.4		ＡＢＣ	Ａ	灰	10%	覆土
4	坏		0.8	(9.0)	ＡＢＣ	Ａ	オリーブ灰	25%	No.8　覆土(＋7cm)

Ｃ区第38号住居跡（第395・396・398図）

Ｅ・Ｆ-22・23区に位置し、第14号方形周溝墓と第37号住居跡を切って構築される。形態は方形を呈し、規模は長軸6.28ｍ、短軸6.16ｍ、深さ20cmを測る。主軸方位はＮ－２°－Ｅを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は５層に分かれ、第２層中にはローム粒や焼土粒が霜降り状に含まれていた。

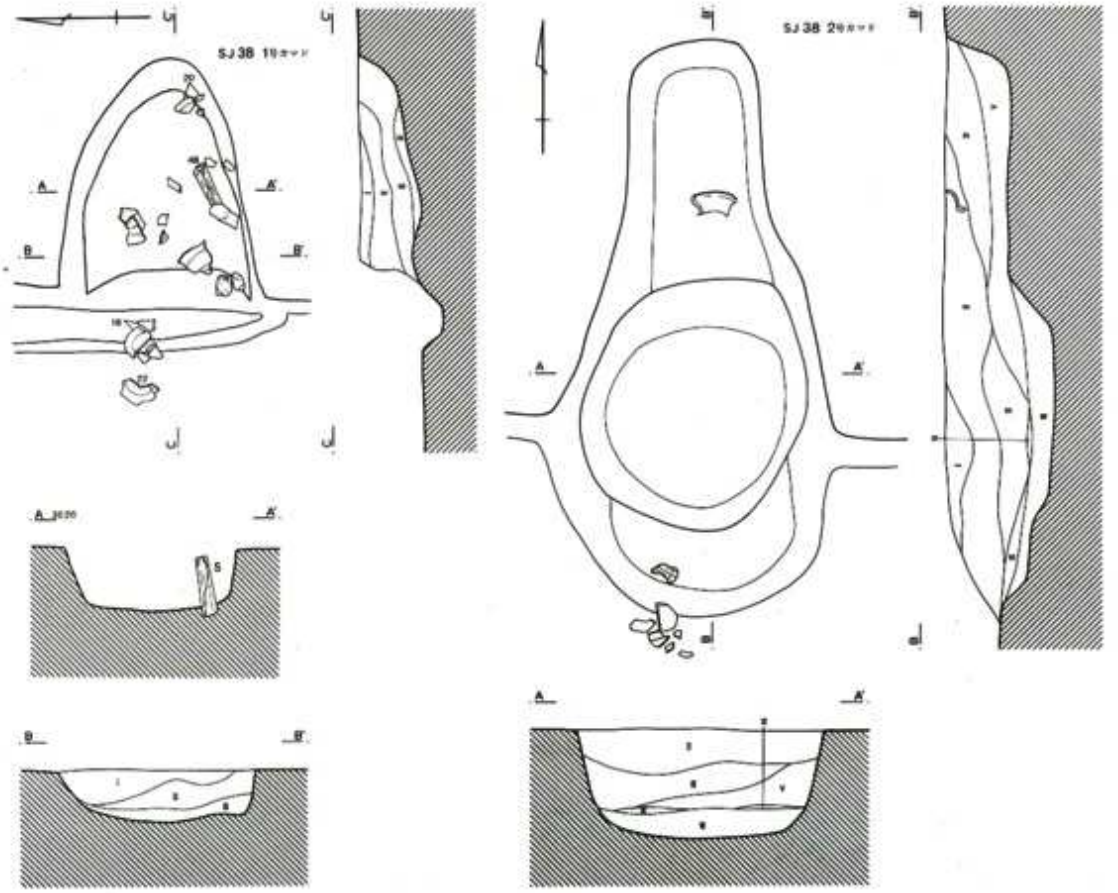
カマドは東壁と北壁に各１基検出された。第１号カマドは東壁に位置する。壁を90cm切り込んで構築され、最大幅78cmを測る。底面は平坦で壁内の掘り込みは検出されなかった。底面の中央から南に寄った位置には土製支脚がほぼ原位置を保った状態で残されており、燃焼部の主体は壁外にあったものと考えられる。壁内の袖は土層観察によっても検出されなかった。

第２号カマドは北壁に位置する。長大なカマドで壁を1.50ｍ切り込んで構築されていた。規模は全長2.20ｍ、最大幅1.10ｍ、燃焼部が最も深く床面から20cm程掘り込まれている。燃焼部は水平方向に90cm程延びている。覆土は７層に分かれ、第Ⅱ～Ⅴ層は天井部崩落土、第Ⅵ層は灰層に相当しようか。第Ⅶ層は掘り方と推定される。壁内の袖は明確には検出されなかった。おそらく流失したものと推定される。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは９本検出された。P_1～P_4、P_5～P_8はそれぞれ主柱穴と考えられ、それぞれカマドの付け替えに伴って建替えられた可能性がある。

P_9は土壙状のピットで住居中央部に位置し、北側に接する炉跡とセットをなすものと考えられる。小鍛冶跡の可能性も考えたが、鉄滓等の遺物が検出されておらず性格は不明とせざるを得ない。壁溝は深さ５cm程で部分的に巡る。

出土遺物は土師器と須恵器があり、量的には極めて多い（第399～401図）。土師器は坏が口縁部破片数で３点、甕48点、小形甕６点、壺２点、須恵器は坏類が口縁部破片数で297点、蓋71点、甕８点、瓶類２点、短頸壺３点、円面硯２点となり、須恵器供膳器の構成比が非常に高い。土師器坏は



SJ38 1号カマド
Ⅰ　黒褐色土　少量の焼土と砂質粘土混入する。
Ⅱ　褐色土　焼土ブロック・砂質粘土多量に混入する。
Ⅲ　褐色土　焼土粒子・焼土ブロックと粘土ブロックを多量混入。
Ⅳ　暗褐色土　焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子を混入。
SJ38 2号カマド
Ⅰ　暗褐色土　焼土粒子を少量混入する。
Ⅱ　褐色土　焼土粒子と黄灰色粘土ブロックを霜降り状に混入。
Ⅲ　褐色土　多量の焼土ブロックとやや少量の粘土ブロック混入。
Ⅳ　褐色土　多量の焼土ブロックと少量のローム粒子を混入。
Ⅴ　暗褐色土　多量の焼土ブロックと少量の焼土粒子を混入。
Ⅵ　黒褐色土　焼土粒子と炭化物粒子混入。
Ⅶ　明褐色土　灰白色粘土ブロック主体。焼土粒・ローム粒混入。

0　1m

第398図　C区第38号住居跡カマド

北武蔵型坏の細片が3点出土したに留まる。遺物は覆土上層から床面まで満遍なく出土しており、また距離的に離れた破片同士が接合する例が見られることから、住居廃絶後に流入または投棄されたものが多いことを示している。

須恵器坏は器形の判明する第399図11～26を対象として法量を見ると、口径12.6cm～14.5cm、器高3.4～4.2cm、底径6.6～9.5cmに分布する。この中では、大振りの25が主体となる分布域から大きく逸脱し、これを除くと平均口径13.1cm、平均器高3.77cmとなる。底部は平底化し、全面ヘラケズリ調整されるものと、周辺部ヘラケズリのものがあるほか、体部下端をヘラケズリするものが少数存在する。11の底部には墨書が残されている。墨痕は薄いが「荏」と思われる。高台坏には器形の判明するものがないが、底部は何れもヘラケズリ調整が施される(第400図36～38)。6は壺蓋、10は高台状鈕をもち佐波理模倣椀の蓋であろう。

42・43は円面硯。何れも脚部片で、前者は長方形透穴が穿たれ、後者は単に沈線が刻まれるのみで、貫通する部位と裏面まで達しない部位がある。

44は獣脚付短頸壺である。口縁部と獣脚は接合しないが胎土・色調から同一個体と見て間違いなかろう。口縁部は第2号カマド覆土から、獣脚は2本あり2号カマド前面の覆土から離れて出土した。復元図では3脚としたが4脚の可能性もある。49は須恵器大甕の胴部破片である。おそらく丸底甕となろう。

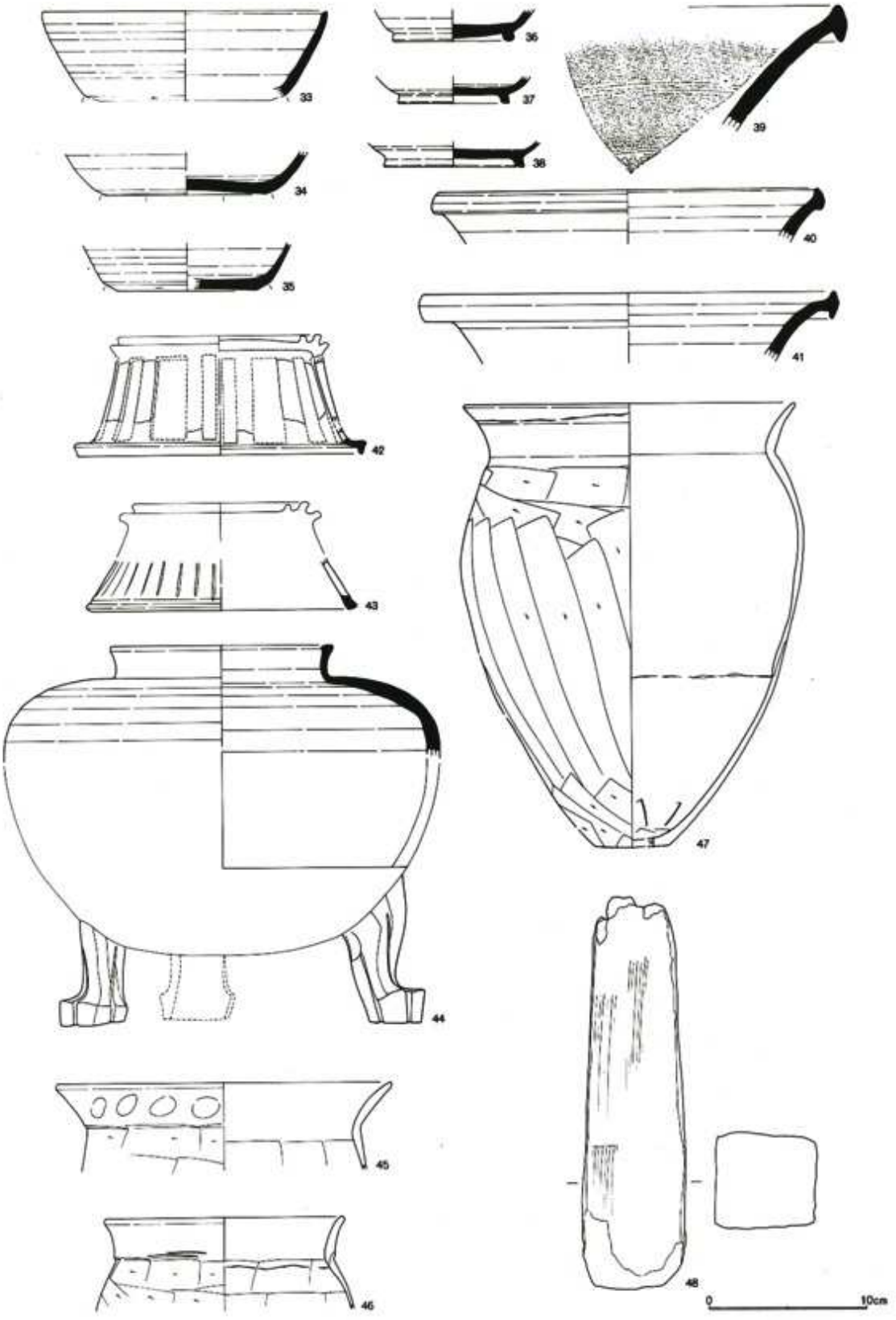
第400図47は土師器甕で、口縁部は短く外反し、最大径は胴部上位にある。

確実に住居に伴う遺物を抽出することが難しいため、全体的な土器様相、特に須恵器坏を中心にみると稲荷前Ⅷ期を主体とし、Ⅸ期に下がる土器を含むようである。25はⅦ期としても良いであろう。1号カマド内から出土した20は体部のロクロ目が目立ち、口径も縮小するなど土器様相としては新しい。遺構の様相と必ずしも合致しないが、覆土中位からの出土でありカマドに伴う遺物と見るのは無理があるのかもしれない。

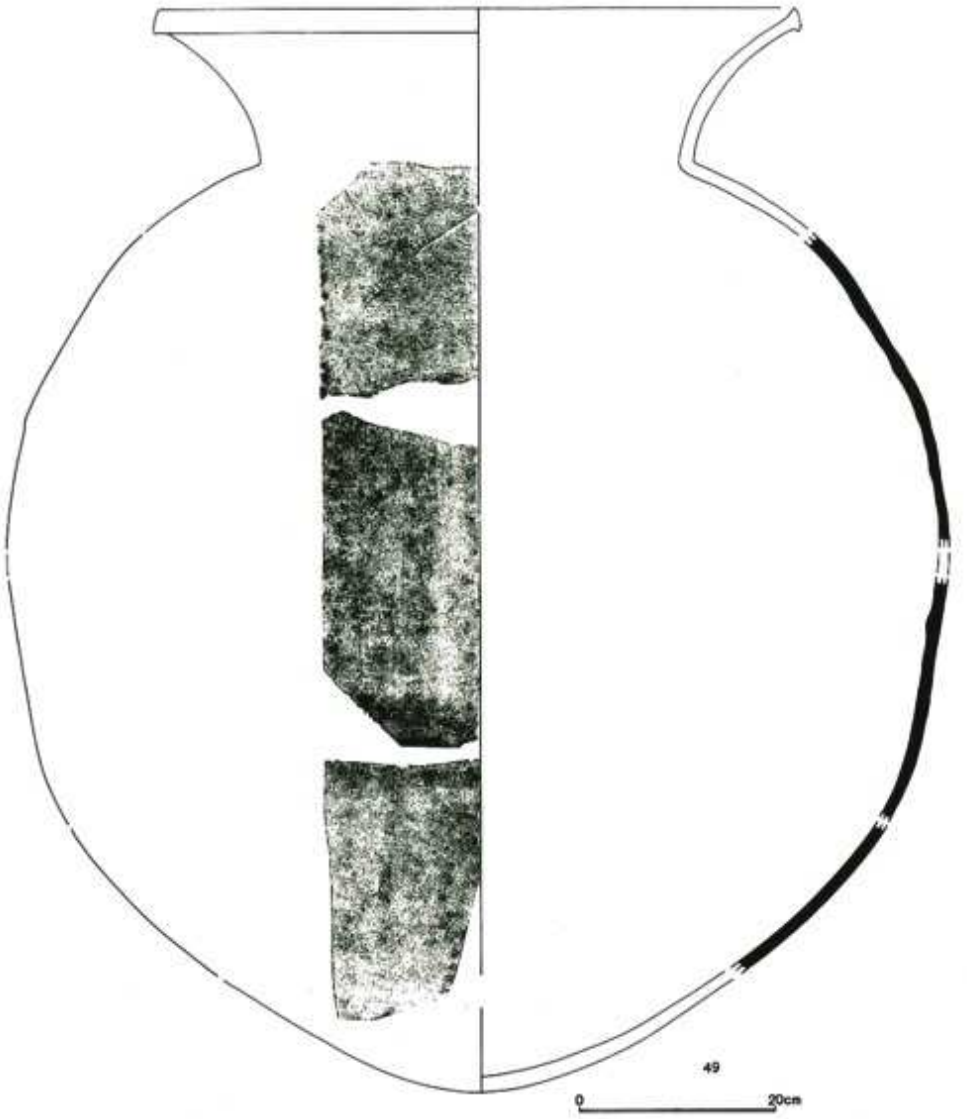
C区第38号住居跡出土遺物観察表(第399～401図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(13.2)	3.1		ABC	A	灰	75%	No.92 覆土(+9cm)
2	蓋	(15.9)	1.7		ABC	A	緑灰	35%	No.156 覆土(+16cm)
3	蓋	13.0	1.6		ABC	B	灰白	60%	No.11,234,他 覆土(+4～16cm)
4	蓋	19.4	2.6		ABC	A	にぶい赤褐	25%	No.45 覆土(+6cm)

第399図　C区第38号住居跡出土遺物(1)



第400図　C区第38号住居跡出土遺物(2)



第401図　C区第38号住居跡出土遺物(3)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
5	蓋	(20.0)	2.2		ABC	B	灰白	15%	№214　覆土(+10cm)
6	蓋	12.8	2.5		ABC	A	灰	10%	№146　覆土(+11cm)
7	蓋		2.3		ABC	A	青灰	20%	№19　覆土(+20cm)
8	蓋		2.2		ABC	A	にぶい橙	35%	覆土　鈕完存
9	蓋		2.1		ABC	B	灰	25%	№233　覆土(+13cm)
10	蓋		1.9		ABC	A	灰	35%	№176　覆土(+16cm)
11	坏	12.8	3.8	7.8	ABC	A	灰白	70%	№259　覆土(+9cm)
12	坏	(13.3)	3.9	7.4	ABC	B	灰白	50%	№162,181　覆土(+9～16cm)
13	坏	(13.5)	3.8	7.2	ABC	A	オリーブ灰	40%	№81,124　覆土(+9～10cm)
14	坏	13.0	4.2	7.1	ABC	A	灰白	80%	№262　覆土(+8cm)
15	坏	(13.3)	3.5	7.6	ABC	A	灰	60%	№70,258　覆土(+8～12cm)
16	坏	(12.7)	3.9	7.3	ABC	A	オリーブ灰	65%	№273　覆土(+12cm)
17	坏	12.9	3.5	8.2	ABC	A	灰黄	95%	№260　覆土(+11cm)

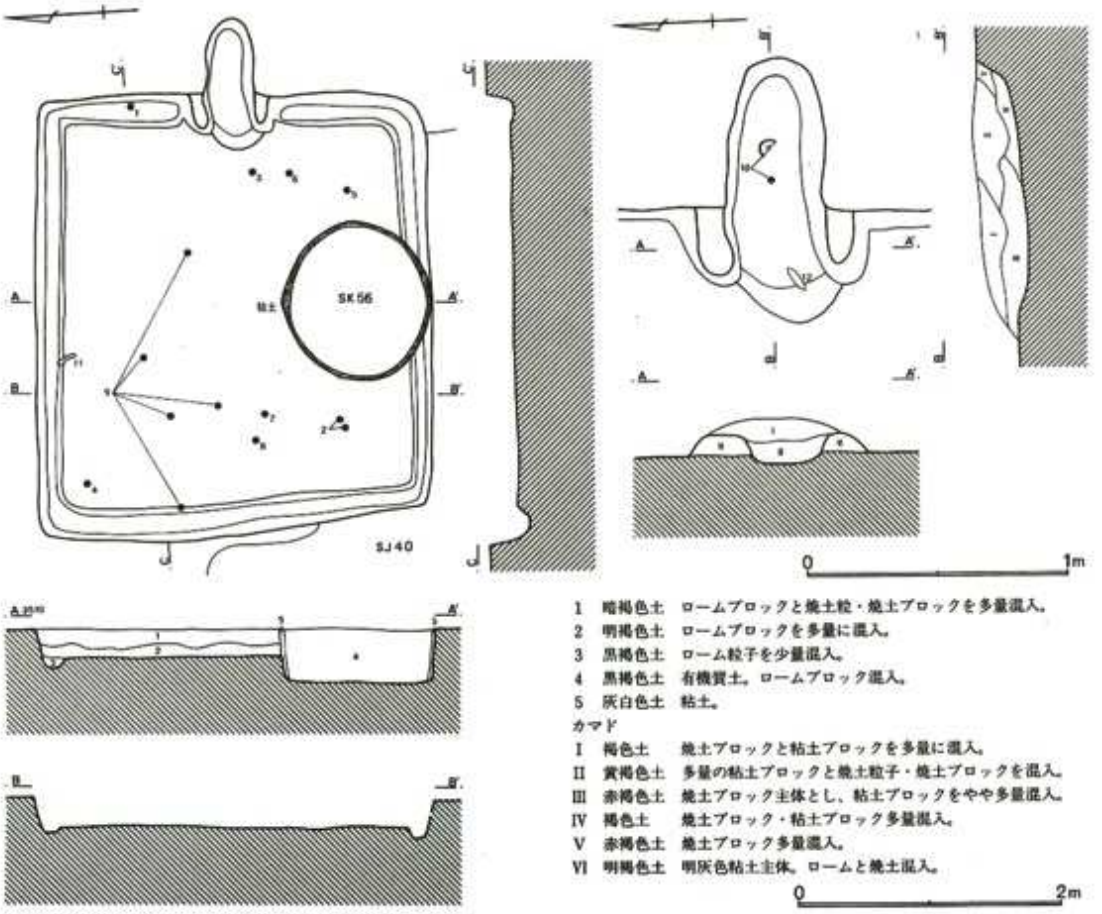
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
18	坏	13.6	3.8	8.2	ABC	A	灰	45%	№268　覆土(+7cm)
19	坏	13.0	3.8	7.3	ABC	A	灰白	80%	№248　周溝内(-10cm)
20	坏	(12.4)	3.7	(6.4)	ABC	B	灰	25%	1号カマド内№1
21	坏	(13.4)	4.0	7.6	ABC	B	灰	40%	№223,231他　覆土(0～+10cm)
22	坏	(13.6)	3.9	7.8	ABC	B	緑灰	40%	№266　床面
23	坏	(12.6)	3.7	(7.6)	AC	C	灰白	25%	2号カマド覆土
24	坏	13.6	3.6	(7.5)	ABC	A	灰白	25%	覆土
25	坏	(14.5)	3.4	(9.5)	ABC	A	灰	35%	№169,173　覆土(+9～10cm)
26	坏	(12.8)	3.4	(7.4)	ABC	B	灰白	25%	№91,95　覆土(+8～14cm)
27	坏	(14.0)	3.6		ABC	A	灰白	35%	№88,105　覆土(+12～14cm)
28	坏	(13.8)	3.8		ABC	B	灰白	30%	№190,265　覆土(+4cm)
29	坏		1.8	7.9	ABC	A	灰白	75%	№275　床面
30	坏		1.9	8.3	ABC	A	灰白	50%	№243　覆土(+9cm)
31	坏		1.0	7.8	ABC	A	灰白	90%	№9　覆土(+13cm)
32	坏		1.5	8.0	ABC	A	にぶい黄	90%	№219　覆土(+7cm)
33	椀	(18.0)	5.4		ABC	A	灰	20%	№74,118　覆土(+6～18cm)
34	椀		2.7	(10.0)	ABC	A	暗青灰	40%	№246　覆土(+20cm)
35	椀		3.0	8.8	ABC	A	灰	70%	№139　覆土(+13cm)
36	高台坏		2.0	7.3	ABC	A	灰	70%	№59　覆土(+11cm)
37	高台坏		1.7	6.8	ABC	A	灰	70%	№60,69,111　覆土(+6～16cm)
38	高台坏		1.6	(8.7)	ABC	A	灰	20%	№136　覆土(+15cm)
39	甕				ABC	A	灰		№2,3　覆土(+4～9cm)
40	甕	(24.0)	3.4		ABC	A	灰白	10%	覆土
41	甕	(26.0)	4.4		ABC	A	灰	5%	№129　覆土(+18cm)
42	円面硯		(6.1)	(18.0)	ABC	A	灰	15%	覆土+2号カマド覆土
43	円面硯		3.2	(16.2)	ABC	B	灰	15%	覆土+2号カマド内
44	短頸壺	(14.0)	(23.8)		ABC	A	暗灰	40%	№241,242　2号カマド内№1,2
45	甕	(21.0)	5.5		ABEJ	A	にぶい橙	20%	№178　覆土(+16cm)
46	小形甕	(15.0)	5.8		ABEJ	A	にぶい橙	30%	覆土
47	甕	20.8	28.0	(4.6)	ABEJ	B	浅黄橙	80%	№274　覆土(+17cm)
48	支脚				ABC	A	橙		カマド1内№3　残長24.7cm
49	甕				ABC	A	暗灰	30%	№254,255,他　覆土(+1～15cm)

C区第39号住居跡(第402図)

G・H-22・23区に位置し、第40号住居跡を切って構築されていた。南壁付近には中世の56号土壙が掘り込まれ床面は攪乱されていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.40m、短軸3.02m、深さ20cmを測る。主軸方位はS－88°－Eを示す。

床面は平坦である。住居覆土は基本的に2層に分かれる。第1・2層にはロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高いものと考えられる。

カマドは東壁に位置し、壁を約60cm切り込んで構築される。焚口から先端までの長さは1.03m、燃焼部幅は38cmを測る。底面はほぼフラットで先端は急角度で立ち上がる。覆土は6層に分かれ、第Ⅰ～Ⅴ層は基本的に天井部崩落土と考えて良いものと思われる。袖は明灰色粘土を用いて構築されているが、基底部が遺存していたのみで大半は流失していた(第Ⅵ層)。



第402図　C区第39号住居跡・カマド

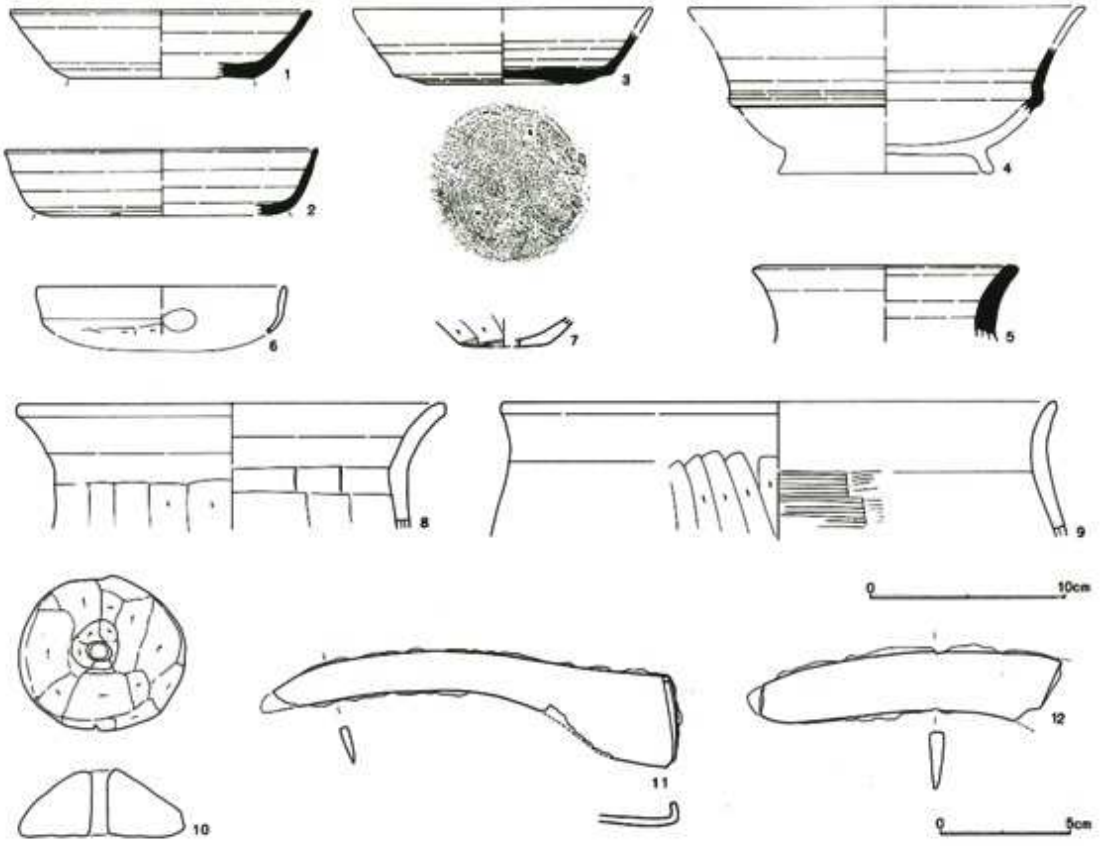
貯蔵穴は検出されなかった。ピットは南壁際から3本検出されたが、重複する第40号住居跡に伴う可能性が高いため、除外した。

壁溝は深さ5～10cm程でカマドを除き全周する。

出土遺物は土師器と須恵器、紡錘車と鉄器がある。土師器は坏が2点、甕12点、小形甕1点、壺2点、須恵器は坏が10点、蓋1点、壺1点のほか、椀、甕、瓶類の胴部片が出土した。土師器坏は北武蔵型坏(第403図6)と比企型坏があるが、後者は7世紀前半代の混入と思われる。

第403図1～3は大振りの須恵器坏。各々タイプが異なり、1は平底を呈する坏で、器肉は厚くしっかりした作りである。周溝内から出土した。2は底部から体部にかけて丸みをもって移行するもの。3は体部下端に明確な腰をもつもので、底部切り離しが深かったためか回転糸切り後の再調整は省略されている。4は佐波理模倣椀で、体部の凸帯は高い。5は壺か。

土師器甕には良好な資料が乏しい。8は胴部が縦削りされ様相としては古く、床面出土ではあるが伴わないかもしれない。9は壺であろうか。10は土製紡錘車でカマド内から2片に割れて出土した。直径6.4cm、厚さ2.6cm、重量70gで、胎土に白色針状物質を多量に含む。11･12は鉄製鎌。11は北壁際の床面から約10cm浮いた位置から出土した。切先を僅かに欠き、残長15.6cm、最大幅3.4cmを測る。刃部はかなり研ぎ減りし幅薄になる。基部は折り返す。12はカマド焚口部の覆土上層から出



第403図　C区第39号住居跡出土遺物

土した。残長11.6cm、最大幅2.6cm、切先と柄部を欠失する。須恵器坏の様相から見ると稲荷前VI期～VII期と推定される。

C区第39号住居跡出土遺物観察表(第403図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.2)	3.5	(9.4)	ABC	A	灰白	20%	No.256　周溝内(-12cm)
2	坏	(15.8)	3.4	(11.2)	ABC	A	灰	15%	No.118,119　覆土(+2～5cm)
3	坏		2.6	7.8	ABC	A	灰	80%	No.147　覆土(+9cm)
4	椀		2.8		ABC	A	灰	5%	No.208　覆土(+19cm)
5	小形壺	(12.6)	3.9		ABC	A	暗灰	20%	No.255　覆土(+9cm)
6	坏	(12.6)	2.4		ABE	B	橙	10%	No.251　覆土(+11cm)　北武蔵系
7	甕		1.4	(4.7)	ABE	A	灰褐	20%	No.251　床面
8	甕	(21.6)	6.4		ABE	A	にぶい橙	15%	No.228　床面
9	壺	(28.0)	7.9		ABE	A	浅黄橙	15%	No.30,54,他　覆土(+8～15cm)
10	紡錘車				ABC	A	にぶい橙		No.240,243　カマド内　土製
11	鎌								No.245　覆土(+11cm)　残長15.6cm
12	鎌								No.244　カマド内　残長11.6cm

C区第40号住居跡(第404図)

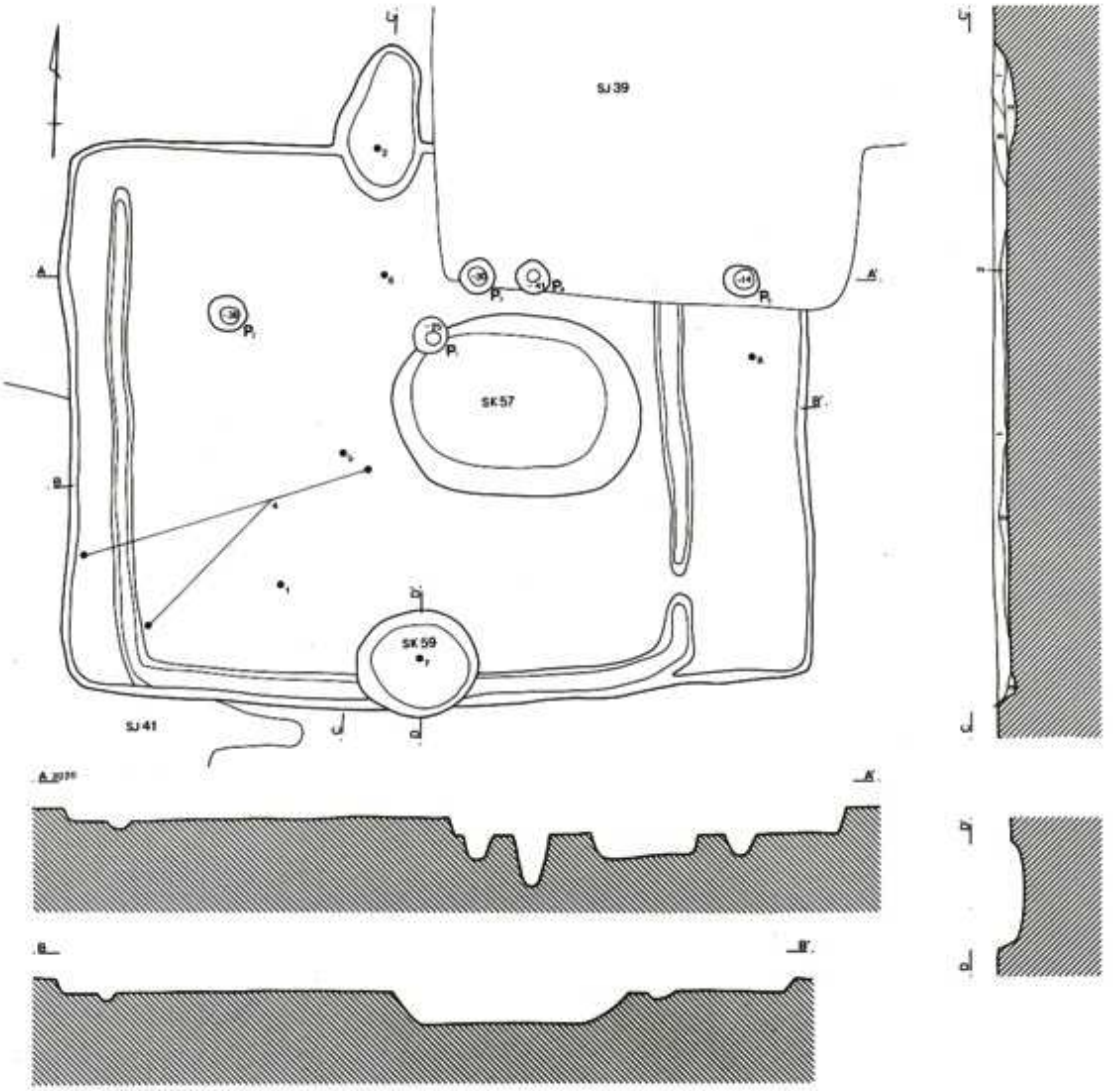
H-22区に位置する。第41号住居跡を切り、第39号住居跡に住居北東部を切られていた。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸5.76m、短軸4.30m、深さ10cmを測る。主軸方位はN－5°－Wを示

す。

床面は概ね平坦である。覆土は3層に分かれる。全体にロームの混入が多いが、層厚が薄いため堆積状態の詳細は明確にはできない。

カマドは北壁に位置し、壁を70cm切り込んで構築される。焚口から先端までの長さは1.20m、燃焼部幅は68cmで、底面は床面から10cm程皿状に掘り込まれていた。覆土は3層に分かれ、何れも天井部崩落土と推定される。壁内の袖は明確に検出できなかった。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは5本検出された。可能性としてはP_2・P_4が拡張前の住居跡の柱穴、P_5が拡張後の住居跡主柱穴の一部を構成するかもしれない。



第404図　C区第40号住居跡

壁溝は壁内に入れ子状に巡り、上面に床面が貼られていたことから拡張されたものと考えられる。また、床面中央部と南壁部に土壙が2基検出された(ＳＫ57･59)が、何れも住居よりも新しいものと推定された。

出土遺物は土師器と須恵器、鉄器がある。土師器は坏が口縁部破片数で6点、甕8点、台付甕3点(脚部)、壺6点、須恵器は坏が13点、蓋3点、甕1点、瓶1点が検出された。土師器坏は何れも細片で図化できないが、模倣坏系の比企型坏が3点、北武蔵型坏が3点ある。

第405図1・2は須恵器蓋。1は環状鈕をもち器肉が厚くしっかりした作りである。鈕径は5.1cm。ＳＫ57出土。2はいわゆる特殊かえり蓋で、器肉は厚い。内面に自然釉が厚く付着する。3～5は須恵器坏。3は口径が小さく薄手である。底部を欠くが体部下端に明確な腰をもつ。4は口径16cmを超える大振りの坏。体部は長く外反し、底部は丸底風で回転篦削りされる。5は大振りの坏底部で、回転糸切り離し後のヘラケズリは省略されている。本来の形状に復元すれば、体部下端に腰をもつ弱い丸底の坏となろう。

土師器甕には良好な資料が無い。6は武蔵型甕の系譜に連なるものと思われるが、胴部器壁はまだ厚い。胴部調整は良くわからないが縦または斜め方向に篦削りされる模様である。8は鉄釘と思われる。断面方形で残長は5.4cm。床面から出土した。

4の坏は山下6号窯(Ｙ6)段階と見て良い。3はあまり例を見ない。4と5の坏を基準にすると8世紀初頭から前半代、稲荷前Ⅴ期～Ⅵ期に比定される。2の特殊かえり蓋は該期に属する可能性もある。

第405図　Ｃ区第40号住居跡出土遺物

Ｃ区第40号住居跡出土遺物観察表(第405図)

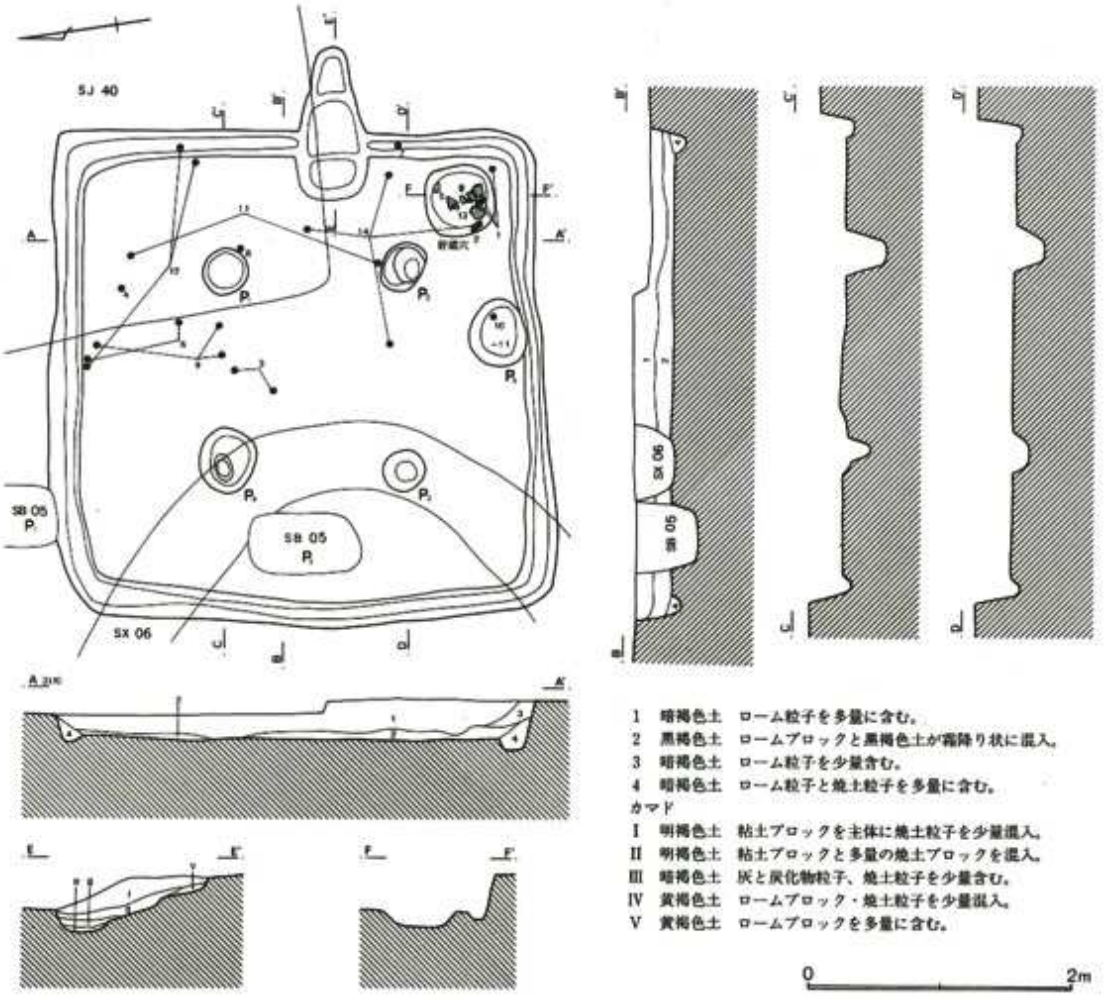
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋		2.1		ＡＢＣ	Ｃ	灰	40%	No.275　覆土(+7cm)　鈕径5.1cm
2	蓋	(17.9)	1.4		ＡＢＣ	Ａ	灰	10%	No.170　カマド内
3	坏	(13.0)	2.9		ＡＢＣ	Ａ	灰	10%	覆土
4	坏	(16.1)	4.5	(10.8)	ＡＢ	Ｂ	灰白	30%	No.6,59　覆土(0～+13cm)　SJ50No.265
5	坏		2.0	7.6	ＡＢＣ	Ｂ	灰白	35%	No.283　床面
6	甕	(21.8)	5.2		ＡＢＪ	Ｂ	にぶい橙	10%	No.182　覆土(+4cm)
7	壺		7.5	12.8	ＡＢＣ	Ａ	灰	10%	No.136　SK59内(-5cm)
8	釘								No.229　床面　残長5.4cm

C区第41号住居跡(第406図)

H-22区に位置する。住居北東部の覆土上層は第40号住居跡に切られていた。また、第5号掘立柱建物跡と円形周溝状遺構(SX06)の攪乱を受け遺存状態はあまり良くない。形態は方形を呈し、規模は長軸3.80m、短軸3.74m、深さ30cmを測る。主軸方位はS－83°－Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は4層に分かれる。下層(第2層)にはロームと黒褐色土ブロックが霜降り状に混じり、人為的な埋め戻しと思われるような堆積が認められた。

カマドは東壁に位置し、壁を約60cm切り込んで構築される。規模は全長1.18m、燃焼部幅54cmを測り、焚口部底面は20cm程掘り込まれていた。壁外の部分は斜め上方に延び煙道部と思われる部分で弱い段差がつく。燃焼部側壁は火熱を受け焼土化していた。覆土は5層に分かれ、第I・II層は天



第406図　C区第41号住居跡

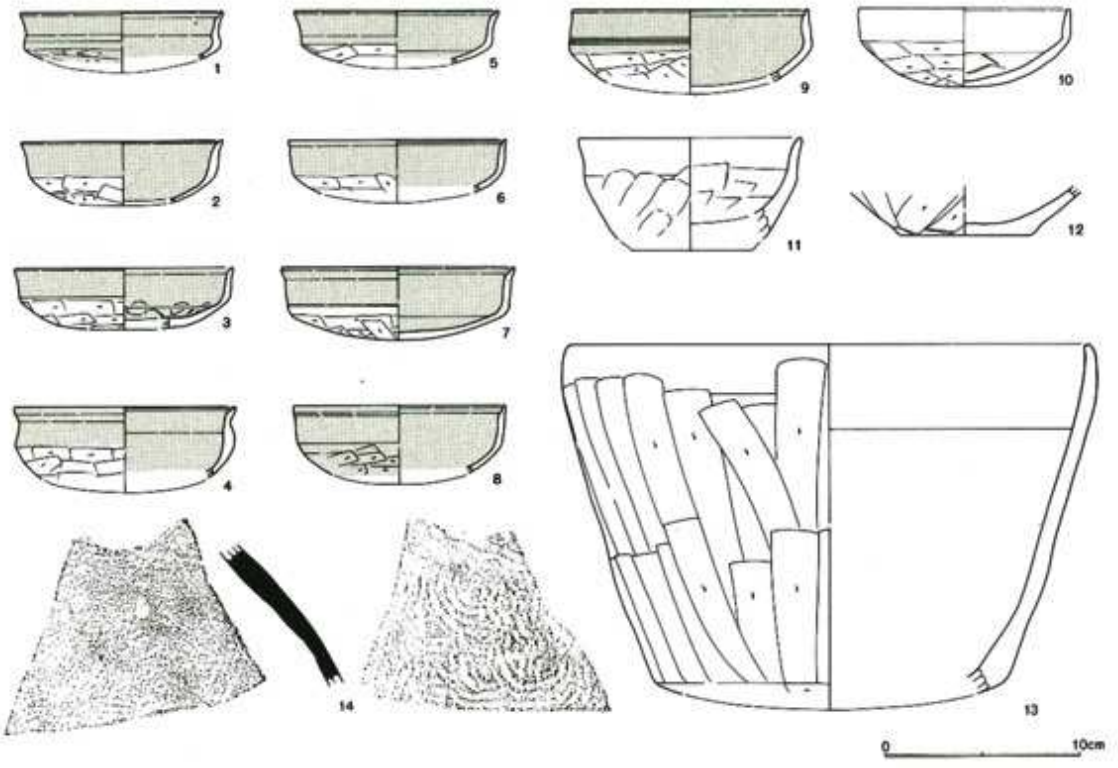
井部崩落土、第Ⅲ層は灰層、第Ⅳ層は掘り方と推定される。袖は明瞭には検出されなかった。

貯蔵穴と思われる掘り込みはカマド脇の南東コーナーから検出された。直径50cmの円形プランを呈し深さは10cmと浅い。土師器鉢(第407図13)が細片になって落ち込んだ状態で出土した。

ピットは5本検出され、P_1～P_4は主柱穴と思われる。壁溝は深さ5～10cm程で、カマドを除き全周する。

出土遺物は土師器と須恵器がある。土師器は坏が口縁部破片数で12点、椀2点、甕8点、壺2点、鉢1点、須恵器は坏が1点と甕胴部片と横瓶胴部片が検出された。須恵器の大半は8世紀代の混入と思われる。

土師器坏は比企型坏系統のもの(第407図1～9)と、それ以外のもの(10)がある。口径は10cm～11cm前後の小振りのものが主体で、9が12cmと最大である。比企型坏は赤彩と口縁部沈線手法は共通するが、本来の形態から外れるものも見られる。8は口縁部と体部の区別が不明瞭で丸椀風になっている。10は胎土が比企型坏とも或いは北武蔵型坏とも異なり、系統及び産地は不明である。11は口縁部ヨコナデと内面のヘラナデは施されているが、体部外面は雑なナデ調整で終わっている。胎土に白色針状物質が多量に含まれ在地産であることは疑いないが、通例と異なる。最終調整であるヘラケズリを省略したまま焼成された可能性があろう。13は鉢か。極めて雑な作りで口縁部は波を打っている。貯蔵穴内とその周辺の床面から小片に割れた状態で出土。14は須恵器甕の胴部片。黄褐色を呈し、焼成は甘い。内面同心円状の当て具痕、外面は平行叩き後カキ目が施されている。土師器坏の様相から、稲荷前Ⅲ期～Ⅳ期に比定されよう。



第407図　C区第41号住居跡出土遺物

C区第41号住居跡出土遺物観察表(第407図)

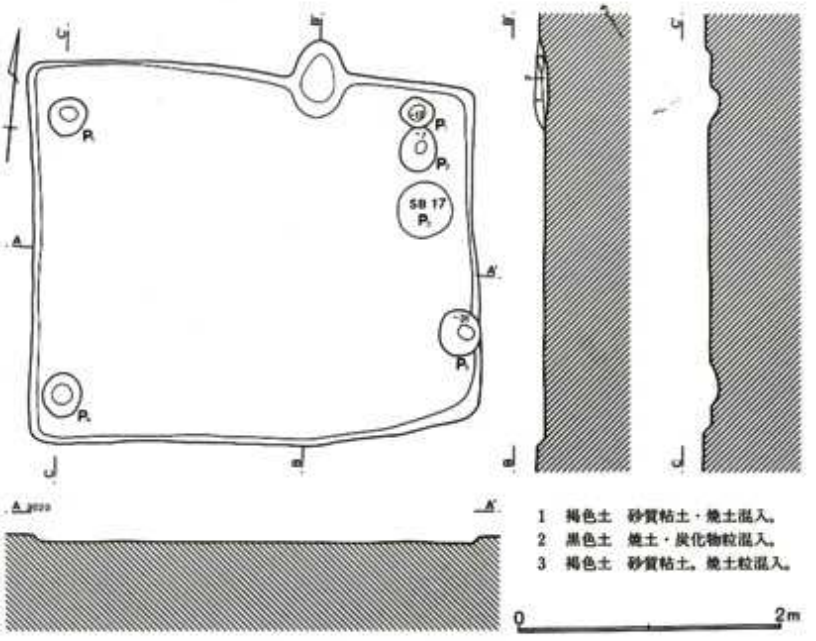
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.2)	2.5		ABC	A	橙	25%	№23,47,48 覆土(+6~11cm) 赤彩
2	坏	(10.2)	3.2		AB	B	橙	25%	№22 覆土(+21cm) 赤彩
3	坏	(11.0)	3.1		ABC	A	にぶい橙	40%	№237,238 床面 赤彩
4	坏	(11.2)	3.6		ABC	A	にぶい橙	25%	№86,SJ50№4 覆土(+6cm) 赤彩
5	坏	10.4	2.7		ABC	A	にぶい橙	45%	№267 床面 赤彩
6	坏	(11.0)	2.7		ABC	A	にぶい橙	20%	№81,118 覆土(+3~17cm) 赤彩
7	坏	(11.8)	3.7		ABC	A	にぶい橙	30%	№246 覆土(+8cm) 赤彩
8	坏	(10.8)	3.5		AB	B	橙	15%	№124 覆土(+18cm) 赤彩
9	坏	(12.0)	3.7		ABC	A	橙	25%	№28,31,194 覆土(0~+14cm) 赤彩
10	坏	10.8	4.0		ABJ	A	橙	100%	№257 床面
11	椀	(11.2)	5.2		ABC	A	にぶい黄橙	25%	№202,223 覆土(+4~15cm)
12	壺		2.5	6.6	ABC	A	にぶい橙	80%	№25,81,159 覆土(+2~17cm)
13	鉢	(26.4)	17.8	17.8	ABCJ	B	灰黄褐	50%	№230,244,他 貯穴内(0~-5cm)
14	大甕				AB	D	にぶい黄橙		№16,171,他 覆土(+4~18cm)

C区第42号住居跡(第408図)

H・I-22区に位置し、第17号掘立柱建物跡に床面の一部を切られていた。形態はやや歪んだ長方形を呈し、規模は長軸3.42m、短軸2.90m、深さは5cmに満たず極めて浅い。主軸方位はN－5°－Wを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は殆ど残されておらず、堆積状況等の詳細は不明である。

カマドは北壁から検出された。上面が削平されているために遺存状態は極めて悪い。覆土は3層に分かれ、おそらく第2層が灰層に相当するものと推定される。袖の有無も不明である。



第408図 C区第42号住居跡

ピットは5本検出されたが、柱穴配置及び覆土の状態からみて、住居に伴う可能性は低いものと考えられる。

貯蔵穴、壁溝は存在しない。

遺物は全く検出されなかったため、時期も明らかにできない。

C区第43号住居跡(第409図)

Ⅰ-22区に位置し、第44号住居跡と第12号溝跡に切られていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.48m、短軸3.02m、深さは5cm程と極めて浅い。主軸方位はN－2°－Eを示す。

床面は概ね平坦であるが、住居北東部が僅かに深くなっていた。覆土はローム粒子と焼土粒子混じりの暗褐色土が覆っていた(第1層)。

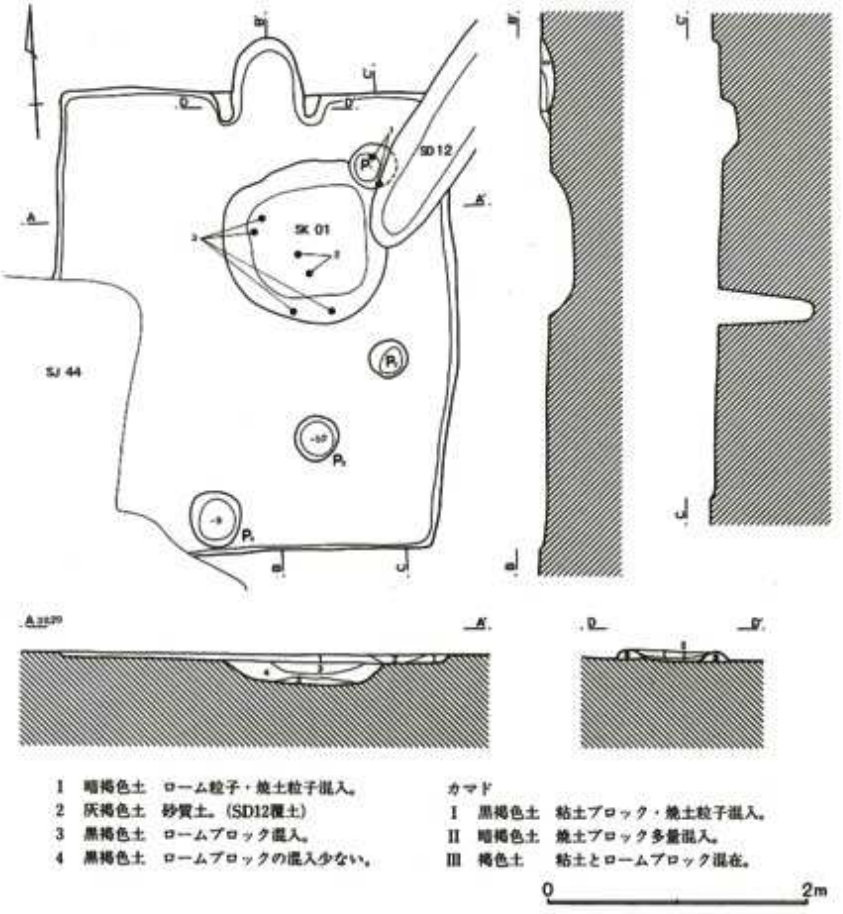
カマドは北壁に位置し、壁を40cm切り込んで構築される。幅は56cm。底面はフラットで床面下の掘り込みは認められなかった。覆土は4層に分かれる。第Ⅰ～Ⅲ層は天井部崩落土と考えられる。袖は褐色粘土を主体に構築されたと思われ、基底部が僅かに遺存していた。

ピットは4本検出された。P_1は内部から遺物(第410図1)が出土しており、小規模ではあるが或いは貯蔵穴となろうか。他のピットは配置に規則性がなく、住居に伴う柱穴にはならないものと推定される。

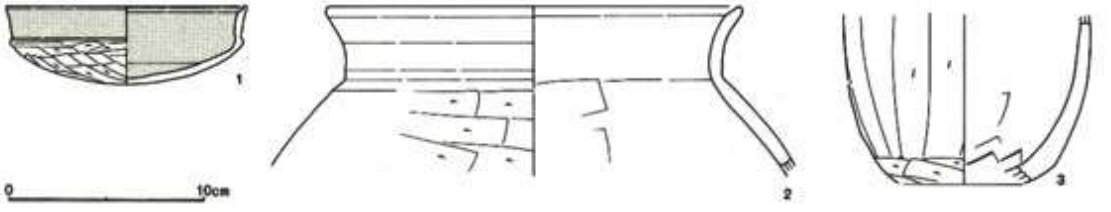
また、住居中央部に土壙が1基検出された(SK01)。形態は円形で、規模は直径1.26m、深さ20cmを測る。断面観察及び埋土の状態から住居に伴う床下土壙と考えられる。

出土遺物は土師器のみで量的には少ない。出土数を示すと、坏が1点、甕が2点、壺が1点(口縁部破片数)となる。

第410図1は模倣坏系の比企型坏である。



第409図 C区第43号住居跡



第410図 C区第43号住居跡出土遺物

口径は12.2cmで比較的腰高の器形を呈する。2は壺、3は長胴甕の胴部片である。遺物量が少なく時期決定は難しいが7世紀前半代の様相と思われる。稲荷前II期～III期の時期幅の中には納まるであろう。

C区第43号住居跡出土遺物観察表(第410図)

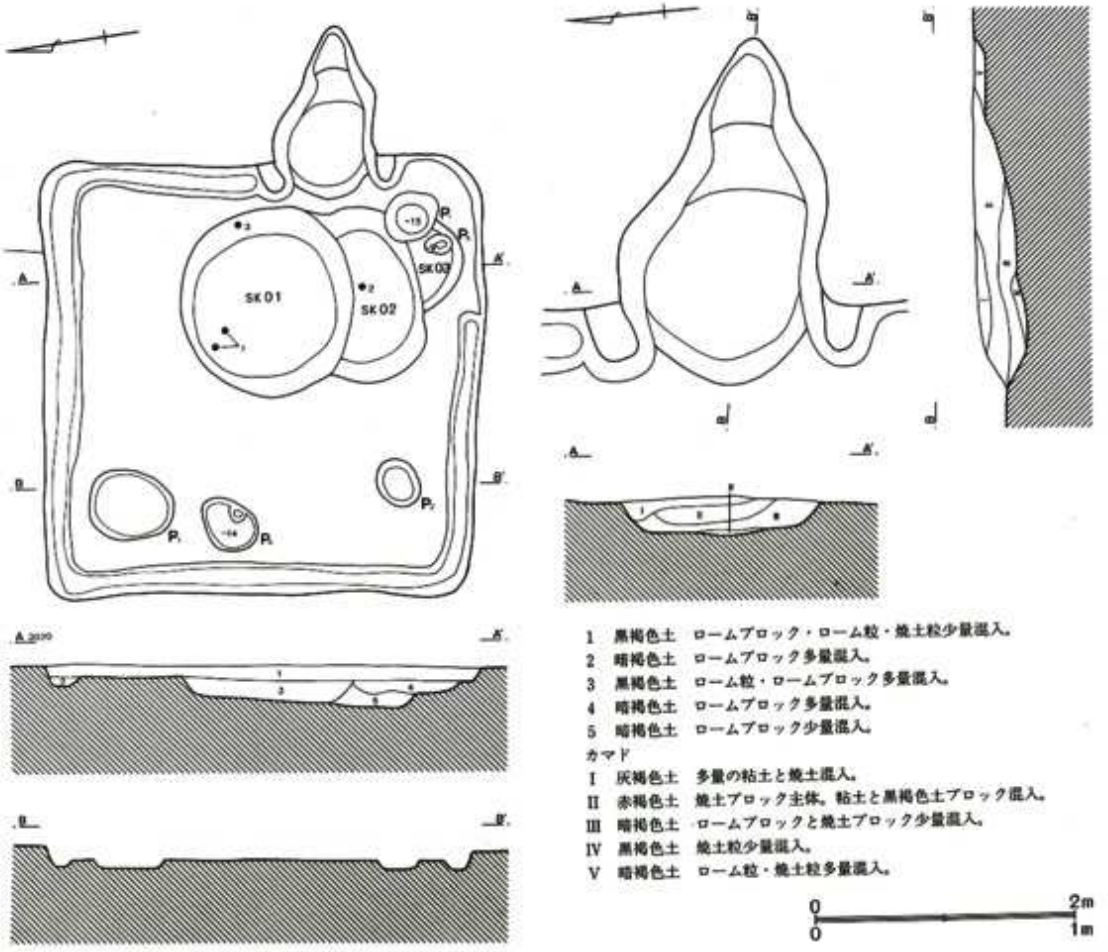
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.2	4.0		ABC	A	にぶい橙	50%	No.24,26 ピット1内(-4～7cm) 赤彩
2	壺	(21.0)	8.6		ABCJ	A	明赤褐	10%	No.14,21 覆土(+2～5cm)
3	甕		8.5		ABC	A	にぶい橙	70%	No.6,13,他 覆土(+2～5cm)

C区第44号住居跡(第411図)

I-22区に位置し、第43号住居跡を切って構築される。形態は方形を呈し、規模は長軸3.38m、短軸3.36m、深さ5～10cmを測る。主軸方位はS－81°－Eを示す。

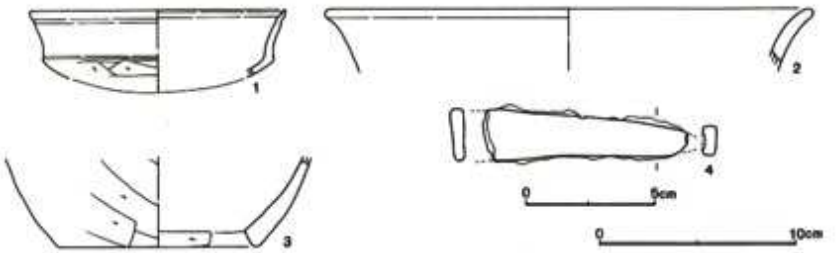
床面は平坦である。覆土はロームと焼土混じりの黒褐色土単層で土層変化は認められなかった。

カマドは東壁に位置する。壁を大きく切り込んで構築され、規模は全長1.30m、燃焼部幅76cmを測り、焚口部底面は床面から10cm程掘り凹められていた。燃焼部の大半は壁外にあるものと考えら



第411図 C区第44号住居跡・カマド

れる。底面は緩やかに立ち上がり、煙道部は水平方向に30cm程延びていた。覆土は5層に分かれ、第Ⅰ～Ⅲ層・Ⅴ層は天井部崩落土に相当しよう。第Ⅳ層は灰層となるかもしれない。袖は灰褐色粘土を用いて構築されているが、遺存状態は悪く基底部が辛うじて残存していたのみである。



第412図　C区第44号住居跡出土遺物

ピットは5本検出されたが、主柱穴に相当するものは認められなかった。また、カマド前面の床面から土壙が3基重複したような状態で検出された。埋土は何れもロームブロックと黒色土の混土層で構成され、床下土壙または掘り方と推定される。

壁溝は深さ5～10cmでカマドの位置する北東コーナー付近を除いて巡っていた。

出土遺物は土師器と須恵器、鉄器があるが、出土量は少ない。土師器は坏が口縁部破片数で2点、甕3点、甑1点(底部)、須恵器は坏が1点あるほか、坏底部3点、蓋と甕、瓶の破片が検出された。第412図1は模倣坏系の比企型坏であるが、赤彩痕は残らない。推定口径13cmと比較的大きく7世紀初頭前後に位置付けられるものであろう。2の甕と3の甑は小片のため時期を明らかにすることはできないが、坏と年代的に大きく懸け離れることはないものと思われる。一方、須恵器は図示できる資料はないが、大振りとなるであろう坏の口縁部と、平底化した回転ヘラケズリ調整される坏底部片が含まれおそらく8世紀前半～中葉頃のものと推定される。土師器の様相と須恵器のそれが大きく隔たり、時期決定は困難であるが、第43号住居跡との切り合い関係やカマドの構造、主軸方位を考慮すると須恵器の方が住居年代を示しているかもしれない。

C区第44号住居跡出土遺物観察表(第412図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.0)	3.4		AB	A	にぶい橙	25%	SK01内No.4,5　覆土(+5cm)　無彩
2	甕	(24.4)	3.2		ABC	A	にぶい黄橙	25%	No.18　覆土(+4cm)
3	甑		4.6		ABC	A	にぶい褐	10%	No.20　床面　孔径(10.0cm)
4	刀子柄								覆土　残長7.9cm　最大幅2.0cm

C区第45号住居跡(第413図)

Ⅰ・J-22区に位置する。形態は方形を呈するが、カマドの左右で壁ラインが僅かにずれていた。規模は長軸3.46m、短軸3.30m、深さ約20cmを測る。主軸方位はN－89°－Eを示す。

床面は概ね平坦で、中央部がやや深い傾向にある。住居覆土は上下2層に分かれる。両層ともにロームを多量に含む黒褐色土で構成され、大きな土層変化は認められない。

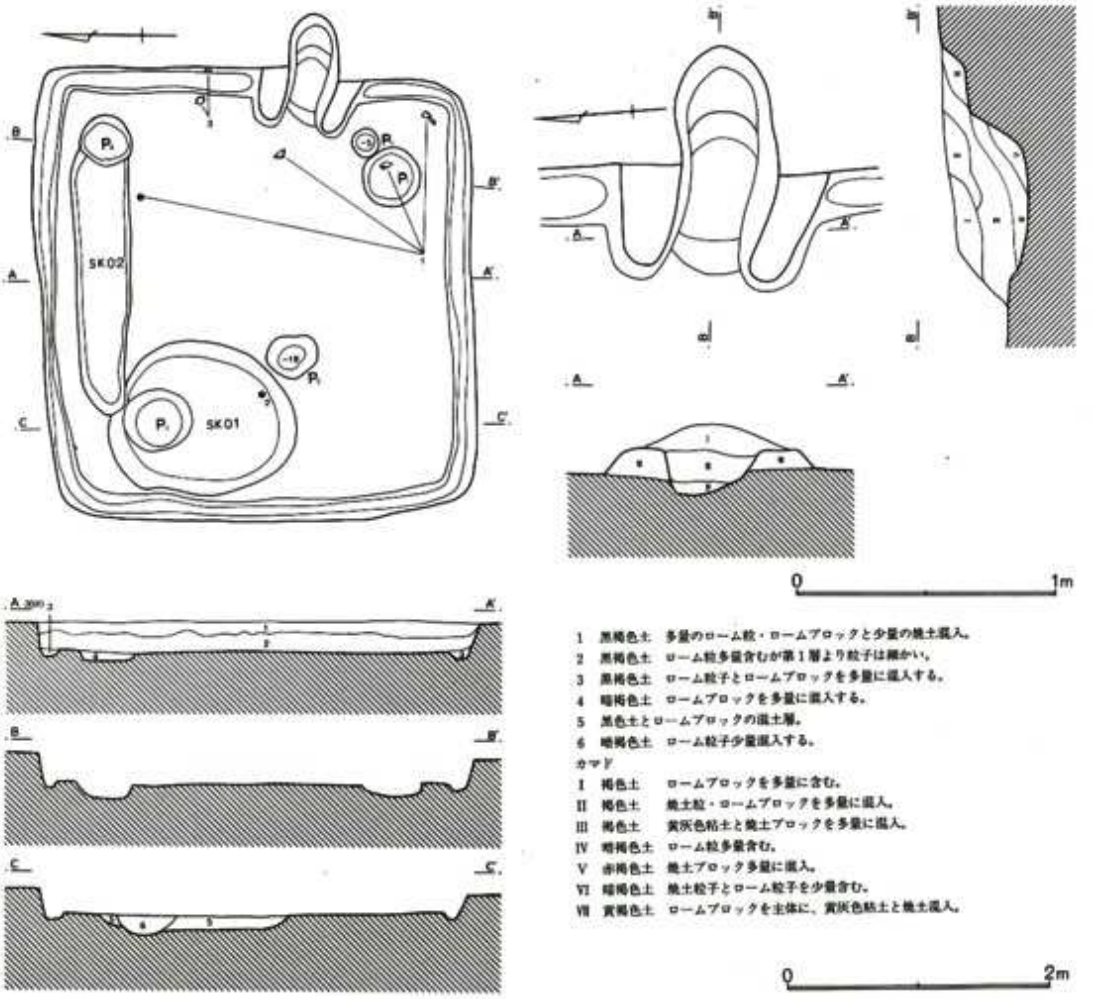
カマドは東壁に位置し、焚口から煙道部先端までの長さは86cm、燃焼部幅は37cmを測る。燃焼部奥壁は壁ラインの外側にあり、直角近い角度で立ち上がる。底面は床面から7cm程掘り込まれ鍋底状を呈する。覆土は6層に分かれる。第Ⅰ・Ⅱ層は住居埋土か。第Ⅲ～Ⅴ層は天井部崩落土に相当し

よう。袖は基部が辛うじて残存していたのみであるが、黄灰色粘土は寧ろ少なく、主体はロームブロックで構築されていた。

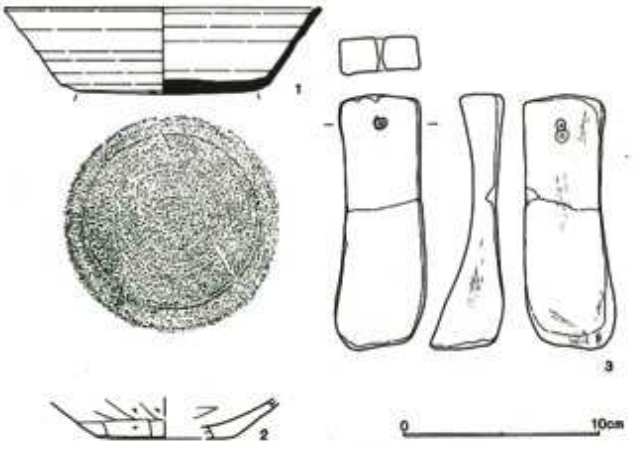
貯蔵穴は明確ではないが、おそらくP_1がそれに相当しよう。直径45cmの円形プランで深さは11cm。覆土はロームブロックと焼土混じりの暗褐色土で、内部から出土した須恵器坏はP_1外の破片と接合したことから、住居廃棄時には開口していたものと考えられる。

ピットは他に4本検出されたが住居の主柱穴とはならないであろう。また、円形土壙が1基(SK01)と、北壁に平行する幅40cm程の溝状土壙(SK02)が検出された。何れも掘り方とみるのが妥当であろう。

壁溝は深さ5cm程でカマドを除き全周する。



第413図 C区第45号住居跡・カマド



第414図　C区第45号住居跡出土遺物

出土遺物には土師器と須恵器、砥石があるが、量的には少ない。土師器では坏が2点、小形甕1点、須恵器では坏が2点あるほか、蓋天井部と甕、瓶類の胴部片が検出されたに留まる。土師器坏は口縁内面に沈線が巡る比企型坏の系譜を引くものであるが細片のため図化し得ない。

第414図1の須恵器坏は口径16cmの大振りの製品で、丸底風の底部から口縁部は長く外反する。3は提砥で、上部に吊り下げ用の小孔が穿たれている。両面から穿孔され、片面には穿孔途中の盲孔が複合していた。全長12.9cm、重量180g。そのほか、須恵器瓶類の胴部片は胎土からみて東海産(湖西か)と思われる。須恵器坏の特徴から稲荷前Ⅴ期に比定される。

C区第45号住居跡出土遺物観察表(第414図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	16.0	4.4	10.8	ABC	A	灰白	90%	No.39,他　覆土(0～+4cm)+P_1内
2	壺		2.0	(7.0)	ABC	B	橙	20%	No.33　覆土(+5cm)
3	提砥								全長12.9cm　重量180g

C区第46号住居跡(第415図)

E・F-23・24区に位置する。第6号・17号溝跡、及び第58号土壙の攪乱を受け遺存状態は良くない。形態は方形を呈するものと推定され、推定規模は長軸4.00m、短軸3.88m、深さ20cmを測る。主軸方位はN－74°－Eを示す。

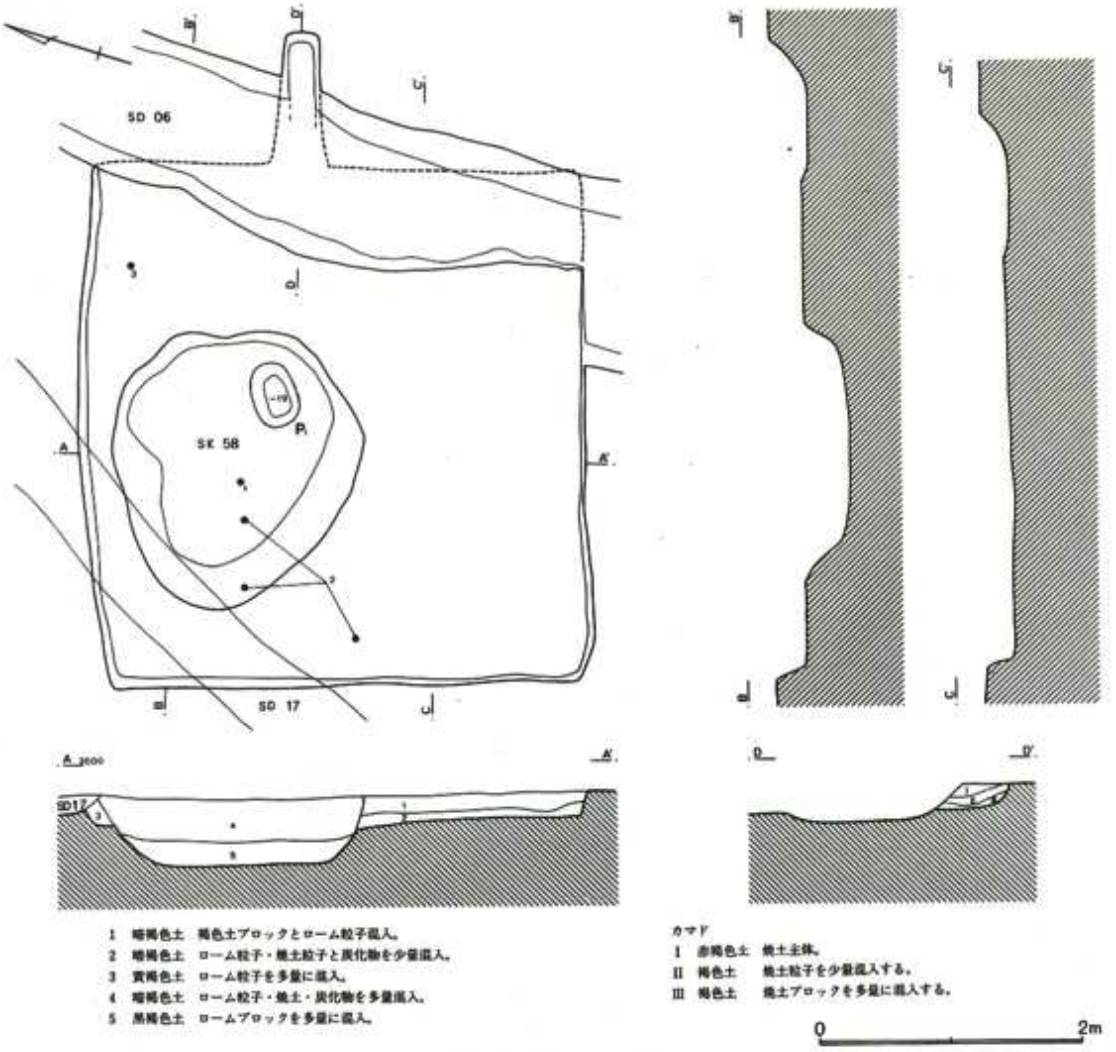
床面は概ね平坦である。覆土は3層に分かれ、基本的にはローム混じりの暗褐色土で構成されていた。

カマドは東壁に位置するが、第6号溝跡に大半を破壊され、辛うじて煙道部が検出されたに留まる。煙道部は幅30cm程でほぼ水平方向に延びている。覆土には焼土が多量に含まれ天井部崩落土を主体に構成されるものと考えられる。

第58号土壙は人為的に埋め戻されたものと推定されロームが多量に含まれていた。土層観察によって住居よりも新しく17号溝跡よりも古いことが判明した。ピットは第58号土壙内から1基検出されたが、主柱穴とするにはやや無理があろう。

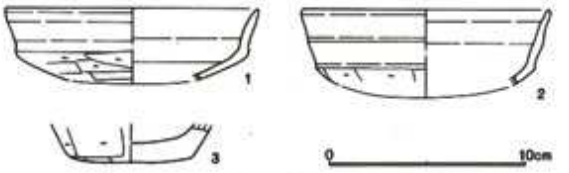
出土遺物は少ない。土師器は坏が4点と甕胴部及び底部片、須恵器は坏口縁小片と甕胴部片が出土したのみである。

第416図1はいわゆる模倣坏、2は有段口縁坏である。口径は12cm後半代と比較的大きく、2の口縁部中位の段も明瞭である。他に赤彩された比企型坏の口縁部細片が2点ある。1はSK58内、2はSK58内と住居覆土の破片が接合した。住居の遺物が流れ込んだものかもしれない。須恵器は8



第415図　C区第46号住居跡

世紀以降のもので混入と考えられる。時期を限定するにはやや資料不足の感は免れないが、1・2の土師器坏から7世紀初頭～前半代、おそらく稲荷前II期を中心とした段階と思われる。



第416図　C区第41号住居跡出土遺物

C区第46号住居跡出土遺物観察表(第416図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.9)	3.7		BC	C	にぶい橙	20%	No.41　SK58内(-21cm)　無彩
2	坏	(12.6)	3.8		AB	C	にぶい褐	40%	No.15,3　覆土(+10～15cm)+SK58内
3	甕		2.0	(6.3)	ABCJ	B	にぶい褐	35%	No.32　覆土(+4cm)

C区第47号住居跡(第417図)

G・H-23区に位置する。第17号方形周溝墓・第48号住居跡を切り、第9号掘立柱建物跡及び第8号井戸跡に切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸4.60m、短軸4.56m、深さは5cm以下と非常に浅い。主軸方位は座標北を示す。

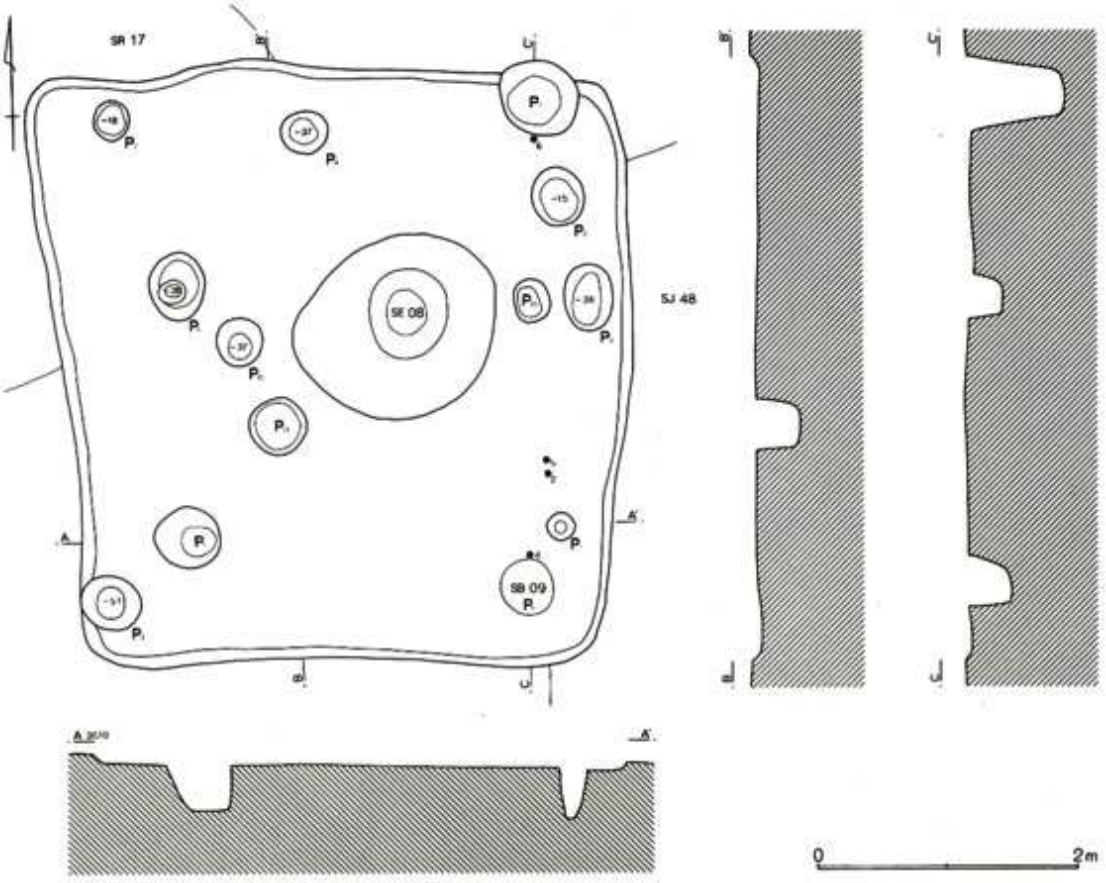
床面は概ね平坦である。覆土はローム粒子と焼土粒子を含む黒褐色土で構成されるが、壁高が浅いために詳細は明らかにできなかった。

カマドは検出されなかった。既に削平されたのか、当初より存在しなかったのかについては不明である。

ピットは12本検出されたが、主柱穴配置は不明である。

出土遺物には土師器と須恵器、常滑系鉢がある。土師器は坏が口縁部破片数で1点、甕が10点、須恵器は坏が8点、蓋1点、高盤1点と甕及び瓶類の胴部片が検出された。土師器坏は模倣坏系の比企型坏の口縁部細片で混入の可能性が高い。土師器甕には図示できる資料がないが、武蔵型甕の系列に含まれるものが存在する。

第418図1・2は須恵器坏で、推定口径は16cm前後とかなり大振りである。何れも堅く焼き締まり、前者は内外面に火襷痕が残る。3は特殊かえり蓋。内面に自然釉が厚く付着する。第40号住居跡出土かえり蓋(第405図2)と器肉の厚さは異なるものの釉調は極めて近く同一個体の可能性がある。4



第417図　C区第47号住居跡

は高盤と思われる。5は常滑系鉢で混入と考えられる。須恵器の様相からみると稲荷前Ⅶ期が下限であろう。

第418図　C区第47号住居跡出土遺物

C区第47号住居跡出土遺物観察表(第418図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.8)	3.8	(11.2)	ABC	A	灰	10%	覆土
2	坏	(16.0)	3.7	(12.8)	ABC	A	灰	15%	№73　覆土(+7cm)
3	蓋	(18.0)	1.5		ABC	A	灰	10%	覆土
4	高盤	(22.2)	1.9		ABC	A	灰	15%	№42　床面
5	鉢	30.0	3.5		AB	A	灰白	5%	№41　床面　常滑系　混入
6	甕		1.8	5.6	ABE	A	にぶい橙	25%	№33　覆土(+6cm)

C区第48号住居跡(第420図)

調査区のほぼ中央部、G・H-23区に位置する。遺構確認段階で床面下まで削平されており、壁溝が確認されたことにより辛うじて住居跡と認識できた。また、第47号住居跡、第12号溝跡、第9号掘立柱建物跡及び土壙(SK67～72)、ピット群等の攪乱を受け遺存状態は極めて悪い。また、東壁部には円形周溝状遺構(SX05)が重複するが新旧関係は明確にはできなかった。

形態は方形を呈するものと推定されるが、住居南半は確定できない。残存規模は東西長5.10m、南北長2.82mを測る。主軸方位は座標北を示す。

床面及び覆土の状態は不明である。

カマドは検出されなかった。

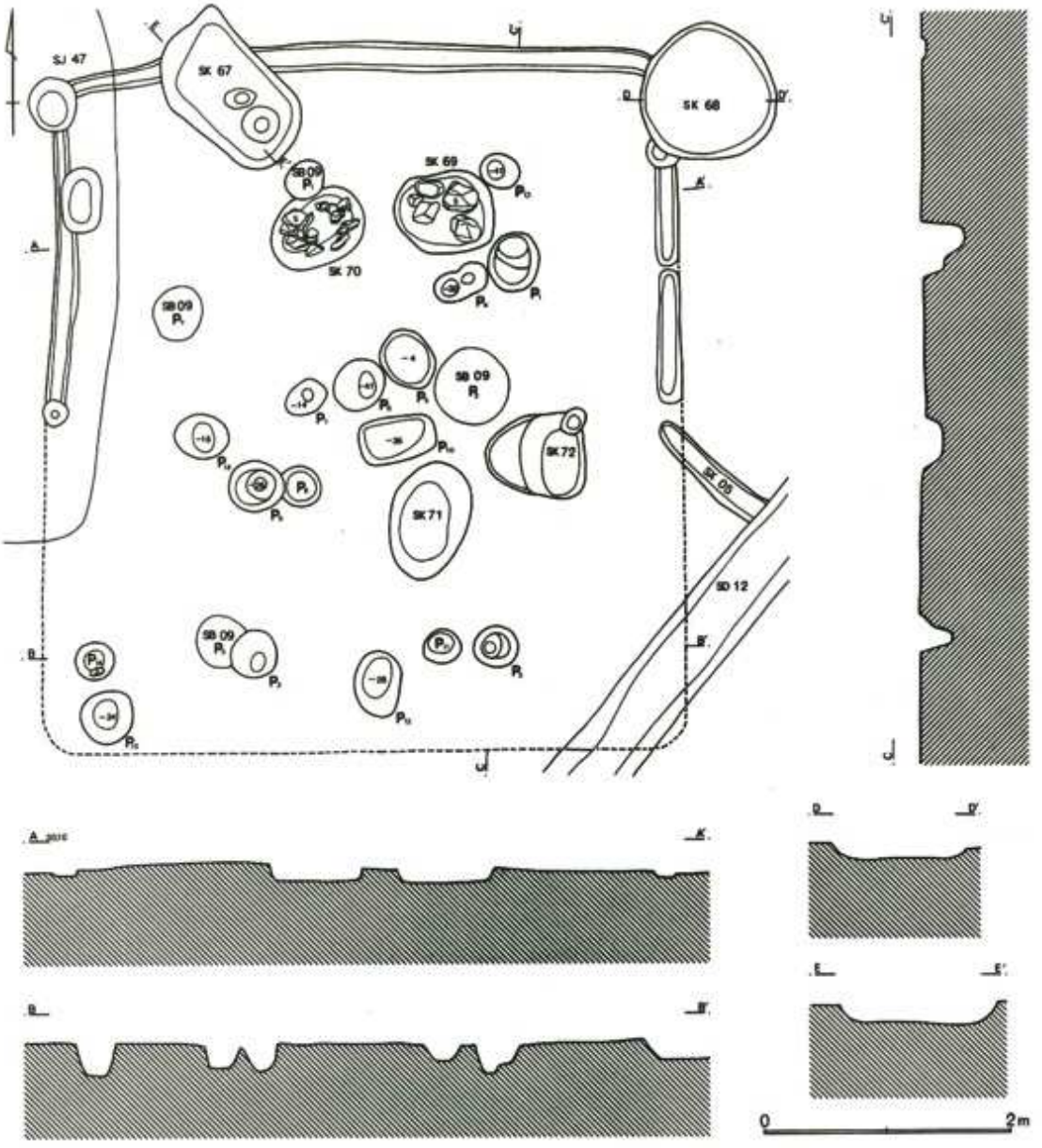
ピットは多数検出された。仮に4本主柱穴とするとP_1～P_3がそれに相当する可能性があるものの対応する北西部の柱穴が欠落する。大半のピットは住居よりも新しい段階(おそらく中世であろう)の所産と思われる。

壁溝は深さ5cm程で、住居北半で確認された。

出土遺物はほとんどない。第419図1の須恵器坏はP_{14}から出土したもので遺構に伴うという保証はない。時期決定するには資料不足で、現状では重複する第47号住居跡との切り合い関係から稲荷前Ⅶ期以前という限定しかできない。

第419図1は須恵器坏である。推定口径は15cm前後となろう。残存高3.2cm。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質を含み、焼成は良好である。色調は青灰色。口縁部の約10%が残存する。P_{14}覆土から出土した。

第419図　C区第48号住居跡出土遺物



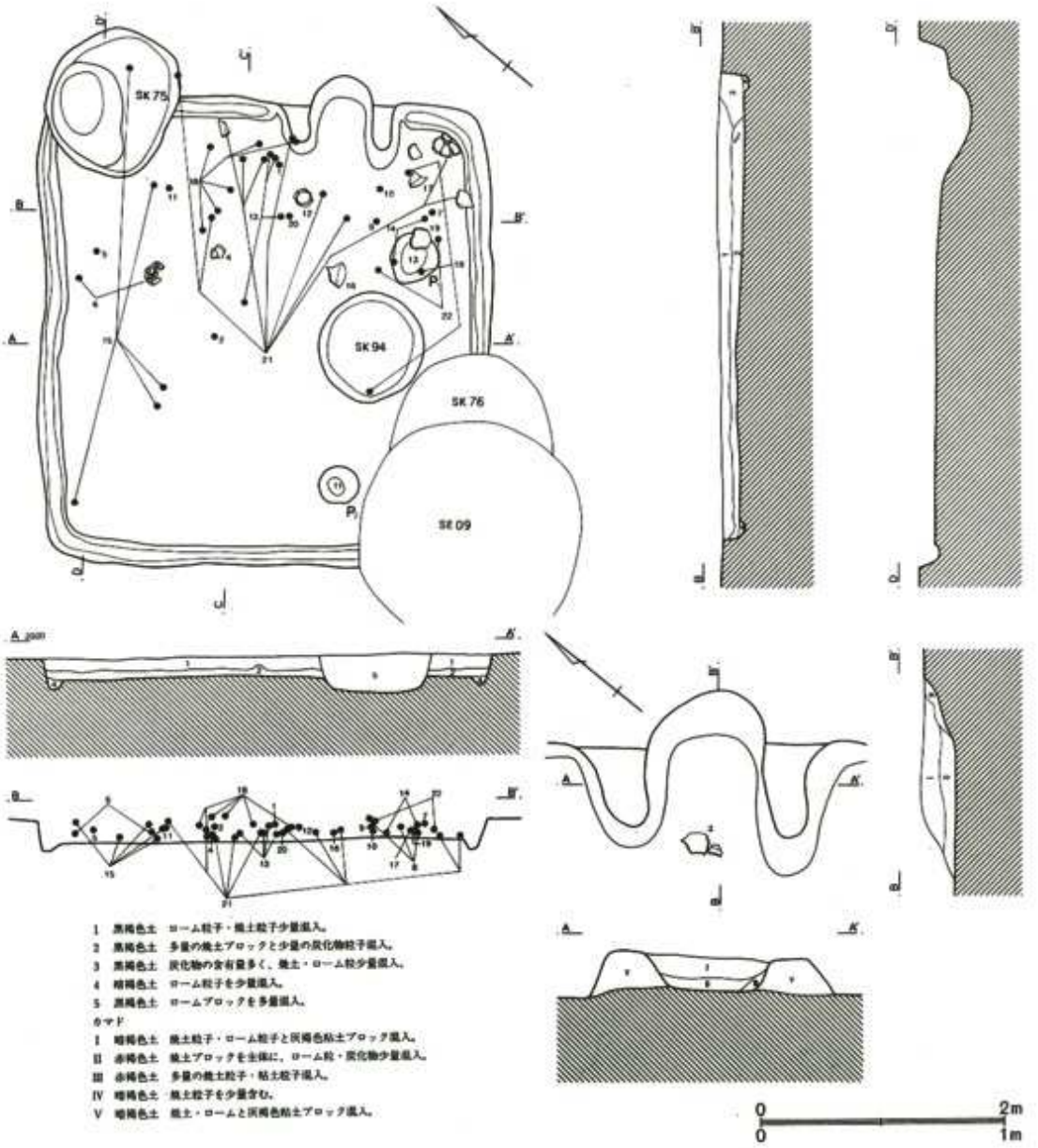
第420図　C区第48号住居跡

C区第49号住居跡(第421図)

H-23区に位置し、3基の土壙(SK75・76・94)と第9号井戸跡の攪乱を受けていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.80m、短軸3.68m、深さ15～20cmを測る。主軸方位はN－53°－Eを示す。

床面は西壁側から東壁側に向かって傾斜していた。覆土は4層に分かれ、第2層には焼土ブロックの含有が顕著に認められた。

カマドは東壁に位置する。壁外の切り込みは15cm程と少なく、燃焼部の大半は壁内にあるものと考えられる。燃焼部幅は50cmで底面は床面と同一レベルで続いている。覆土は4層に分かれ、第I～III層は天井部崩落土と推定される。第IV層は流入土の可能性もある。掘り込み底面が火床面に相



第421図　C区第49号住居跡・カマド

当しようが、明確な灰層は確認されなかった。袖は基底部が残存しており、焼土とロームブロック混じりの灰褐色粘質土で構築されていた。

ピットは2本検出された。P_2の帰属は不明であるが、P_1については住居に伴う可能性もある。

壁溝は深さ5～10cm程でカマドを除き全周していた。

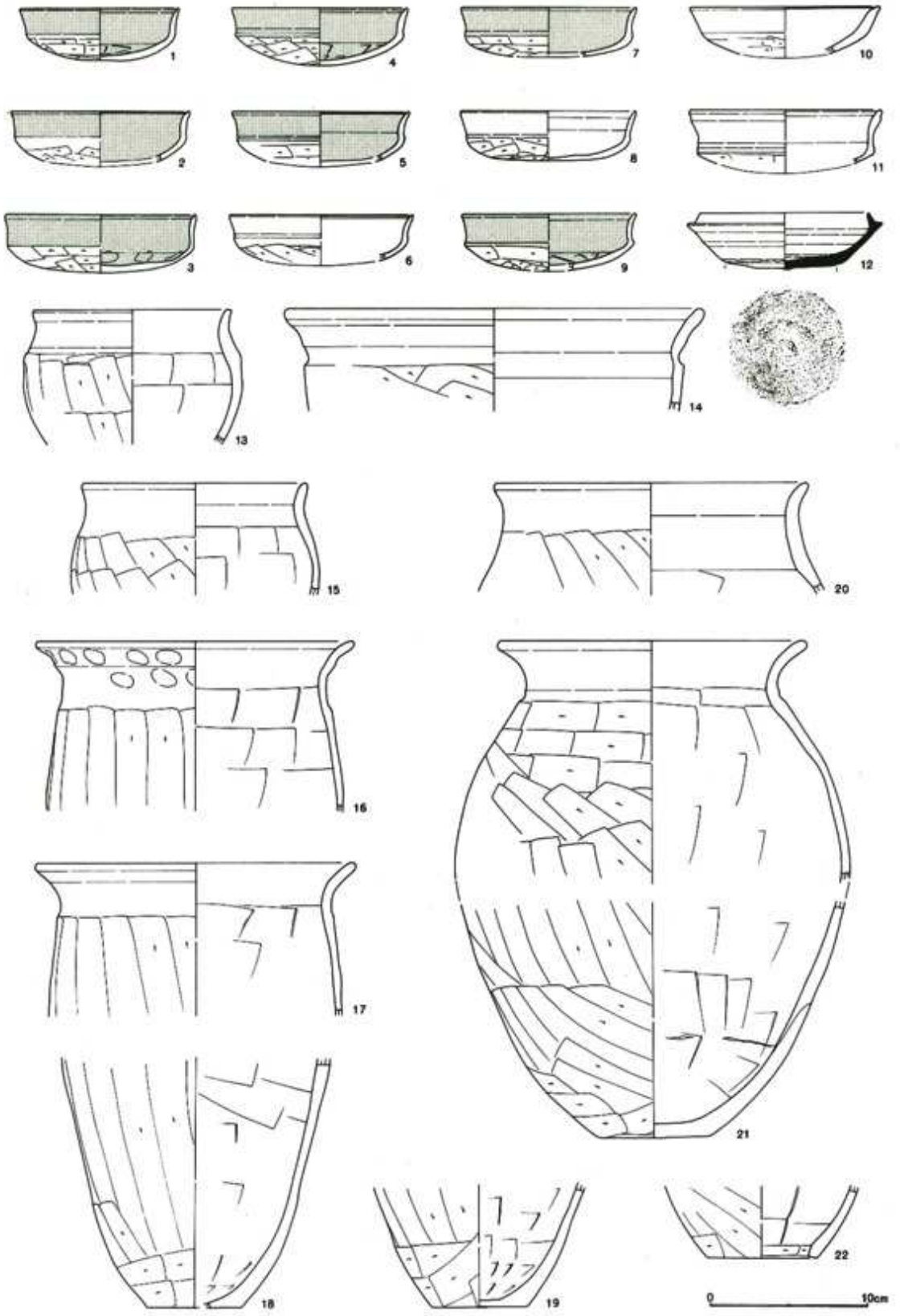
出土遺物は比較的多く、住居東半に集中する傾向がある。また、それらの遺物のほとんどは床面よりも浮いた位置から出土しており、住居埋没過程の投棄、或いは流入と考えられる。出土遺物には土師器と須恵器があり、主体は前者が占める。土師器は坏が口縁部破片数で24点、甕11点、小形甕3点、台付甕2点(脚部)、甑1点(孔部)、壺1点、須恵器は坏が口縁部破片で4点と、坏底部破片が2点検出されている。

第422図1～11は土師器坏である。口径は11cm程を主体とし、10cm～12cmに分布する。主に比企型坏系の土器群から構成されるが形態から幾つかの種類に分かれる。1～5は比企型坏及び模倣坏系の比企型坏で口唇部内面に沈線が巡ることと赤彩される点に特徴があるが、口縁部下位が内屈する典型的な比企型坏は認められない。6・11は形態上は模倣坏系比企型坏といえるが赤彩が施されていない。逆に7～9は形態的には模倣坏といえるが、7・9には赤彩が施され、比企型坏の手法的な影響が色濃く現れている。10は皿状の器形を呈し、口唇部に沈線が巡るもので比企型坏の系譜からは外れるといえよう。

第422図12はほぼ完形の須恵器坏で、カマド前面の覆土中から出土した。口縁部の立上がりは比較的高いが口径は10.6cmと非常に縮小している。底部はヘラ切りで、焼成はやや甘い。胎土には白色針状物質が含まれ、在地産(南比企窯跡群産)と考えられる。土師器坏類は比企型坏の様相からみてIII期～IV期、おそらく主体はIV期としてよいであろう。須恵器坏は在地産の坏Hとしては最新段階の一例となろうが、土師器坏類よりもやや古相といえるかもしれない。

C区第49号住居跡出土遺物観察表(第422図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.0	3.2		ABC	A	淡橙	90%	No.84 覆土(+13cm) 赤彩
2	坏	(11.2)	3.1		ABJ	A	橙	20%	No.40 覆土(+9cm) 赤彩
3	坏	(12.0)	3.7		ABC	A	橙	45%	No.270,271 覆土(+15cm) 赤彩
4	坏	11.1	3.7		ABC	A	にぶい橙	55%	No.263 覆土(+6cm) 赤彩
5	坏	(11.2)	3.1		ABJ	A	橙	10%	No.21 覆土(+11cm)赤彩
6	坏	(11.6)	2.9		ABC	B	にぶい橙	25%	No.13,264 覆土(+7～10cm) 無彩
7	坏	11.1	3.1		ABC	B	にぶい橙	60%	No.197 覆土(+13cm) 赤彩
8	坏	(11.1)	3.2		ABC	B	橙	25%	No.146,181,204 覆土(+7～14cm)
9	坏	(11.0)	3.6		ABJ	A	橙	25%	No.211 覆土(+9cm) 赤彩
10	坏	(12.0)	2.9		ABC	A	灰褐	10%	No.235 覆土(+6cm)
11	坏	(12.0)	3.4		ABC	A	にぶい黄橙	15%	No.56 覆土(+15cm) 無彩
12	坏	10.6	3.5		ABC	C	にぶい黄橙	100%	No.261 覆土(+13cm)
13	鉢	(12.0)	8.5		ABC	B	橙	20%	No.41,74,他 覆土(+4～15cm)
14	鉢	(26.0)	6.5		ABC	A	橙	15%	No.179,195 覆土(+8～14cm)
15	小形甕	(14.2)	7.1		ABC	B	灰褐	50%	No.3,4,他 覆土(0～+16cm)
16	甕	(20.0)	10.7		ABCJ	B	にぶい橙	25%	No.259 覆土(+7cm)
17	甕	(20.0)	9.6		ABCJ	B	橙	20%	No.256 覆土(+8cm)
18	甕		15.8	(6.0)	ABC	A	にぶい褐	25%	No.68,88,他 覆土(+10～21cm)
19	甕	7.8	6.0		ABC	A	にぶい橙	70%	No.258 覆土(+7cm)
20	壺	(19.6)	7.0		ABC	A	浅黄橙	15%	No.110 覆土(+8cm)
21	壺	(19.0)	31.4		ABC	A	明黄褐	25%	No.73,80,他 覆土(+2～18cm)
22	甑		4.6	7.0	ABCJ	A	橙	40%	No.169,189 覆土(+8～14cm)



第422図　C区第49号住居跡出土遺物

C区第50号住居跡(第423図)

H・I-22・23区に位置し、第12号溝跡と第73号土壙による攪乱を受けていた。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸4.46m、短軸3.36m、深さ10cmを測る。主軸方位はN－2°－Wを示す。

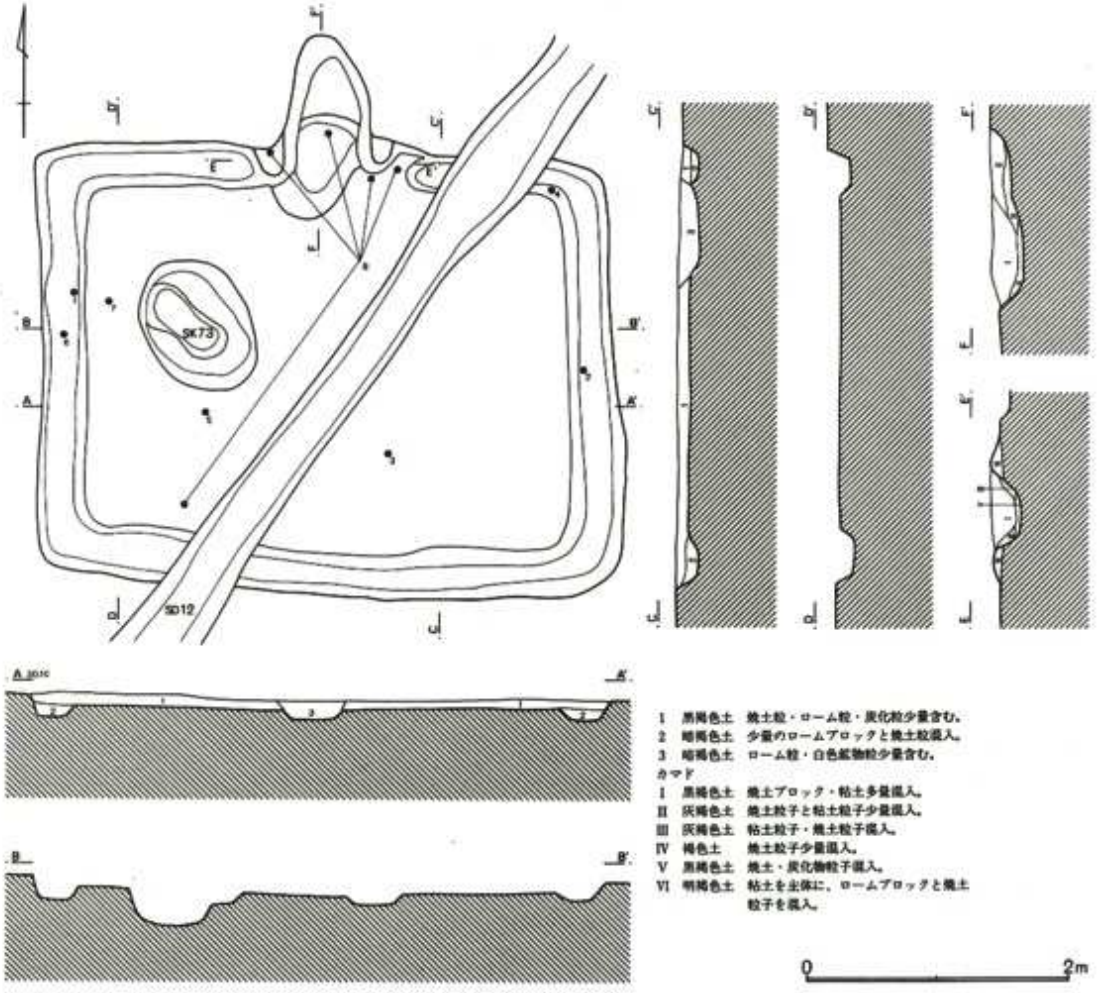
床面は平坦である。覆土は基本的に黒褐色土単層で土層変化は観察されなかった。

カマドは北壁に位置し、壁を約80cm切り込んで構築される。規模は焚口から先端までの長さ140cm、幅68cm、床面からの深さ20cmを測る。燃焼部と煙道部の区画は明確ではないが、底面の緩い段がそれに相当するかもしれない。覆土は5層に分かれ、第I～III層が天井部崩落土、第V層が灰層に相当しよう。袖部にはロームブロックと焼土混じりの粘土が残存していたが、遺存状態は極めて悪い(第VI層)。

貯蔵穴及びピットは検出されなかった。土壙(SK73)は床面を切っており、住居よりも新しい時期の所産である。

壁溝は幅40cm、深さ10cm程でカマドを除き全周する。

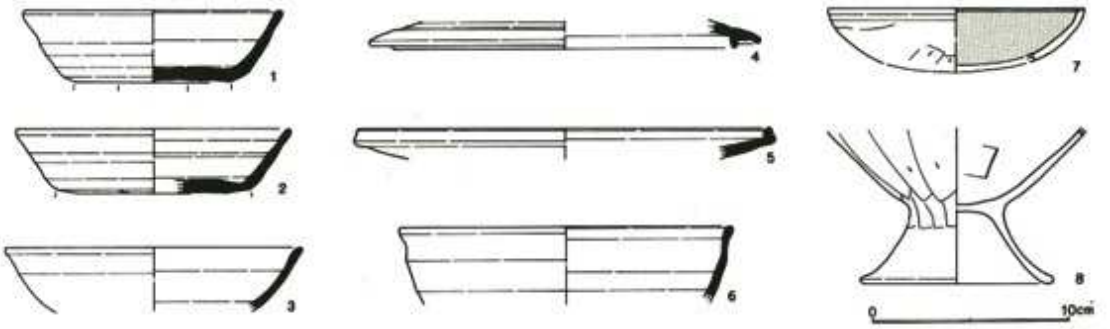
出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は坏が口縁部破片数で4点、甕1点、鉢1点、須恵



第423図　C区第50号住居跡

器は坏が6点、椀1点、蓋3点と甕及び瓶類の胴部片が検出された。土師器坏は図示したもの(第424図7)の他に模倣坏系比企型坏の細片が3点ある。須恵器坏は3点図化した(1～3)。1は底部回転糸切り後周辺部へラケズリ、2はヘラケズリで腰を削っている。4はいわゆる特殊かえり蓋の小片で口径と傾きに不安を残す。5高盤と思われる。8は台付甕。

時期的に見ると幅があり、およそ8世紀初頭～8世紀中葉頃の土器群で構成される。土師器坏は稲荷前Ⅴ期前後、2・3は同Ⅶ期、5・6はⅦ期～Ⅷ期、1はⅧ期と思われる。最も新しいと思われる1は床面から10cm以上浮いた位置から出土しており埋没段階の遺物であろう。2は壁溝内から出土したもので住居に伴う可能性がある。一応稲荷前Ⅶ期に機能しⅧ期には廃棄されたものとしておきたい。土師器坏は混入であろう。



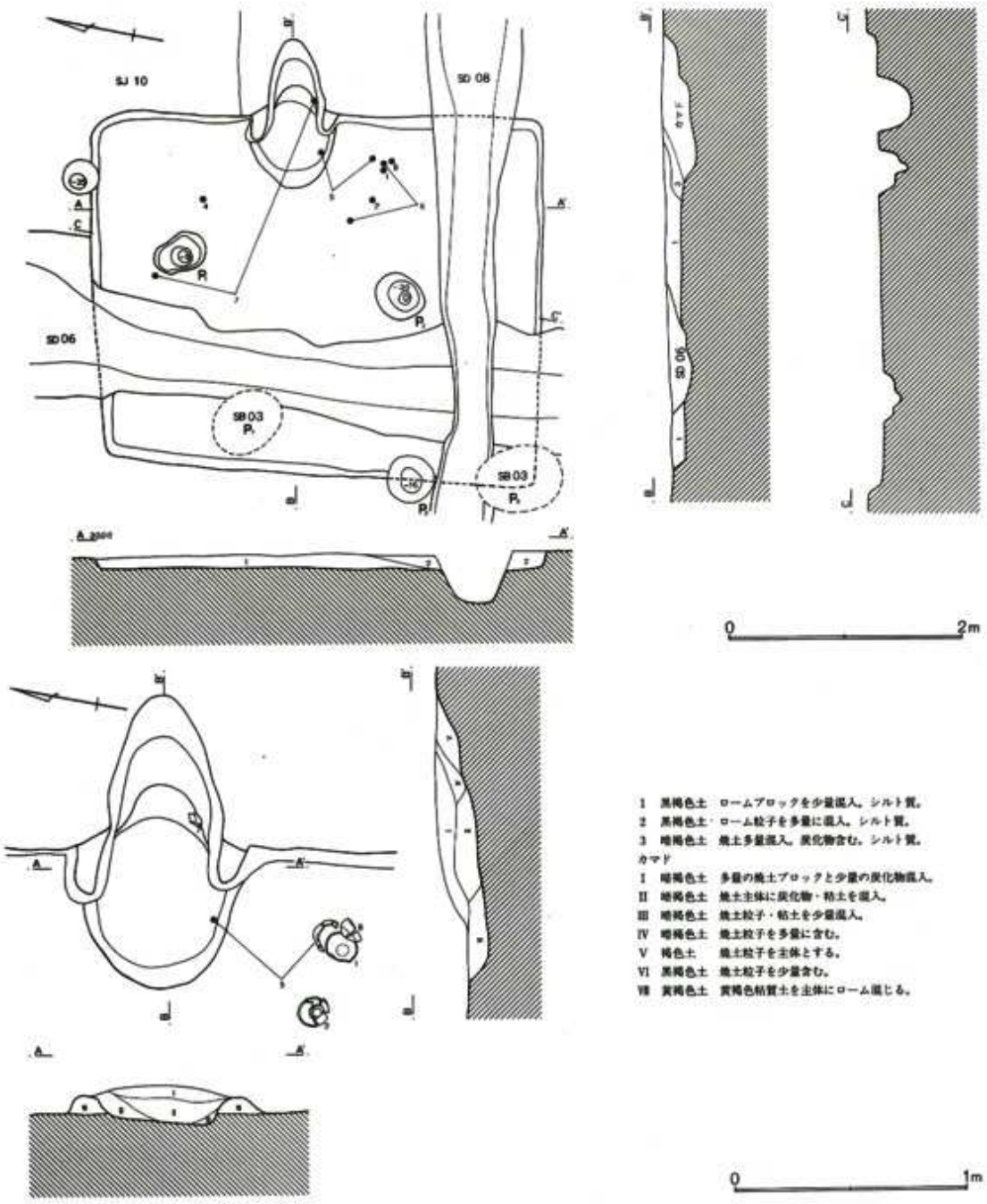
第424図　C区第50号住居跡出土遺物

C区第50号住居跡出土遺物観察表(第424図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.0)	3.7	7.9	ABC	A	灰白	45%	No.13　覆土(+13cm)
2	坏	(13.8)	3.3	(9.8)	ABC	A	にぶい橙	25%	No.124　周溝内(-3cm)
3	坏	(15.0)	3.3		ABC	A	灰	10%	No.79　床面　赤彩
4	蓋	(19.8)	1.4		ABC	B	灰白	5%	No.10　床面
5	高盤	(21.0)	1.6		ABC	A	灰	10%	No.101　覆土(+5cm)
6	椀	(17.0)	3.9		ABC	A	暗灰	10%	No.92　床面
7	坏	(13.0)	2.7		ABC	B	にぶい橙	10%	No.72　覆土(+5cm)
8	台付甕		7.7	(9.4)	ABE	A	橙	50%	No.133,146　カマド内　28,他　覆土

C区第51号住居跡(第425図)

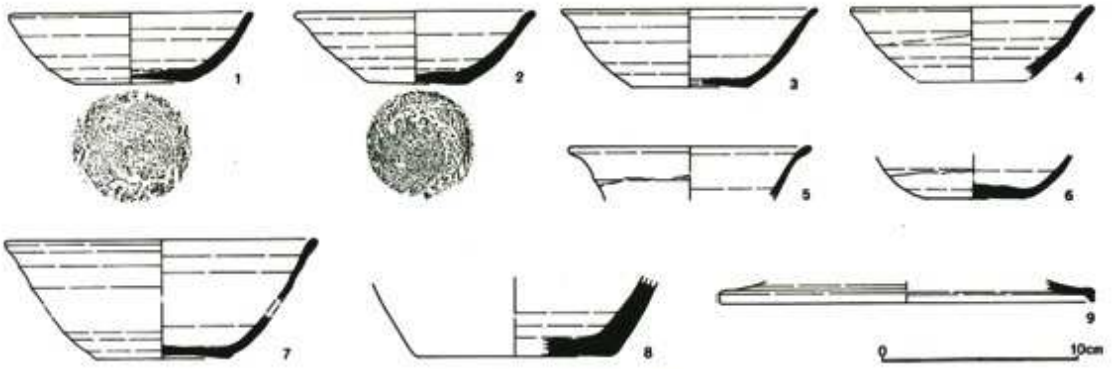
F-24区に位置する。第10号住居跡を切り、第6号及び第8号溝跡に切られていた。また、第3号掘立柱建物跡とも重複し、柱穴上面に住居の床面が形成されていたことから本入居の方が新しいものと推定された。形態は横長の長方形を呈し、規模は長軸3.88m、短軸3.02m、深さ10～15cmを測る。主軸方位はN－79°－Eを示す。



第425図　C区第51号住居跡・カマド

床面はやや凹凸をもち、カマド前面を中心に堅く踏み固められていた。覆土は基本的にはロームを含む黒褐色土で構成されていた。

カマドは東壁に位置し、壁を約60cm切り込んで構築されていた。規模は全長1.25m、燃焼部幅48cmで、焚口部底面は床面から約10cm掘り込まれていた。底面は比較的平坦で先端部は緩やかに立ち上がる。覆土は6層に分かれる。全体に焼土の含有量が多く、第Ⅰ～Ⅴ層は天井部及び袖の崩落土と考えられる。第Ⅵ層は掘り方埋土と考えることもでき、若しそうであれば焚口部は現状よりも40



第426図　C区第51号住居跡出土遺物

cm程壁に寄ることになる。袖部には黄褐色粘質土が僅かに遺存するものの、痕跡程度であまり明確なものではなかった。ピットは住居内から2本、壁にかかって2本検出された。P_1・P_2は掘り方形態も類似しており2本主柱穴と見ることもできる。

出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は甕・壺の胴部及び底部破片のみで良好な資料はない。須恵器は坏類が口縁部破片数で12点、蓋2点と甕・瓶類の破片がある。

第426図1～6は須恵器坏。底部は全て回転糸切り後無調整で、底径は口径の1/2以下に縮小しており、器形的に見ると体部中程に膨らみをもつ。これらの特徴から稲荷前XIII期に比定されよう。

C区第51号住居跡出土遺物観察表(第426図)

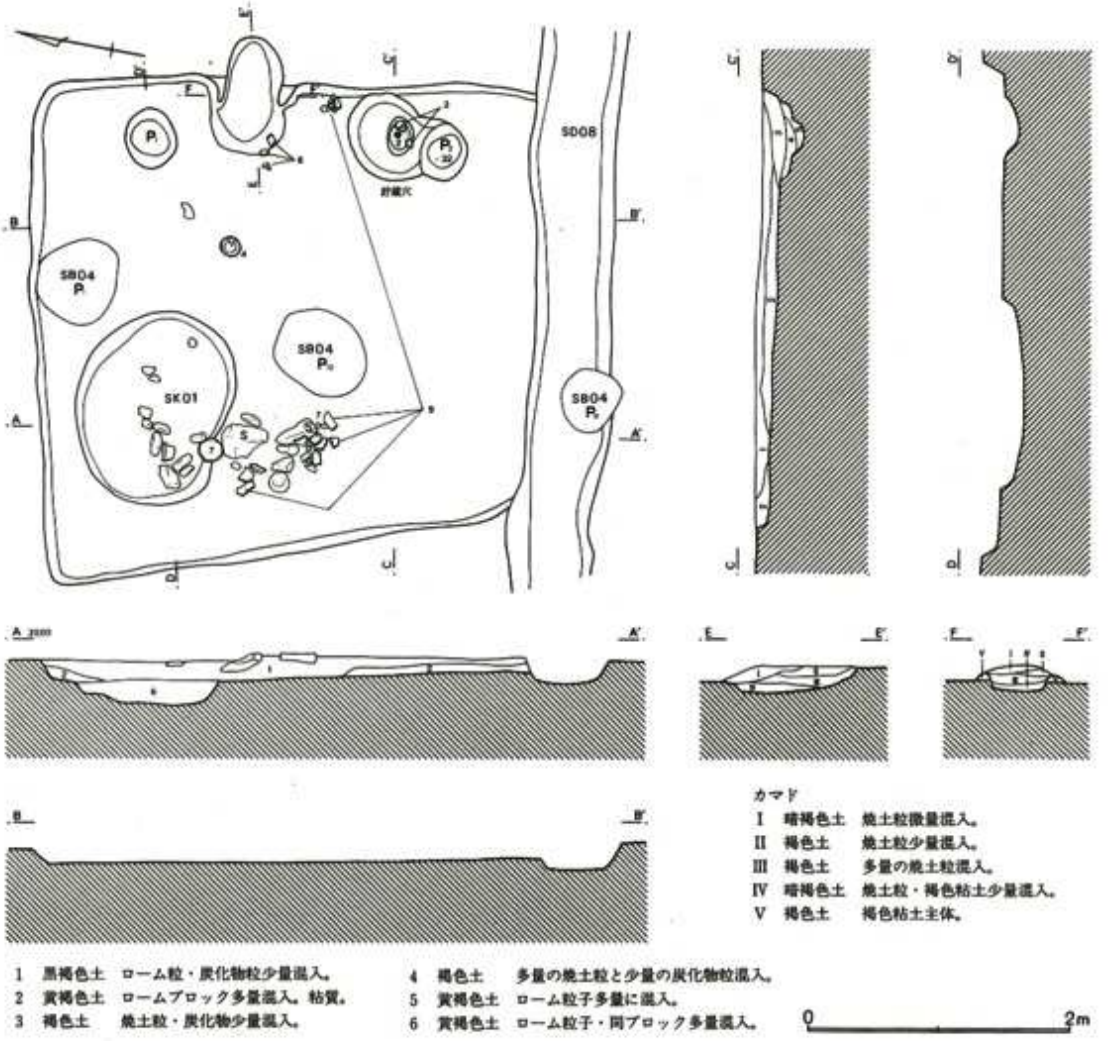
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.2	3.6	5.7	ABC	A	暗青灰	95%	No.21　床面
2	坏	12.1	3.7	5.1	ABC	B	暗青灰	95%	No.23　覆土(+4cm)
3	坏	(12.9)	4.0	(6.0)	ABC	B	明オリーブ灰	40%	カマド前覆土
4	坏	(12.2)	3.6		ABC	B	オリーブ灰	20%	No.10　覆土(+14cm)
5	坏	12.2	2.7		ABC	A	暗青灰	55%	No.15,19　(カマド内+床面)
6	坏		2.2	(5.1)	ABC	B	灰	25%	No.16,42　覆土(+5～6cm)
7	椀	(15.6)	6.0	6.8	ABC	A	灰白	15%	No.4,51　(カマド内+床面)
8	壺		4.0	(10.0)	ABC	C	灰黄	25%	No.22　覆土(+7cm)
9	蓋	(19.0)	1.1		ABC	A	灰白	5%	覆土

C区第52号住居跡(第427図)

E・F-24区に位置し、第8号溝跡と第4号掘立柱建物跡に切られていた。形態はやや歪んだ方形を呈するものと推定され、規模は長軸3.94m、短軸3.76m、深さ10～20cmを測る。主軸方位はN－77°－Eを示す。

床面は全体的に堅く踏み固められているが、若干傾斜をもつ。覆土は3層に分かれる。第2層にはロームブロックが多量に含まれ、第1層中には大形の礫が投棄された状況で混入するなど埋没過程には人為的な関与が窺われた。

カマドは東壁に位置し、壁を35cm程切り込んで構築されていた。規模は全長90cm、燃焼部幅42cmを測り、底面は床面から10cm程皿状に掘り込まれていた。覆土は4層に分かれる。焼土を多量に含む第III層が天井部崩落土に相当するものと推定されるが、第I・II層については良くわからない。袖



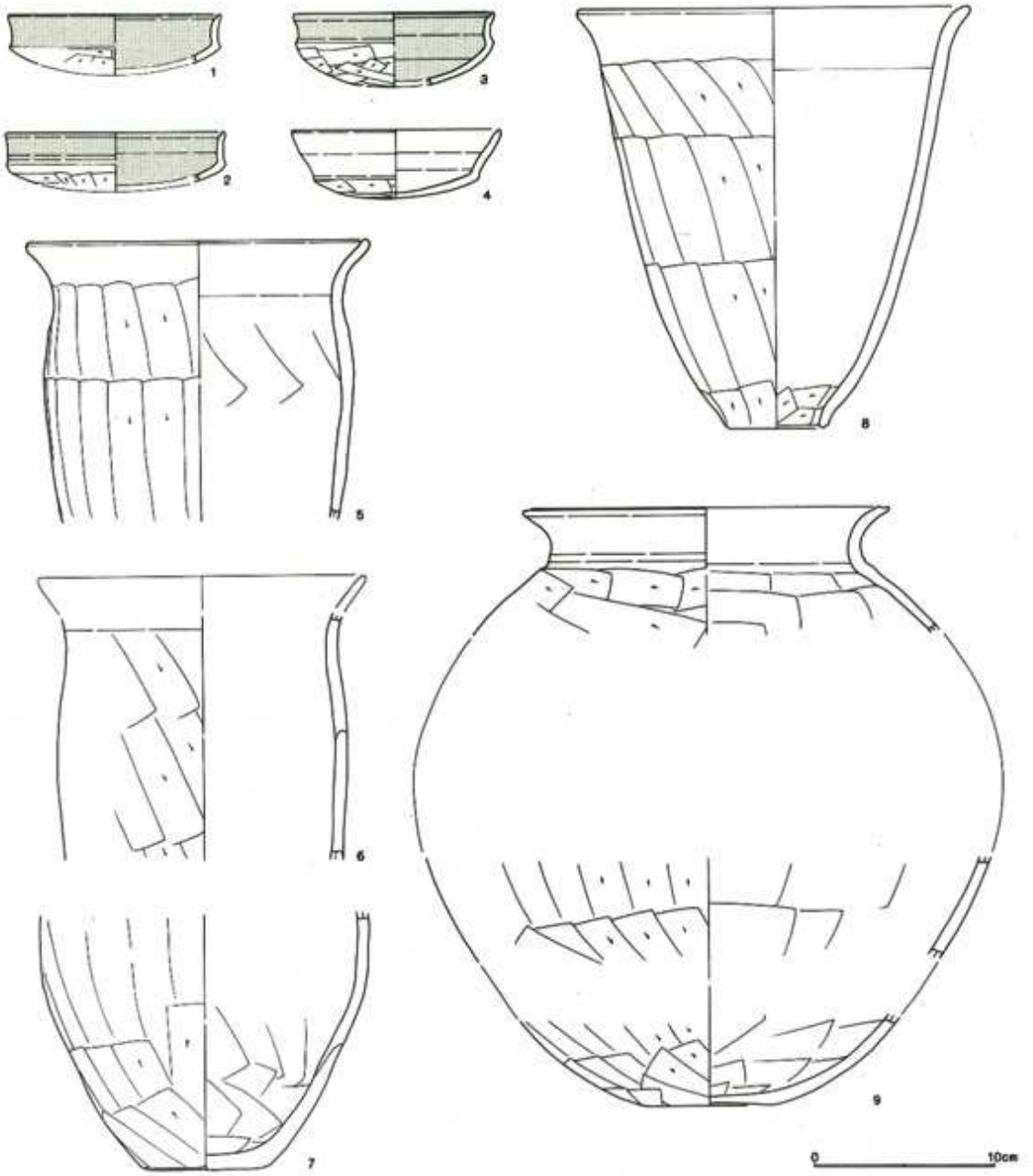
第427図　C区第52号住居跡

は殆どが流失したものと思われ壁際から褐色粘土が僅かに検出されたに留まる。

貯蔵穴はカマド南側に隣接して設置される。P_2に切られているが、直径65cm程の円形プランを呈するものと考えられ、深さは20cm程である。埋土は2層に分かれ、第4層には焼土粒子が多量に含まれていた。

ピットは2本検出されたが、住居に伴う主柱穴とするには無理があろう。

出土遺物は主にカマド周辺と西壁寄りの2地点にまとまるが、ほとんどが床面よりも浮いていた。後者では礫群に混じって検出されており、大半の遺物が埋没過程で投棄されたものと考えられる。



第428図　C区第52号住居跡出土遺物

器種としては土師器と須恵器がある。土師器は坏が4点、甕4点、甑2点、壺2点、須恵器は坏・皿・甕が出土したが8～9世紀代の混入資料である。第428図1～3は模倣坏系比企型坏で口唇部内面に沈線と赤彩が施される。4は有段口縁坏と考えられるが、口縁中位の段は退化している。土師器甕は胴部縦ヘラケズリされ、口縁部は斜め外方に長く延びる。8は単孔の甑。9は壺で胴部を欠くが同一個体と思われる。土師器坏には典型的な比企型坏がない。有段口縁坏は口径が小さく器形的にも新しい様相が認められる。模倣坏系比企型坏は何れも小片で口径は不安定である。一応、稲荷前III期～IV期頃の土器様相と推定される。

C区第52号住居跡出土遺物観察表(第428図)

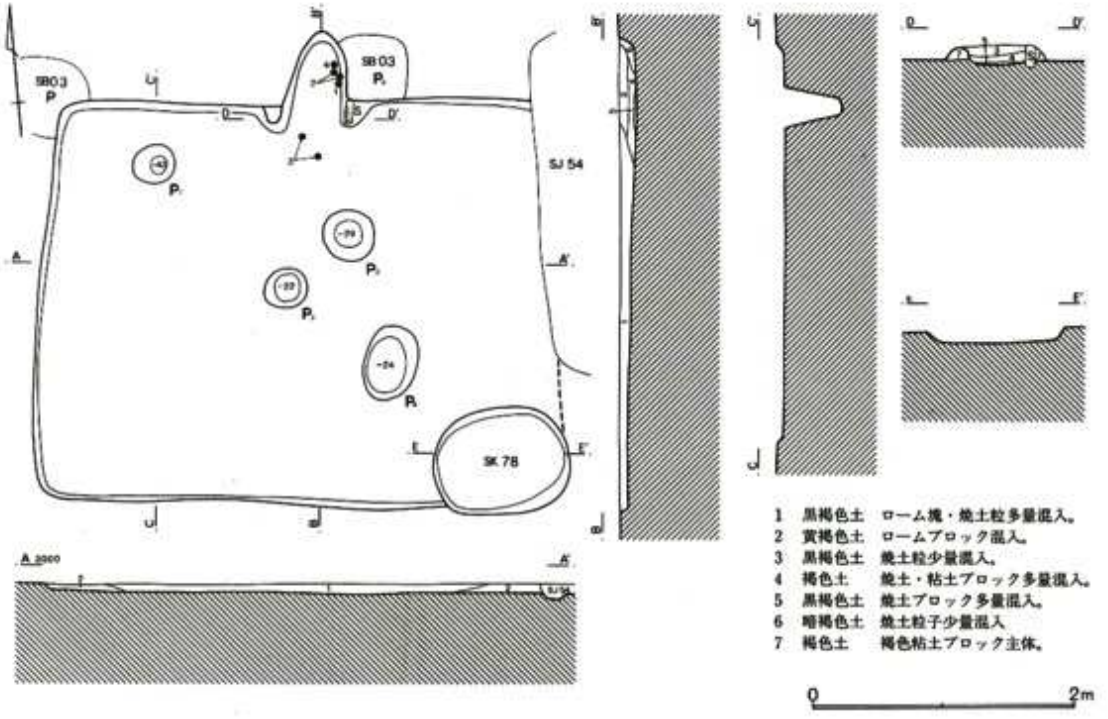
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.7)	2.7		ABC	A	浅黄橙	5%	覆土　赤彩
2	坏	(12.0)	2.8		ABC	B	浅黄橙	20%	No.63　貯穴上面　赤彩
3	坏	(11.0)	4.0		ABC	B	にぶい橙	25%	No.63,64　覆土(+3~6cm)　赤彩
4	坏	11.5	3.8		A	A	にぶい橙	80%	No.48　覆土(+11cm)
5	甕	(18.6)	15.5		ABCJ	B	橙	20%	確認面　全体に風化
6	甕		13.6		ABCJ	B	橙	10%	No.52~54　覆土(+7~14cm)
7	甕		14.1	7.0	ABC	A	淡黄	70%	No.27　覆土(+7cm)
8	甑	21.5	23.2		ABC	B	浅黄橙	55%	No.7　覆土(+13cm)
9	壺	(19.4)		7.2	ABC	A	にぶい橙	20%	No.5,6,他　覆土(+1~12cm)　無彩

C区第53号住居跡(第429図)

F-24区に位置する。重複関係は第3号掘立柱建物跡を切り、第54号住居跡及び第78号土壙に切られていた。形態は横長の長方形を呈し、規模は残存長軸4.00m、短軸3.10m、深さは5cm程と非常に浅い。主軸方位はN－3°－Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土にはロームブロックが多量に含まれていた。

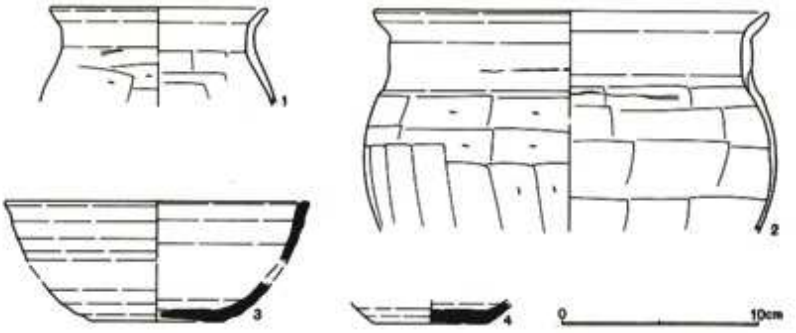
カマドは北壁に位置し、壁を約55cm切り込んで構築される。底面は平坦で床面との段差は僅かであり、焚口部の右袖には砂岩製の袖石が残されていた。袖石は壁際に埋設されていたことから、燃焼部は壁外にあるものと考えられる。覆土は第7・8層が天井部崩落土に相当しよう。左袖及び右袖の一部には褐色粘土が遺存していたが、袖そのものは壁内に長く延びるものではない。



第429図　C区第53号住居跡

ピットは住居内から4本検出されたが、伴う可能性は低いものと推定される。

出土遺物は土師器と須恵器があるが量的には少ない。土師器は甕が4点、小形甕1点、須恵器は坏が3点、椀1点、蓋2点と甕の胴部片が検出された。第430図1は土師器小形甕、2は甕で口縁部は「コ」の字状に屈曲する。3は椀で口縁部と底部は接合しない。4は坏底部片、底部回転糸切り後無調整である。稲荷前XIII期に比定されよう。



第430図　C区第53号住居跡出土遺物

C区第53号住居跡出土遺物観察表(第430図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小形甕	(10.8)	5.0		ABEJ	A	にぶい橙	25%	№6　カマド内
2	甕	(20.0)	11.2		ABEJ	A	にぶい橙	20%	№2,3,7　カマド内
3	椀	(15.4)	(6.0)	6.8	ABC	B	灰白	20%	№4,5　カマド内
4	坏		1.2	5.8	ABC	A	灰	80%	№2　カマド内

C区第54号住居跡(第431図)

F-24区に位置し、第53号住居跡を切って構築されていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.90m、短軸2.60m、深さは5cm前後と浅い。主軸方位はN－88°－Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は黒褐色土を基調とするが、堆積状態の詳細は不明である。

カマドは東壁に位置する。比較的規模は小さく焚口から先端部までの長さは60cm、幅42cmを測る。焚口の位置から推して燃焼部は壁外にあるものと考えられる。燃焼部底面は1段深く掘り込まれ、底面及び側壁は強く被熱していた。カマド覆土は4層に分かれ、第II・III層は天井部崩落土に相当するものと推定される。火床面はIII層下面であろう。袖はほとんど遺存せず、辛うじて右袖に相当する位置から褐色粘質土が検出されたに留まる。

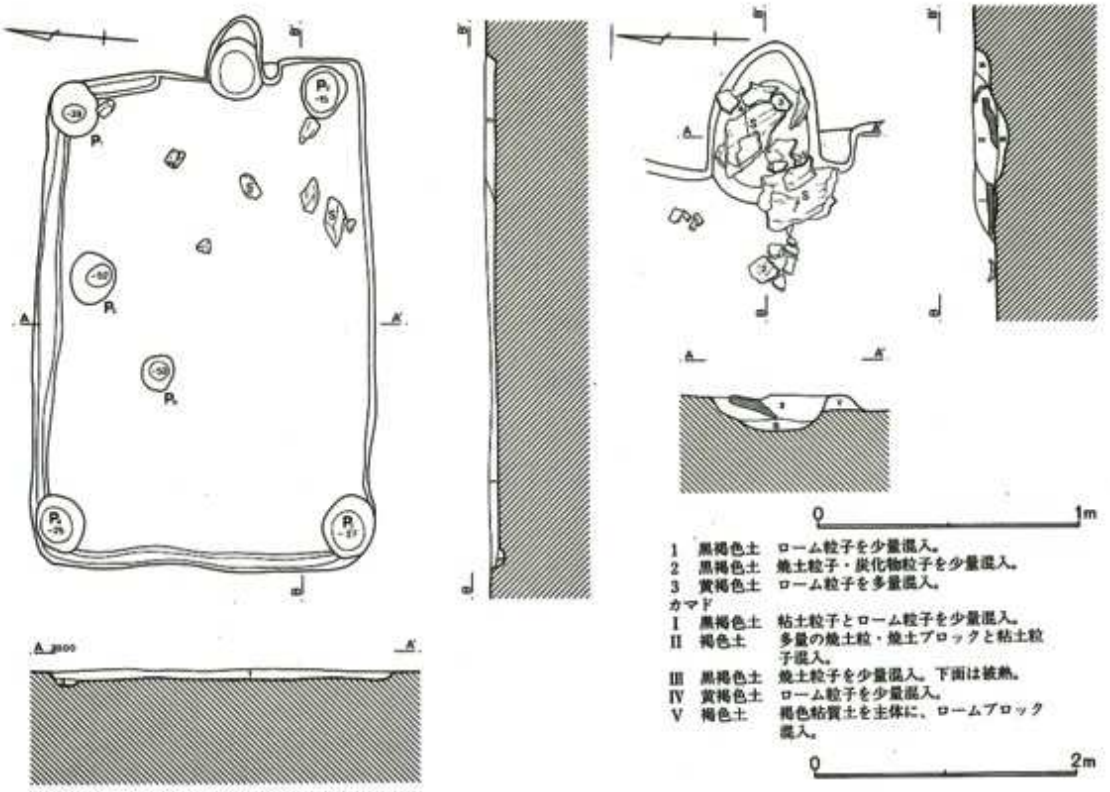
また、カマド内及びその周辺からは片岩系の板石が散乱した状態で出土した。おそらくカマド天井部の架構材に利用されたものと推定される。

ピットは6本検出された。P_1～P_4は住居各コーナーに位置するが、住居に伴う柱穴か否か明確にはできなかった。

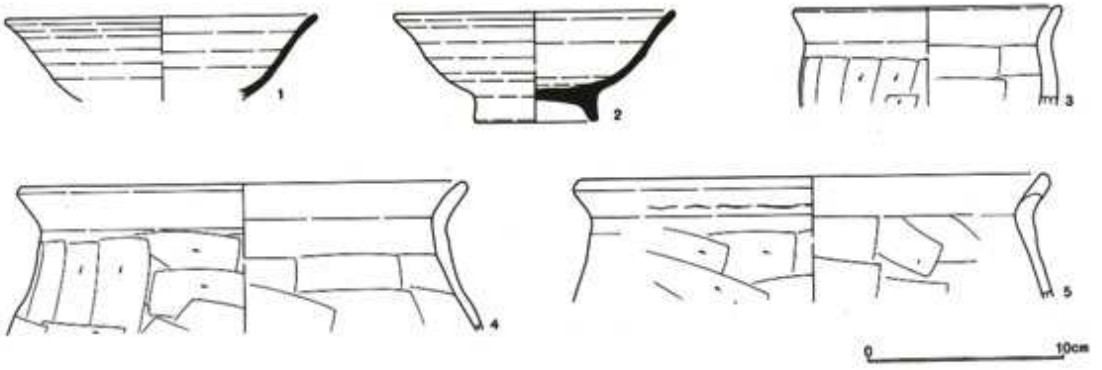
壁溝は深さ5～10cmで北壁と西壁を中心に巡っていた。

出土遺物は土師器と須恵器があるが量的には少ない。土師器は甕が口縁部破片数で4点、小形甕1点、須恵器は坏類が4点と甕胴部片が検出された。

第432図2は須恵器高台坏で、焼成は甘く明灰色を呈する。高台は比較的高くやや外方に踏ん張る。1も同様な器形となろう。何れにも白色針状物質が認められない。4・5は口縁部が「く」の字に



第431図　C区54号住居跡・カマド



第432図　C区第54号住居跡出土遺物

折れる厚手の甕である。胎土に白色針状物質が含まれ在地産と考えられる。土器様相から稲荷前XIV期に比定される。

C区第54号住居跡出土遺物観察表(第432図)

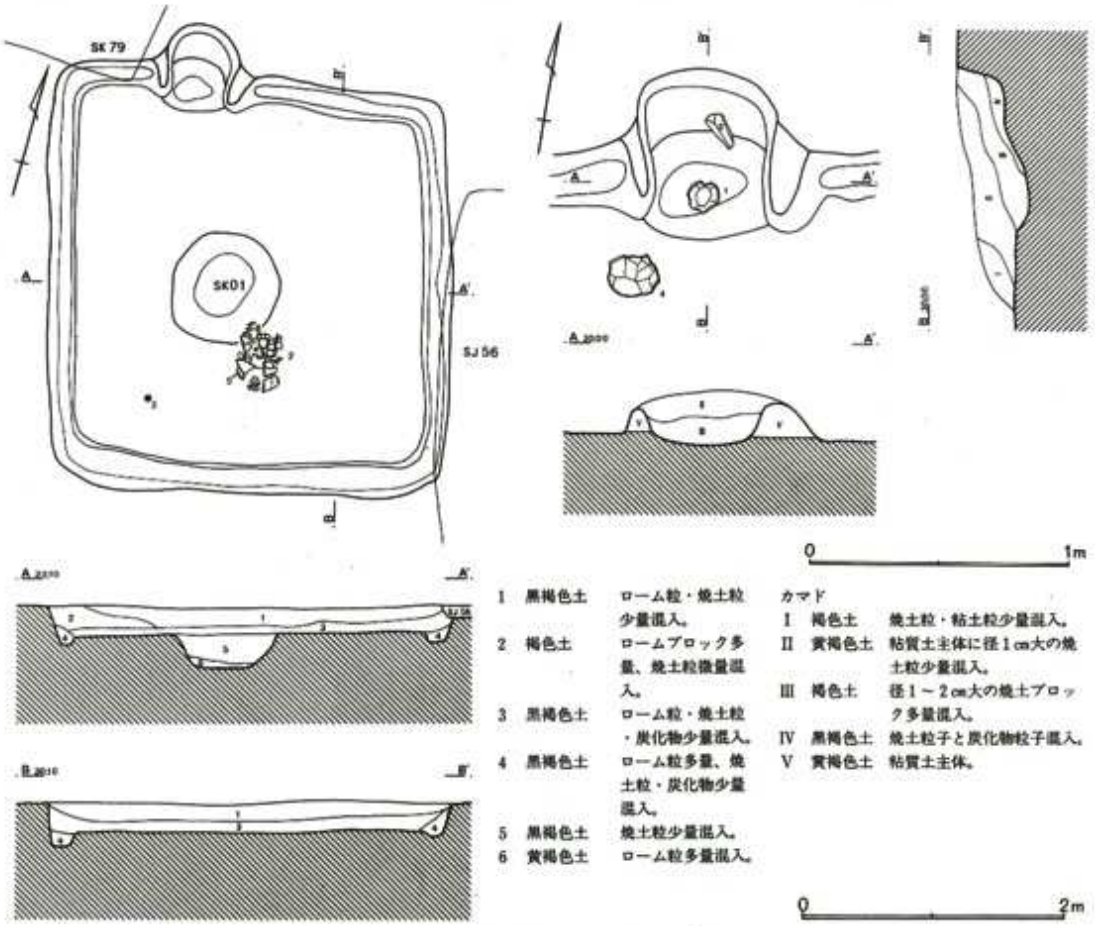
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.7)	4.2		ABE	C	浅黄橙	10%	カマド内
2	高台坏	(14.2)	5.5	6.0	ABE	D	灰白	35%	No.カマド15～19　前面床面(0～＋2cm)
3	小形甕	(13.4)	5.0		ABC	A	にぶい橙	20%	No.3　カマド内
4	甕	(22.6)	7.5		ABCJ	A	淡黄	25%	No.2,7　カマド内
5	甕	(23.6)	6.3		ABCJ	B	にぶい橙	15%	No.10,12　カマド内

C区第55号住居跡(第433図)

F・G-24区に位置する。第56号住居跡と第79号土壙に壁の一部を切られていたが概要を知るには差し支えない。形態は方形を呈し、規模は長軸3.28m、短軸3.06m、深さ20cmを測る。主軸方位はN－16°－Wを示す。

床面は平坦である。覆土は4層に分かれ、ローム・焼土混じりの黒褐色土を基調とするが、第2層には多量のロームブロックが含まれ、全てが自然堆積とはいえない。

カマドは北壁に位置し、壁を30cm程切り込んで構築される。遺存部分は燃焼部に相当するものと推定され、幅は55cmで奥壁は垂直近い角度で立上がる。焚口部は一段深く掘り込まれていた。煙道部は削平されたものと考えられる。覆土は4層に分かれ、第II・III層が天井部崩落土に相当しよう。袖は黄褐色粘質土を主体に構築されていたが、特に左袖部分の遺存状態はかなり悪く、そのほとんどが流失したものと推定される。また、燃焼部中央付近の底面に接して長さ15cm程の棒状礫が出土

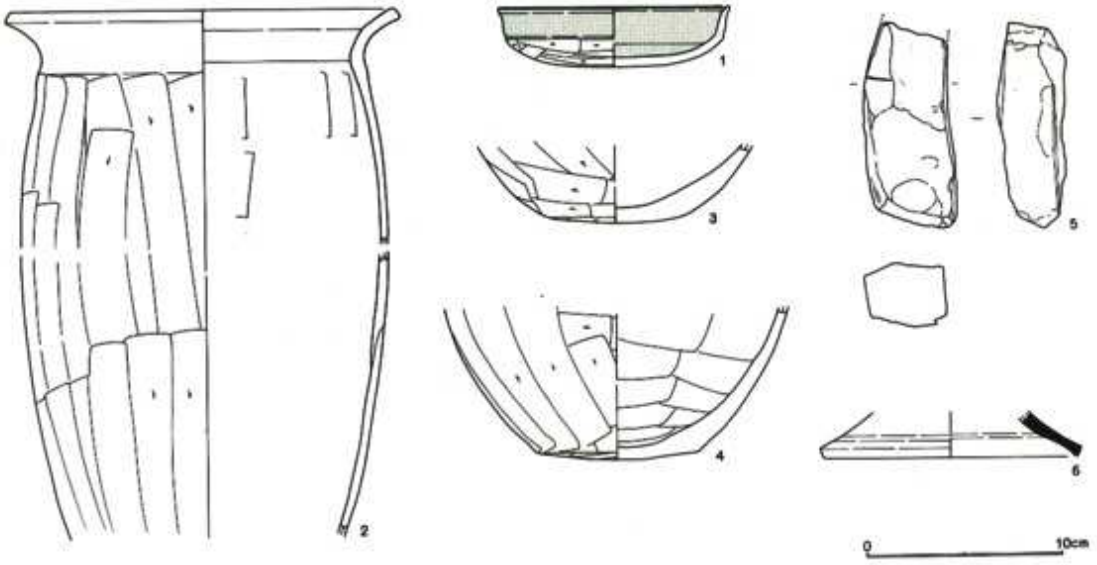


1	黒褐色土	ローム粒・焼土粒少量混入。
2	褐色土	ロームブロック多量、焼土粒微量混入。
3	黒褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物少量混入。
4	黒褐色土	ローム粒多量、焼土粒・炭化物少量混入。
5	黒褐色土	焼土粒少量混入。
6	黄褐色土	ローム粒多量混入。

カマド

I	褐色土	焼土粒・粘土粒少量混入。
II	黄褐色土	粘質土主体に径1cm大の焼土粒少量混入。
III	褐色土	径1～2cm大の焼土ブロック多量混入。
IV	黒褐色土	焼土粒子と炭化物粒子混入。
V	黄褐色土	粘質土主体。

第433図　C区第55号住居跡・カマド



第434図　C区第55号住居跡出土遺物

した。支脚に使用された可能性があるものの原位置を留めていない。

貯蔵穴及びピットは検出されなかった。土壙は1基、住居中央部から検出された(SK01)。直径80cmの円形プランを呈し、深さは30cm。上面の貼床は明確ではなかったが、断面観察及び土器の出土状態から住居に伴う床下土壙の可能性がある。壁溝は深さ10～15cm程で、カマドを除き全周する。

出土遺物は少なく、土師器と須恵器、砥石がある。土師器は坏が口縁部破片数で4点、甕1点、甑(把手)1点、須恵器は坏・甕・高盤の破片が計7点出土した。須恵器は混入であろう。

第434図1は模倣坏系の比企型坏で推定口径は11.7cmと小振りである。カマド内の第II層に相当する位置から出土した。土師器坏には他に同類が2点、口縁下に腰をもつ比企型坏が1点ある。2の長甕は口縁部が比較的強く外反し、胴部は緩やかに膨らむ。5は砥石で2の甕の下から出土した。両端を欠損し、残長10.4cm、重量210g。裏面を中心に破面が多く見られるがその後再使用した跡が残る。使用面は平滑である。土器様相から稲荷前IV期に比定される。

C区第55号住居跡出土遺物観察表(第434図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.7)	3.1		ABC	A	にぶい橙	30%	№79　カマド内　赤彩
2	甕	19.5	26.8		ABC	C	橙	50%	№64,65　覆土(+3～9cm)
3	壺		3.8		ABCE	B	橙	30%	№2　覆土(+17cm)
4	壺		7.8	8.2	ABC	A	橙	60%	№77　カマド前面　床面
5	砥石								№66　床面　残長10.4cm　重量210g
6	高盤		2.3	(12.8)	ABC	B	灰	15%	覆土

C区第56号住居跡(第435図)

F・G-24区に位置する。西壁部は第55号住居跡を切り、北壁は中世の竪穴状遺構(SX09)に破壊されていた。形態はやや横長の長方形を呈し、規模は長軸3.40m、短軸2.90m、深さは5cm以下と